

289-0867



1200500732311

289
7
④



始



289

289-0867ウ



1200500732311

7



臣外

鴻

雪

瓜



翁 爪 雪 鴻

明月好風正何處
而香何如夜
對人小菊白
茶蒼生
活肯逐
兵向馬尾
蒼

高勉

江明前

故門脇觀次郎氏藏

楓紫紅青
世然如呼
佳友岸鳥巾
山貌然
巖島
今年
政古
開秋
亨
自一稿

乙未一稿秋

八十二前雪心

森四郎三郎氏藏



鴻武久氏藏

鴻雪年翁



老幹
7
外

朝旭輝映下海江
 山上一
 每
 秋到

松平慶永
 鴻雪爪
 鍋島閑叟
 秋月種樹





翁衛兵三與地宮



翁郎三宅井吉

289
0.867

⑤

鴻雪爪翁碑銘

離世觀世、世機森然、是方外之士、所以覺醒當局執迷、授翰乾旋坤之活機也、高辨之於北條泰時、朝極之於三補正成、天海之於三德川家康家光、是已、明治之中興、周旋於諸元老之間、有暗贊冥助之功者、其雪爪鴻雪翁歟、翁名清拙、後更雪爪、號鐵面、宮地氏、系出於醍醐天皇皇子高明親王、子孫降為武臣、賜源姓、保安中有家次者、領備中宮地莊、因氏焉、後世移居備後因島青島城、天正中歸農、父諱長光、母木原氏、翁其次男也、文化十一年正月元日、生、甫六歲出家、就右見大定院無底和尚得度、天保九年入室嗣法、十四年住加賀祇陀寺、弘化三年應天垣藩主請、移住全昌寺、藩老小原鐵心銳精圖治、有重名、深歸依翁、時參禪、一日詢治安策、翁應聲奮棒打其肩曰、月落不離天、鐵心言下頓悟、後以幕府勳舊、轉機率先勤王、蓋有所受焉、安政五年應越前奉嶽公聘、轉住孝顯寺、公優遇、時拉翁遣逸勝區、囑從中着袈裟、人擬西園圓通、慶應中公在京師、會彥根侯請移錫其植福場清涼寺、公聞之不悅、翁呈詩曰、恩威到底如天濶、只許山雲自在飛、公乃許兼住兩寺、贈詩曰、唯願往來期不誤、爪痕好比雪中鴻、公以幕府親藩、贊王室中興、亦豈無所受歟、明治



皇風不淑、吾輩眼見三軍、
 海峽行各山、
 鳥山峰樹氏藏

後山、雪爪、高流、水院、松花、欲、
 雪爪、
 桑原幸作氏藏

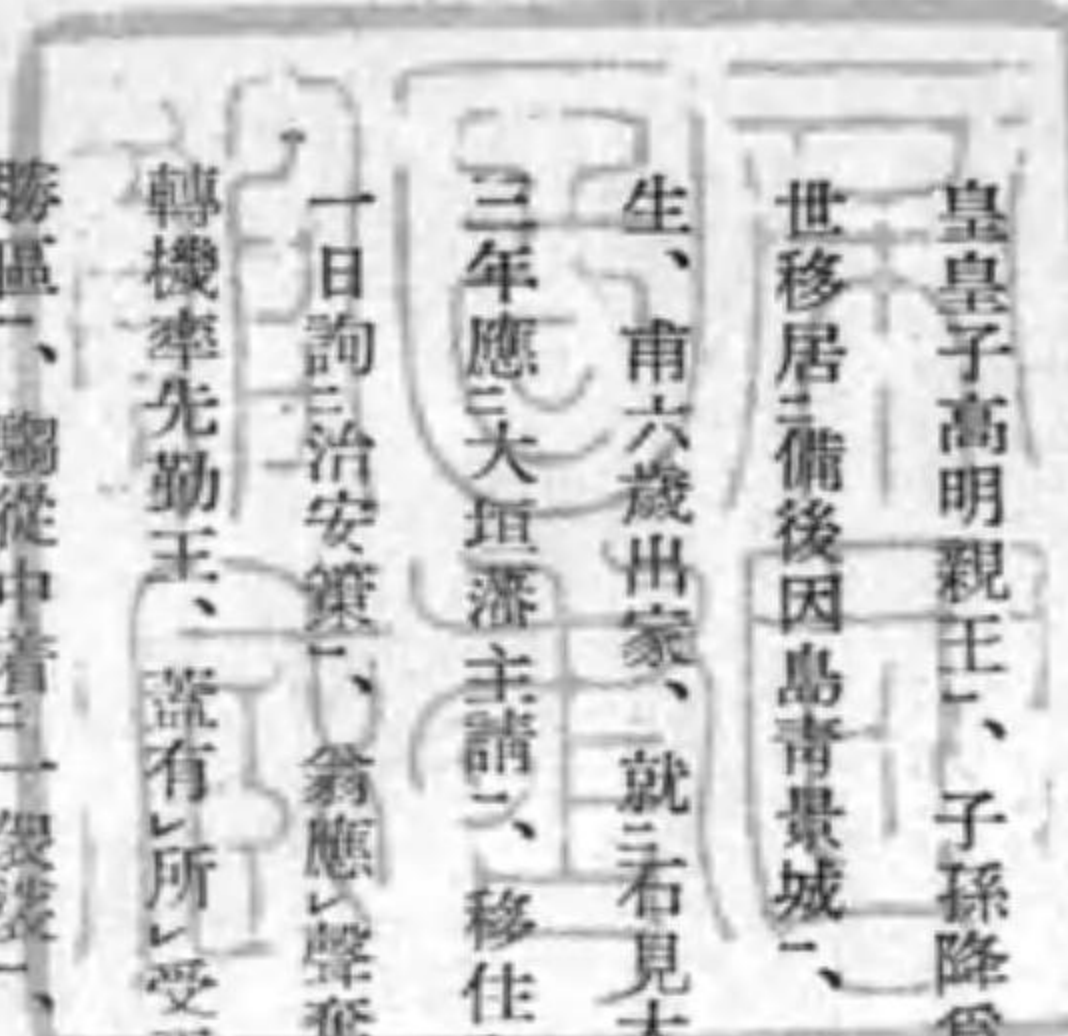
雪爪、
 大教、
 吉井章三氏藏

289
0.867

⑤

鴻雪爪翁碑銘

離レ世觀レ世、世機森然、是方外之士、所下以覺醒當局執迷、授翰乾旋坤之活機也、高辨之於北條泰時、朝極之於楠正成、天海之於德川家康家光是已、明治之中興、周旋於諸元老之間、有暗贊冥助之功者、其雪爪鴻翁歟、翁名清拙、後更雪爪、號鐵面、宮地氏、系出於醍醐天皇皇子高明親王、子孫降爲武臣、賜源姓、保安中有家次者、領備中宮地莊、因氏焉、後世移居備後因島青景城、天正中歸農、父諱長光、母木原氏、翁其次男也、文化十一年正月元日生、甫六歲出家、就右見大定院無底和尚得度、天保九年入室嗣法、十四年住加賀祇陀寺、弘化三年應大垣藩主請、移住全昌寺、藩老小原鐵心銳精圖治、有重名、深歸依翁、時參禪、一日詢治安策、翁應聲奮棒打其肩曰、月落不離天、鐵心言下頓悟、後以幕府勳舊、轉機率先勤王、蓋有所受焉、安政五年應越前春嶽公聘、轉住孝顯寺、公優遇、時拉翁道遙勝區、嚮從中着袈裟、人擬西園圓通、慶應中公在京師、會彥根侯請移錫其植福場清涼寺、公聞之不悅、翁呈詩曰、恩威到底如天濶、只許山雲自在飛、公乃許兼住兩寺、贈詩曰、唯願往來期不誤、爪痕好比雪中鴻、公以幕府親藩、贊王室中興、亦豈無所受歟、明治



雪爪翁碑銘
大起心鴻雪爪

大起心鴻雪爪

古井章三氏藏

桑原幸作氏藏

侯山より乍高流小院松花欲啼秀
鴻雪先初長河亦

龜山峰樹氏藏

雪風不汝之香也眼之三軍之海脈行各山
白雲的流花時香意遊然
中在る花の存在を 九十一の年

紀元春、翁在京師、讀五條勅誓、乃上書、大意謂、廣求智識、與歐米訂交、勢不可不
 解耶教之禁、然急遽解之、統御失方、則禍害不可測、莫若奉祖宗成法、合神儒佛爲
 國教、和協感化、一民德、民德苟一、外教何由得入、初朝廷有廢佛之議、爲之熄、三月與
 心遊嵐山、邂逅木戶松菊、大久保甲東、廣澤兵助、中根雪江等諸士、肥前閑叟公亦來、會
 花下、談笑酣暢、時王政雖既復、東北叛亂未定、公猶抱觀望、翁突如謂公曰、今國是一定、
 盍早改圖贊太政、公曰善、既去、松菊等謝曰、公胸中許多權數、翁舌鏗一擊盡矣、洵國家之幸
 也、未幾、公果出兵助東征、六月軍事總裁彰仁親王、遣使補翁北征參謀、翁賦詩謝之曰
 、山翁別有三濟民策、肯逐兵間馬尾塵、九月車駕東發、松菊請翁同扈、翁辭之、且勗曰、君唯
 遊心方外、不爲富貴所累、則錦衣大帶、即半裘一笠已、松菊首肯而去、明年朝廷置教導局、
 蓋本翁建議也、五月召爲局員、未幾、議不合辭歸、古香秋月候設祖道、土佐容堂公來會、
 醉餘書山高水長四大字贈之、遂締布衣之交、四年官欲以翁爲曹洞宗本山永平寺貫主、翁有
 所見不起、九月翁入京、再建議曰、方今僧侶無學無行、不足維持國教、宜設教部一省、
 嚴勵其學業道德、又宜選其俊秀者、遊學西洋、開智識、又曰官禁僧侶女犯、是以不可
 可行之法、強不能行之人、故陽持陰破、比々皆是、不若公許之、後女犯之禁遂解、僧徒

往々西航、十月任左院少議生、命在官中反俗、五年教部省遂立、以翁補出仕、翁因官令
 稱鴻氏、尋置神佛合同大教院、補中教正、八年寓芝山、會獨逸人聚我邦古器物、供縱
 觀、岩倉相公往觀、枉駕翁廬、翁置酒笑謔之間、謂公曰、道路相傳、官將廢漢學、吾邦二千
 年正倫理、持國體、儒教之力尤居多、今欲取彼長而舍我長、惑亦甚、莫乃後日行東修
 於西人、學詩書六經、猶今日古器物乎、公停杯默思久之、翌年廢神佛合同大教院、更置
 神道及佛教各宗大教院、翁掌神道大教院事、十二年累進大教正、十七年應御嶽教請爲管
 長、二十九年特旨叙從四位、三十七年夏有微恙賦詩贈小野湖山、湖山與翁同庚詩友、蓋
 告別也、未數時、端坐如睡而寂、六月十八日也、壽九十有一、特旨賜祭資金三百圓、行葬儀
 於青山塋域、茶毘分送骨於祇陀、全昌、孝顯、清涼、及品川海晏諸寺瘞之、會養廣島舊藩主淺野長
 勳弟雪年、配以正親町氏、至此承祀、衣鉢弟子十人、皆有德望、其餘海內受翁教成名者
 不少、翁炯眼隆準、白髮皎然、天資聰明、才敏氣和、宏度容物、人之有善如已有之、一接其
 音容、欽慕不能忘、禪餘涉邦典漢籍、又有詞藻、晚年歷叙平昔遊踪、曰山高水長圖記、蓋
 本容堂公贈語也、其文橫肆變幻、忽而禪機、忽而時務、忽而山水風月、不可模捉、而其心不
 須臾忘國家、卷尾一節曰、俯仰此三十年間、棋局幾變、着々優入神品、國手相尋凋落、余傍

觀之柯、亦將爛、嗚呼後之入神品者果誰、翁僊後未一歲、我當局者對宇內大敵手着々中機宜、能收全局勝、恨不使翁觀之也、銘曰、

神耶佛耶 儒耶俗耶 眼無彼此 心在國家

喝破巨公 方向歸正 混打宗旨 國教乃定

餘事文墨 波瀾浩洋 神采弗減 山高水長

東宮侍講文學博士三島 毅 撰

緒言

我が鴻翁の功績は云ふまでもなく明治維新の聖謨を暗賛冥助したるにあり、其國內思想問題を解したるが如きは、至誠純忠無慾恬淡の翁にして初めて爲し得る者と云ふべきである、人稱して白衣の宰相と云ひ、方外の名臣と云ふもの誇張の言にあらざるを知るのである、斯る偉人を郷土に持ちながら、其傳記を知るもの少きは實に驚くの外なき有様である、種々の理由あるべきも、中央に於ても之を知る人餘り多からず、唯一の自著山高水長圖記の一帙あるのみ、是れのみにては隔靴搔痒の嘆あるを免かれず、資料を得んと欲すること多年であつたが、其第卅五回忌辰に當り記念出版として服部空谷氏の「鴻雪爪翁」の發行せられ、茲に初めて光明を得たるの感があつた、然れども是れは發行部數の關係上到底地方人を満足せしめることは出来ない、又一面には我が圖書館に於ては先賢祭の一人として年々祭典を執り行うて居るので是非傳記の必要あり、遂に本書上梓の決心をなすに至つたのである、随つて前記「鴻雪爪翁」より借り來る處少からず、依つて服部氏に對し厚く感謝の意を表するものである、

本書發行に際し當主鴻武久氏大に賛同を表せられ、自ら發行人として署名せられ、且つ多數の資料

二
を提供せられたるは感銘措く能はざる處で、其他或は援助を與へ或は資料を贈られたる人々少からず、併せて謝意を表するものである、

紀元二千六百年七月七日

三原圖書館長澤 井常 四郎 識

方外 鴻 雪 爪

一、因島いんのしま

鴻雪爪の傳を書かんとすれば先づ其の出生地を知るの必要がある、因島は瀬戸内海で所謂七里七島、五里五島、一里百島と云はれた、周圍七里の大島の一つで、尾道三原を結んだ三角の一点に位して居るので、昔時は沼田海賊の勢力範圍であつたが、源平戦争以來北條方の威力と共に伊豫海賊の勢力圏内に入った、其の前年、後白河院が長講堂を設け給ひてより此島を隣島生口島と共に御領として長講堂に附せられた、後幸ひにして持明院統に屬したが爲に應永十四年迄も猶御領としての文献があるのだ、文安六年に村上吉資が金蓮寺を建立した棟札にも本家領家を認めて居るから實に四百年間の御領地であつたと思はれるので皇室に對し奉り非常に關係の深い地であつたと云ふことが知られるのである、因島の名は和名抄に載せてあつて「與乃之萬」と云つて「ヨリノシマ」の略なのだ、それが御領となつてからは島を「院の島」と云ひ庄を「御庄」津を「御津」と云つたのだそれから後は口では「院の島」と呼びながら文字は前の因島と書いたものだ、文政年間の書出帖に



も院島（因島とも書く）とあるのだ、この様に皇室との関係が深い為め建武中興の際にも法橋幸賀といふ様な忠臣も現はれたのだ、是は沼田の城主である小早川家に吉野に候した人々の澤山あるに因つても偶然でないことが知られるのだ、世間に幸賀と村上義弘とは同一人だと云ふ者もあるが是は間違だ。

二、祖 先

官地の家系は遠く醍醐天皇第四皇子西宮左大臣高明親王に出で子孫降りて武臣となり源姓を賜ふた保安年中家次といふものがあつて備中官地莊を領し氏とした、數代の後、次政備後の探題となり吉和鳴瀧城に居住す、廣俊を経て弘躬に至り木頃城主の爲に攻められ遂に因島村上家に投した、是は應永年中の事で其子明光佛通寺に入り一笑に従ひ參禪す、其後村上氏に依つて名聲を保ちしが村上吉祐山口に移つてより農に歸した。

金蓮寺棟札

奉新造立寶鏡山金蓮寺藥師如來精舎一字
備後國御調郡因島中庄村

右祈願者奉爲金輪聖皇天長地久御願圓滿殊者當村本家領家庄官衆民大檀那家門繁昌武運増進息災延命増長福壽現世安穩後世善處

文安陸天巳己八月吉日

住持權大僧都法印快秀

領主村上備中守源吉資

大願主沙彌明光子息

官地大炊助大江資弘

大工沙彌永金藤原滿村

小工 十二人

同寺棟瓦の刻文

金蓮寺御堂上葺之事

寶徳二年庚午四月五日始之

住持覺照房金資快秀

大檀那官地大炊助沙彌妙光

三、生 家

祖父正興三の庄に住す、最も經濟に長じ家産殷富、父長光、天資謹嚴自ら奉すること儉薄、専ら心を利用厚生に用ひ、家を弟政武に譲り、中の庄に移る、家號を竹の内と云ふ、力を開拓に致し土生田熊の兩村に扇、西の二新開を築き、尋いで中の庄海邊に起工したが工事困難遂に失敗して家産を悉く蕩盡した、弟秀明與三兵衛と云ふ、父の後を承け、幼より一意専心勤儉力行、家政を恢復し遺志を繼承して遂に工事を竣はる、之を蘇功新開と云ふのだ、其里正として職を執ること拮据精勵、恩威並び行はれ、成績顯著なるものあり、遂に郡の割庄屋筆頭となり、名聲噴々たるものがあつた廢藩の際中士に擧げられ、縣の會計を掌り、大に民政を釐革し、貢獻する處多く、後職を辭して藩主淺野家の財政顧問となつた。

四、出 家

雪爪翁は文化十一年正月元日因島に生る、與三兵衛長光の二男で、母は木原氏といふ、長男松之助は早く夭し、三男秀明家を嗣いだ、翁は六歳の時石州津和野大定院無底に就いて僧となつた、無底は因島小林家の出である、無底歸省の際一見して師弟の縁を結ふこととなつた、時に文政二年無底二十七歳の壯年時代であつたと云ふことだ、是から名を清拙と改め鐵面と號した、後雪爪と改め維新後鴻カハトウ氏を稱し雪爪を名とした。

五、高島秋帆と交る

幼年の時はどんなにあつたか分らぬが只一つ次の話が傳へられて居る或る時畫家が寺に逗留して居つたが、小僧さん望みのものを何んでも書いて上げようと云つたら、それでは松風の音を書いて下さいと云はれて畫家も一本參つたと云ふことである、小供の時から才氣潑刺たる處があつたことが知られるのである。

それから少し年を取つてからのこと、行脚あんぎやに出て歸りが豫定より遅れた、師無底は頗る不機嫌で居ると、匆々室に入つて來て禮がすむと、「何せ遅かつた」とねめつけた、雪爪は直に「坐上に虎とら假まへのあるあり」と云つて土産の包を差出した、流石の無底も破顔一咲したと云ふことだ、是は大阪の虎屋假頭が師の大好物であつたからである。

天保六年春行脚して長崎に行つた、先づ皓臺寺に黄泉和尚を訪ふた、時に次の問答があつた。

雪、諸聖を慕はず已靈を重んぜざる時如何、

黄、大海枯渴す、

雪、猶ほ是れ一滴を餘す、

黄、上座沈没すること勿れ、

雪、細腰餓死に至る、

黄泉咲ふて點頭いた

此の問答で黄泉は翁の不凡なるを知り、喜んで留錫を許し侍者を命したと云ふことだ。

黄泉は此時維摩經を講して居つて僧俗共に來聽した、高島秋帆も其一人であつたので深く交るに至つた、會ま、翁病に罹つたが苦しみを忍んで平日の如くして居つた、秋帆は之を見て學問の爲に身を傷けてはならぬと云つて、其の別莊に連れて行き、丁寧な世話して全く家人のようであつた、毎日牛乳を飲み、脚湯に坐し、攝養數月で體中の稍佳なるを覺れたと云ふ、是時には世に牛乳脚湯の効を知るものは頗る稀なるに、秋帆は疾くも洋學を治めて療法を知つて居た佛典には牛乳脚湯の徳を説いてある、されは洋法は全く佛教に原いて居ると云ふことが知られると翁は云つて居るのだ、

又秋帆の先見、黄泉の碩徳、幽麗の瓊浦を三絶と云つて此三絶の爲に三年逗留したと云つて居る、八年二月廿日長崎を辭して大垣に歸つた。是歳海内飢饉大墟平八郎の舉兵の事を途中で聞いたと書いて居る。

是より先、無底は文政八年越前武生の龍泉寺に移り天保の初年美濃大垣の全昌寺に移りた翁も亦之に隨從して居つたのである。

六、首座職

天保九年夏無底會下の首座職となつた此時の法語を載せて見よう。

法無剩法、語無剩語、觀面不礙、蓋天盖地、無迹可求、無心可得、非言語可通、非

寂默可造、山頭老漢、今日分座、使余畫混沌眉目也、當堂雖不正坐、娘孃口、誰縛舌本、

咦、俗人沾酒三升、此地無金一兩。

何の事か意味は分らぬが小原鉄心は身世を顧みるに禪に資するもの少しとせず余の禪を聽く是日より始まると云つて居るのだ。

此年翁は師の印可證明を受けて入室嗣法し宗師家たる資格を完成したのだ。

七、篠崎小竹を訪ふ

天保十三年九月某夜淀川を下つた、柳灣葭汀全く晝のやうだ、客悉く眠り櫓の聲を聞くのみである時に一詩を得た。

百里秋江不_レ起_レ濤 蘆花烟水緩移_レ篙

薩言越語人都睡 獨占篷間山月高

其の口吟するのを聞いたものか隣席の一人が

君は禪僧だ話せるやうだ大阪に來たなら我が梅花社を訪ねたまへ

と其名を問へば有名の篠崎小竹であつた、遂に同行して其の門に至り暫時逗留した、時に門生に白井龜太と云ふものがあつて神童の稱があつた、小竹之を戒めて云ふ、汝は早慧で讀書するに五行同時に下る程だが、未だ躬行實踐が出来ない、備後の周策は性來碁が上手で僅か十歳の時、既に高級に上り京に遊べば老手も皆逡巡したと云ふことだ、碁は固より小技で文學と同日の論ではないが、其造詣の深いことは、連も汝の及ぶ所ではない、十で神童、十五で才子、二十過ぎたら並の人と云ふが早慧は更に恃むに足らない、是が注意せねばならぬ處である、又阿波の國に孝子があつた一太

と云つた、天保八年の飢饉に其父村民を集め富豪を掠奪して貧窮に施した、捕へられて斬に處せられることとなつた、一太は毎日牢の側に行き號泣して父の死に代らんことを請ふた、獄吏も之を憐み錢物を與へて來ることを禁した、一太は是れから毎日數里の道を通ひ、金刀比羅神に參拜して父の命請ひをした、藩侯其の至孝に感じ特に死を宥め流罪に處した、一太は現に島中で父に侍して居るが、是が昭代の麒麟兒と云ふべきであらふ、汝は之に倣へと、龜太は之に感愧して一太傳を作つた、翁は傍聽して小竹の學が道義に基いて居ることを知つたと云ふことであるが、同郷の周策を例に引かれた時の感はどんなにあつたであらふ、侯伯の大阪を過きるものは其門に禮を枉げ多くの學生が贊を執つて儒林の巨擘と爲すものも尤もだと思つた、翁は居ること數ヶ月得る處が多かつた、辭去するに當り小竹は送つて女婿後藤松陰の家に至り、明の永覺禪師の眞蹟を示し曰く、吾家の重寶人に見せないものだが、君は同流だから一覽に供するのだと、翁の賞觀して止まないのを見て遂に一本を臨模して贈つた其詩は

何年浮出碧峰頭 吐_レ月吞_レ雲事々幽

受得靈山藏六訣 世間休_レ咎付_レ東流_一

八、祇陀寺

天保十四年三月加賀國鳳凰山祇陀寺の檀越武田氏の請に依つて住持することとなり是寺は大智禪師の開山である晋山式を行ふた、左の香語を存して居る

觀面呈靈、直絶ニ侍侍、柳綠花紅、皆隨ニ聞見、庖丁解牛者也、養生者取之、輪扁劉輪者也、讀書者與之、山衲今日拈ニ鈿斧ニ與ニ大家ニ商量、免起鶴落、使先聖瞳ニ若乎後、見之不取、思之千里、

師無底は此秋金澤の名刹大乘寺に移住し翁も亦輔佐の爲めに移つた、翌弘化元年五百人の大結制の修せんとして準備中無底は俄に遷化した、されと猶遺志を嗣いで之を終了した。

九、白山に登る

大乘寺にあるの日空巖居士と白山に登つた、行くこと六里吉野莊に至つた、是所は大智禪師安禪の遺趾である、四面皆山、溪流其中を貫き怪巖奇石、鶴起虎伏して尤も壯觀である、禪師元より歸つて此山を開き大に道化を揚げた、後肥後に還り菊池武重に頗る崇信せられた、菊池氏の家聲は武重か

ら盛になつた、武重の功烈は禪師の薰陶に因つたと云ふことだ、日中民家に就いて茶を呑み又山間水際に行くこと數里、黄昏白山の麓に至り一樵家に宿した、翌日朝早く糧を裏みて發し麓より頂上まで九里強、山路崎嶇草を排いて行き衣を褰けて渉る、溪盡きて山、山盡きて溪、羊腸百折、最も險しき處は巖石に付き手を把つて攀つ笠檐覆背、前者の足は後者の肩と相摩して行き暮刻山頂に達し巖室に宿した、室は崖に倚り柱を架け石を穿つて泉を引く、登山者は皆米盥を携へて登る、翁は自ら竈に就いて飯を炊いだ、寒さは嚴冬の如く薪を焚いて煖を取つても終夜寐れなかつたと云ふことだ、曉を待つて室を出でたが旭日は未だ昇らず下界は清澄だ、眼界幾百里なるを知らず、富士立山は歴々として指點すべしだ、嶽頂は白山權現を祀る、宗祖道元禪師在宋の日、助筆の靈に感じたと云ふことだ、それから天壇に上り拜禮して過ぐ、稍降りて池がある天の池と云ふ、周圍一里あまり、水極めて深く、極めて冷かで、靈蛇がこもつて居る、崖深く水に至るまで數十丈あり、之を臨視すればぞつとするやうだ、空巖は膽雄崖に附いて下り、潭水を汲んで茶を煮た、忽ち向ふの巖角に甲冑を被て立つ者があるのを見た、或は天狗かと疑ふた、近けば空巖の知人金澤藩士河野久太であつた、之を問へば近頃偃武日久しく甲冑を用ゐず、若し之を人境に試みれば人之を怪しむ、故に深山中に驗すのであると、此人の心を武事に用ゐるは誠に貴ぶ可きである、日漸く出て雲散し霧消

わ四望潤然たり、雲を躡んで山を下り路を越前に取りて歸つた

一〇、全昌寺

大垣全昌寺は戸田家の菩提所で洞宗の名刹である、嘗ては從僧として居ること十年、今亦藩主の聘に應じ寺主となつて第二の故郷に還り來る、稍意味の異りたる錦衣歸郷の感なくんば能はざるなり、歸來るもの迎ふるもの皆涙を吞んで悦んだことであらう晋山は弘化三年四月二十二日であつた、其上堂法語は

瞿曇說不得、欠齒不將來、誰家竈裡火無煙、雖然盡法無民、強立兒孫邊、則道固圓通、極大至小、刻微析精、無由指點、是以所入之門、所出之路、皆是在造次顛沛、故作用無跡、自泯形影、若人認得出入活路、卓絕邊際、左右逢源、山衲今日不免爲蛇畫足、噫、衝開碧落、松千尺、洗出白雲、水一潭、

一一、小原鐵心

小原鉄心は大垣藩の城代だ、勤王輔藩、能く維新の大政を翼賛し奉つた功臣たるは誰人も知る處だ諱は忠寛字は栗郷二兵衛と稱す維新復古の初の徴士となり入京、王事に鞅掌し參與に拜せらる、後會計官判事となり、江戸府判事を兼ね、廢藩後大垣藩大參事となる、人と爲り磊落、狀貌魂偉、性又酒を嗜む、其偉人たるは察すべきである、鉄心は翁に因つて心膽を固め翁は鉄心に依つて人に知らるゝ處多く、其交遊實に水魚の如きものがあつた、鐵心には中村規一氏の三百頁に近き詳傳があり鉄心遺稿九卷があるのだ。

一二、總持寺

諸嶽山總持禪寺は能登國櫛比庄にあつて、特賜弘德圓明國師此山を開き、普く人天に接して聲徳四方に馳せ、遂に宮中に聞けた、元弘中後醍醐帝十種の疑問を垂れられ國師奏答し奉つて頗る叡旨に適ひ、遂に曹洞大本山賜紫瑞世道場とせられた、爾來歷朝崇敬せられ、門風大に興り、末寺海内に遍く、伽藍充實し、雲衆三千に滿つるの有様だ、翁は嘉永二年八月を以て入つて輪住することゝなつた、翌年四月十五日結夏して上堂拈香した、

盤結其根於劫外、先天爲心組、蔭涼其枝乎偏界、負地爲物初、恭蒸向寶爐、端爲奉祝延、今上皇帝聖壽萬年、伏冀陛下、德合乾坤、仁其政、子育群品、昭其猷、明齊日

月、照臨八方、因垂語曰、若論本色、言發不聲、色前不物、所以道天不能覆、地不能載、虛空不能容、日月不能照、雖然獨脫無依、這中有箇漢、輕々喚去、造次顛沛、與他把手共坐臥、朝咲破一念三千、夕論三斤普見法門、互相酬唱、如兩鏡相照、遂使山河大地一一放大光明、令蠢動含靈箇々壁立萬仞、試問此人有何技術、而與他如是親密、諸仁者若向意根下一卜度、則當面蹉過、何劫認得此人、參曾向滄溟下浮木、夜濤相承接、盲龜、

一三、全昌寺の火を感ず

嘉永三年十月翁は三國港の惠雲寺に居つた、一日雲水を連れて三國氏の齋に赴いて、讀經の際忽ち燒熱波羅門の縁を感じた、因つて齋家に告げて火を戒しめて歸つた、間もなく大垣からの通知に接して本月廿九日正午火を失して堂宇悉く烏有に歸したといふのだ、其れで嚮に感した所は全く其れであつたことを知り、早速大垣に歸つた、時に鐵心は江戸にあつたが次の詩を寄せた、

賀火柳州玄理哉 物兼心事一併灰

想師災後提如意 仰睨乾坤大咲來

檀越の人々は集つて重修せんことを議し翁は其功德のなきことを説いたが聞かない、天は賑ひ地施し富者は財を出し壯者は力を出し、幹者は智を出して指揮し皆争うて喜捨し四年春二月に起功して冬十月に落慶するに至つた、烏有の境に俄に一大伽藍を湧出して其結構舊觀に倍した、翁は大衆と佛像を奉じて新殿に遷し香火盛に起り其の速に成りしことを驚かざるものは無かつた、其の最も力を致せしものは戸田睡翁、中村五左、中西彦左、市川少藏、増田耕藏、松野文治、下里六右、伊藤五郎治、石原嘉平治、白木恕助、長屋定平、久富増二、安藤左兵等の人々であつた。

一四、大旱雨を禱る

嘉永六年六月大旱す時に翁は全昌寺に居つた、一日郡宰高岡西溝來りて曰ふ、民間雨を神に禱る日夜引きも切れざる有様であるが、其人々は大抵眞宗の信徒である、彼等は平素は更に神を信ぜざるに、稻枯死する時は此状態は實に笑ふべきであると、翁曰く是輩は愚民であるから深く咎むべきではない、君は郡宰であるに民の艱苦を坐視するは大に咎むべきではないか、そこで一詩を作つて示した

早田亀坼稻麻枯 大地生靈何日蘇

巫覡無知猶禱雨 坐薪縣令一人無

西溝拜して實に私の罪だと云つて是から猛省自ら勵んだと云ふことだ。

一五、安政の地震

安政元年六月地震あり、屋倒れ人死するもの數を知らず、翁之を憂ふること甚し遂に一詩を作る

去年海内遭旱魃 俄孳誰能安生活

今年畿甸又大震 屋崩人斃地軸折

君不見夷艦泛海簇妖氛 輦下失火災亦頻

莫乃陰陽失調理 街說巷語何紛々

爲報魯女且休憂 廊廟肉食自有人

吾曹住在山林間 天事人事非所論

九年儲積亦爭識 但喜今秋幸有年

不獨生民有喜色 餘澤自見及空門

遺穗一飽真知足 瓦鉢生計亦國恩

一六、龜峽の閑棹

安政二年十月雪爪は雲水を率ゐて雲州直江の妙相寺に結冬した、一日鹽冶宜堂畫手玉江等を携へ神龜峽に遊んだ、宜堂は易を此峽に讀み自ら武夷九曲に擬し篤く朱晦庵を崇ぶものである、舟を泛べて峽口に抵つた、老松一株あり頗る怪である、此處が仙凡の界だ、是より峽に入れば杳然として人間にあらざるを覺ゆるのだ、一翠屏がある峽流急に駛せて奔雷の吼ゆるに似て居る、舟棹一轉すれば景色も亦一轉し蠻は迎へ嶂は掛し人をして應接に遑あらざらしむ、山は皆鼓を帯び斧劈、或は荷葉、恰も倪黃の畫を見る様だ、又行くこと半里強、兩岸勢逼り水濶れ石出て舟を嚙む乃で舟子は百丈の繩を把つて舟を挽く、溪稍開けて遙の雲際に人家の隱見するを眺めた、是ぞ所謂秦を避くる人の居る桃源かと疑ふた、時に楓葉は霜に飽いで紅に、疎樹幽竹と相映じて、谿は一段と色を添へて居る、又行くこと一里弱、巉巖嵯峨として谿途狭く水逾激す、舟子は拊々として力を用ゐる棹の折れんすること度々であつた、巖角を掠めて過ぐれば飛沫は人を襲ふ、崖上の瀧は直下して白布を曳いて居る、稍前めば溪は忽ち暗黒となる、怪んで天を仰げば奇峰は頭上に矗立して高きこと各數千尺、全身悉く石、少しも土を戴かず蒼松數百株、石間を點綴し、或は欹つものあり、或は倒さなるもの

あり、蛟龍の舟中に墜ちんとするもの、様である、衆皆色を失ふた、風は絶壁より來つて、波は湧き崖は動く、眞に神境だ、峽中の奇は全く此に至つて極まるのだ、土地の者は之を立材と云ふ、傳へ云ふ上古天神降臨の地だと、翁は山水の癖あり足跡殆ど海内に遍きも未だ是れ程の奇絶は見たことがないと、宜堂は此峽僻陬に在つて近頃中島棕隱廣瀨旭莊が來遊したが題詠して秘奇を顯すものがない、山水も窮達があると云ふ、それで翁は一詩を石に題して去つた、

松落扁舟徹骨清 青山疊々只麼青

千秋如侍吾來倚 上有雲巖萬尺屏

峽中佳竹を産す、乃ち二本を斫り、一は小原鉄心に贈り、一は翁自ら蔵した、事終りて歸途京都を過き、畫手黃仲祥に逢ふた、仲祥は神龜峽の人、峽中の一勝を其竹に畫いた、名けて神龜杖と云ふのだ、小原鉄心題して曰く、

師是麻衣草座公 莫將丹也視吾儂

雲山一片計逾決 龜峽當他五老峰

翁の此行は最も意に適したるものと見ゆ五言長篇と三絶句とを存して居る。

一七、鷗居雨を話す

門に翠竹あり、池に芙蓉あり、牕に芭蕉あり、座に鉄心居士あり、主人を海鷗となす、此數者あり余や以て遊ふ可きのみ、是日雨意蕭澹談百年後の事に及ふ、覺えず飲過すること三蕉、陶然として黒甜郷に入る、時に丙辰五月念八日なりと、此の短文意味する處何者ぞ、語る處何事ぞ、悠々自適の中、回天の大業此處に兆せしものではあるまいか。

一八、藤森弘庵來る

安政四年碩儒藤森弘庵門人小崎公平を連れ漫遊の歸途大垣に寄り翁を訪ふた、時に小原鐵心毎日碧巖の講を聽いて居つた、弘庵慨然として曰く天下大事の時に當り、有爲の人を得て之と謀らんと思ふに小原鐵心山田方谷は即ち其人である、曩に方谷を備中に訪ふ、華嚴經に就いて談するのみで一言時事に及ばなかつた、鐵心も亦碧巖を讀む、志士禪に逃る天下を如何せんと、翁笑ふて答へず、一日快晴弘庵を伴うて養老の瀑を見る、正午、山に到り千歳樓に飯す、樓は山巔に在つて一望十州に達す、飯し罷んで樓を下つた、水聲雷の如く一步は一步より大に、峰は愈峻く谿は愈遠く、巨巖

屏風の如く、楓柵雜生す、仰げは飛瀑絶壁に懸り長數千尺、白龍の雲窟を出つるが如く、飛沫人を撲つのだ、弘庵驚き喜んで青蓮を地下より起さるを恨むと云ふ、兩人共に衣を解き泉流に浴し頓に暑熱を忘れた、乃で石屏に茶を煖し一啜し、相偕に幽賞した、其夜は千歳樓に宿る、蟲聲地を匝り月高く山靜に兩人相對して天下の形勢を論し、延いて儒佛の異同に及び、夜深く寢に就いた、次の日晏く起き、徐に山を下り、別路を取り、漲後の村落を過く、水未だ退かず舟を雇うて、芋圃稻田の上を直航す、弘庵水害を問へば舟人曰濃中の水村此に類するもの多しと、弘庵愁然として樂まず、是より一路波塘、綠樹蟬聲あり弘庵堤防の方策を論じ、且つ説き且行く媿々として已まず、夕方横會根に抵つた、村豪安田彦八喜ひ迎へて、之を樓上に延いた、加越の諸山青を送り碧を呈し全勝一樓の有となる、主人は風流謡曲を善くす、酒間墨を磨り弘庵に樓名を撰せんことを乞ふ、山藏樓の三字を書す、謡曲の「さんぞうらう」に取るのだ主人聲に應じて扇を手にして謡ふ、座客大に咲ふ、適鐵心舟に詩友數人を載せて來る、興更に旺なり、翁弘庵共に飲を解せず、鐵心は主人と酒量相敵す、連りに巨觥を傾けた、今夜蘇遊に做ひ蘇水に泛ぶは如何と、衆皆諾して樓を下れば月已に舟にあり、主人は酒榼と茶籃とを具へ諸客と同く載る、舟は杳然として風蘋煙柳の間を行く、舟中赤壁賦中の字を分ちて詩を賦す、鐵心の詩に曰く

忽被_二坡翁餘興催_一 泛游會_レ客又奇哉

休_レ言此艇輕_二於葉_一 天下人豪載得來

時に月白く風清く意況仙ならんと欲す、鐵心曰く僕嘗て隱流未_三必解_二風月_一、俗吏何曾知_二國家_一の句あり、隱流と俗吏と始て與に語るべきにあらずやと、弘庵曰く善しと、且つ曰く今夜の遊は槩を横へ詩を賦するにあらずして、月を見て兵を論するなりと、是に於て交々古今用兵の迹を論ず、夜半舟大垣に達す、翁は衆と分れ弘庵を伴ひ寺に歸る、弘庵欣然謝して曰く、樂哉是遊、廬山赤壁の二遊を并す、是遊なければ余は殆ど有爲の人豪を失ふ處であつたと、其後弘庵は江戸に歸り、幕府に捕へられ、江戸退去を命せられて、下総の行徳で亡くなつた、翁の詩

溪聲遠導_レ人 一路入_二乱碧_一 全山皆青松

滿澗盡白石 老樹勢如_レ攫 峰逼溪忽極

中有_二白龍跳_一 號怒下_二雲壁_一 維昔元正宇

至孝天感激 一掬水化_レ酒 薦_レ親飽_二靈液_一

美名千歲流 紀元照_二青冊_一 此山欲_二一跋_一

十年橫_二胸臆_一 丁巳八月秋 果遂著_二游展_一

頼有_二文豪朋_一 俯仰質_二遙昔_一 下_レ山樓可_レ倚

脱_レ藤恰良夕 秋風吹_二暮雲_一 寒碧天如_レ濯

夜來清不_レ寐 起視_二山月白_一

一九、霞山人の廬に會す

古人句あり好句は翻て思外より得、佳遊多くは悶中に向つて成ると、蓋し事偶然に出づるを以て云ふのである、安政四年冬鐵心は翁に郊外竹鼻に遊ばんことを勸む霞山人の廬に會せんとするのだ、是日霜晴れ遊情勃然たるものがある、乃ち筇を呼んで寺を出た、途に西溝海鷗の二人に逢つた、相拉へて行く、天氣春の如く村樹黄を殘し、野渡舟を呼ぶ、倦めば石を拂ふて憩ひ、渴すれば瓢を傾けて飲む、忽ちにして雨來り笠濡り衫濡ふ、數村を過ぎて遙に馬の嘶くを聞く曰く是れ鐵心の馬なりと、至れば老柳の下に立てり、門を認めて入れば鐵心先づ在り、山人飲を設けて待つ、山葵欸冬香潔し、酒間揮灑して以て歡娛を助く、遠鐘夕を報ず、鐵心曰く歸路舟を藍川に艤し、以て餘興を盡すべしと、水涯に抵れば風波驟かに起り、舟を進め難し、鐵心篙者を勵し舟を行る、天方に暗黒咫尺を弁せず、但雁語櫓聲を聞くのみだ、衆首を篷底に聚め劇談通飲し、斗樽立るに倒る、鐵心西

溝醉うて臥し死人の如し、須臾にして風息み雪作る、鐵心蹶起し快々と叫び篷の頭を蔽ふを去つて更に酒の身を被せんことを求む、暫くにして凍雲漸く散し寒月徐に吐く、山水清峭、乾坤皆白し、衆奇々と呼ぶ、月隠れては雪飛び、雪歇んては月現る、寒江水瘦せ舟屢沙に膠す、枯蘆の間に棹して墨股驛に達した、一旗店を叩いて餐を取り、四更寺に歸つた、是遊隱と晴と雪と月、頃刻にして變幻す霞山人の筆と雖も恐くは狀することは難いであらふと鐵心の詩

飯舟疇昔興 有_レ客問_二何如_一

醉倒人如_レ死 滿身雪寸餘

二〇、月瀬に春を問ふ

翁嘗て齋藤拙堂の月瀬紀勝を読み鐵心と同遊を約すること數年であつた、拙堂之を知り毎春花候を報じ來遊を促した、安政五年越前に赴くの時が迫つた、鐵心曰く師、錫を越に移せば月瀬を距ること逾遠し、吾今官事の爲に同行するを得ず海鷗に代つて同行せしめん師何ぞ一遊せざると、翁即ち二月八日を以て海鷗と共に發す、弟子月珊も從ふた、大笠村に至り渡邊春水の家に投す春水亦從遊した、九日舟行桑名に泊す、十日官道に由り關驛に宿す、途に檠戟の嚴隊を見る、幕使岩瀬肥後守

の京師に朝するのだ、蓋し米艦の相海に入つてより公武議を異にし幕吏の往來特に頻煩となつた、十一日左折して伊賀に入り上野の逆旅に宿した、此地月瀬を距ること遠からず喜々津々として寐られなかつた、十二日路を西南に取り行くこと二里弱にして溪風の香を送るを覺ゆ、一小坂を踰ればはや溪口だ、路傍に梅あり花を着くこと七八分、果して拙堂所報の通りだ、此日少しく陰り細雨俄に至る、翁は元來足弱く壘を過ぎ谿を度るに疲れ甚し、乃で笠を戴き牛に騎つて行く、恰も望嶽の西行の様だ、海鷗詩あり、

路入ニ幽溪ニ雲幾層 仙家鷄犬隔ニ田廛一

此遊第一添ニ奇事一 細雨問レ梅牛背僧

晝過ぎ尾山村に達し山家に宿することを約し直に梅溪に入る、雨方に止む、粉蝶數千萬遠林に舞ふを見る、是は落梅の風に飄るものと思ひ近けば雪だ、諸子皆驚喜して奇と呼ぶ、乍ち雨乍ち雪山中氣候の異なる大概此の類だ、返つて山家に投じた、浴槽を梅花の下に置く眞率飾りなきは頗る喜ぶべきだ、主人薯をけづり盃を侑む眞味喰ふべし、微醺して散歩す、梅花は銀海に浮ぶが如し、嘗て眞福寺の勝を耳にしたので花を穿ちて寺に抵れば、境は最も幽に花逾多し、地として花影ならざるはなく、影として横斜ならざるはなし、彷徨吟嘯して前峰に至れば月已に落ちて居た、十三日曉晴

る、鳥語人を呼ぶ、心は花溪に馳せて居る、翁獨飯せずして出で梅蹊に行くこと數百歩、石を拂うて跪く、左顧右盼すれば溪蟹の花は烟を罩めて猶眠る、噉光嵐影前夜と觀を異にす、顧みて後續の諸子を呼び、歩いて前崖を下れば、竹陰には舟が横はつて居る、嵩村みだりの渡といふ、山中客少し、渡舟を儼ふて溪流を溯る、明漪底に徹し花影玉を碎く、崖巖を仰見れば、松竹梅花を護り奇絶清絶云ふ可からず、鐵心と同觀せざるを惜しむのだ、時に腹稍飢を告ぐ、主人行厨を携へ来る、團飯と鹽梅だが諸子争ひ喫す、翁笑うて所謂晩食は肉に當るものかと、時恰も騎士の從者數人を隨へて來るを見る、篙夫曰く近日藤堂侯の遊覽あるので上野城番某君豫め道路を檢するのだと、翁曰く馬を花溪に馳す恐くは花神を驚かさんと、乃で詩か有る

葛玉林中流水長 扁舟杳入小仙郷

此行若落ニ大官後一 未ニ必梅花爾許ニ香

客あり瓢を携へ前岸に立つて翁に揖す、其名を問へば池雲樵と云ふ、即ち之を吾舟に呼び入る、雲樵奇遇を喜ひ頻りに飄酒を傾け墨斗を出して舟中對酌の圖を作り辭し去つた、一同も亦舟を捨て南岸に上り月瀬村に至つた、梅花は谷を填め峯に滿ち遠く西溪の花と連絡して其幾万株なるを知らず、眞に梅花園と云ふべきである、然れとも梅花の妙は必ずしも多きのみではない、槎枒たる半樹

水邊籬落に隠見するものは殊に韻致があるのである、但梅花に寢食するものが能く之を知つて居る月瀬絶勝盛は則ち盛であるがどうも今少しと云ふ所がある、暮時を出で二更上野の旅宿に投した、餘興恍惚猶ほ氷姿玉貌の燈光酒影の中に往來するを見るがやうである、十四日路を勢州に轉し某驛に宿し、十五日洞津に抵り拙堂を訪ふた、翁先づ曰く月瀬の遊は實に奇なるかなと、拙堂曰く夫れ然り莊周云ふあり人有能遊且得不能遊乎人而不能遊且得遊乎と今海警四方に傳はり物論洵々たり、隱然有爲の勢を張るものあり、廟廊の士智は盡き神は衰へ一步も進む能はず、師は道眼大機を看破す、此時閑遊をなす、遊其時を得、遊其地を得、其遊の奇なる亦宜ならずやと、共に大笑となつた、時已に日夕翁辭し去る、拙堂明日別莊の會を約した、歸路土井敷牙を訪ふた、談書畫の事に及ひ燭を秉り數幅を見た、十六日棲碧山房に遊んだ是は拙堂の別莊で山に倚り海に面し眺望絶佳だ、拙堂は酒を出して款待した、宮崎青谷、井田五藏も來て、筆研の樂をした拙堂の詩

客從_三香國_二至 向_レ我解_三奚囊_一 記勝篇々璨

談_レ遊語々芳 時有_二啼鶯在_一 暫留_三歸鶴翔_一

莫_レ言草堂上 不_レ若_三白雲鄉_一

青谷は月瀬圖を寫して贈つた、拙堂此遊を喜び鐵心の共にせざるを憾み酒間屢之を言ふ、遂に夜に

入つて散じた、十七日拙堂父子は翁を送つて四天王寺に到り寺の所藏東坡の畫竹や半山の墨蹟を見た、拙堂曰く蘇と王とは當時永炭相容れず今は師の所化となり一堂に相見て確執を忘るゝものゝ如しと、一咲して別れた、路に二宿を経て大垣に歸り鐵心と梅溪の游を話し、翌日大垣を發し越山に入つた、

送_三雪爪禪師移_二住越州_一 鐵心

月灘龜峽夢相牽 萍合蓬離又不關

歸隱_ト隣會有_レ約 問_レ師埋_レ骨定何山

一一、菱田海鷗

月瀬に同行した菱田海鷗は三友の一人で名は重禧、通稱文藏と云ふ、天保七年六月大垣藩久瀬川に生れ、侍講である毅齋の第六子だ、安積良齋に學び最も詩文に長す、鐵心に識られて藩費教官となり尋て評定役兼侍講となる、明治元年正月鐵心に従うて京都に在つた、會ま伏見の役起り鐵心の子忠迪藩兵を率ゐて賊軍に在つた、鐵心深く之を患ひ即夜海鷗に大坂に赴き藩兵に説諭させた、處が途中で長軍に擒へられ將に斬せられんとした、乃ち天位を拜し紙を請うて絶命の詩を題した、

苦學欲酬君父恩 一燈空伴卅餘年

從容就死是今夕 只恨丹心未徹天

隊將之を読み感激して放還した、因て鐵心と大垣に歸り藩論を翻し力を王事に致すことゝなつた功を以て祿百石を賞賜せられた、二月京都に總裁局を置かれて史官に擢てらる、三年按察判官兼民部權大丞となる、尋いで福島青森の知事となり、十四年廣島控訴裁判所判事となる廿八年三月歿す年六十海鷗遺稿あり。

一一一、松平春嶽に招る

安政五年二月翁は春嶽公の請に應じて越前天女山孝顯寺に移錫し二十八日上堂した、觸而不乱、無物而不接、接必有因、變態百出、宛轉發明、至而能應、無一妄舉、直是玉走盤、威音那畔、空劫以前、亘萬古而不變者道也、何須與大家費商量乎、山衲這般去濃入越、雖然無新奇、濃雲越雪觸而不乱、物能無不應、咦、擊池不待月、池成月自來、

一一三、鐵心疎澗を責む

雪爪越前に移錫して以來音信を絶つた鐵心對月懷雪爪禪師と題し且つ曰く余師と交誼最も厚し曩日錫を飛して越前に之き爾來一消息なし因て此作あり

山巍々、水悠々、 高僧一去無消息

明月在天空照秋 或疑我師耽禪寂

一井交誼付浮漚 不然既已換骨了

跨得白龍海外遊 山自秀水自流

取此山水當宵影 思師對月獨倚樓

翁直に答詩を贈る

小原鐵心自東都寄詩責衲之疎澗意辭悲壯忽發素居之歎次乃韻却答

白山高 墨水悠 誰識這中有消息

不寄一字春及秋 區々何道喧與寒

豪來天地亦一漚 此際死生置豪末

思追煙景五湖遊 山花發澗水流

早晚把臂論心趣 葛巾烏帽共倚樓

されど意猶未だ釋然たらざるものがあると云ふので再び前韻を疊ねて之を寄せた、翁は別後の詩稿を贈つた、鐵心之を見れば其中鐵心を思ふの詩十に七八である、鐵心感悚并び至つて三たび前韻を疊ねて之を寄せたのである、

二四、橡栗山房

翁越に入るの後寺後の山上に橡栗山房を作り時々登りて楽しむ記して曰く
 花落ち鳥啼く春晝事無し、橡栗山房に上り白山を望めば、飄々然として風に乗し氣を御するの想あり、因て巖腹の泉を汲み菟山の茶を瀝す、偶廣瀬旭莊來り訪ふ、之を留めて歎語す、時に鐵心の手に接す封牢く紙重し此中必ず新篇を寄せしならんと意ふ、余喜んで其封を析く則ち橡栗山房記なり、乃ち旭莊と同じく觀る、旭莊曰く世に文章を業とする鉅匠に乏からず鐵心其徒にあらず、師の記を索むる彼に取らずして之に取るは何ぞやと、余曰く鐵心一代の酒豪なり、文詩は即ち其餘緒たるのみ、然れども余の嗜好酸醜は世と殊絶せり、故に余の其文詩を愛するは猶屈到の芟に於ける、曾點の羊棗に於けるが如きなりと、旭莊啞然たり、坐久うして白山の窅渺中に失ふを知らず、時に安政己未（六年）春三月廿二日なり、鐵心記に曰く一偉觀あり盲者を延いて景狀如何と問ふ、則ち以て

答ふる所を知らず、舌を爛し之を噓すと雖も亦其彷彿をも得る能はざるなり今の其勝を見ずして之を記するもの乃ち之に類する無きか、我雪爪禪師錫を越の孝顯寺に移し、頃る寺背怪巖景勝最も佳なる處に就き一小室を置き、書を寄せて余に記せしむ、余咲ふて曰く此れ殆と彼盲者と異なる無きなり、唯吾れ師と方外の交り一日に非ず、余已に師の心を知る、師も亦已に余の心を知れり、是れ兩身にして一心なり、故に師の眼視て以て佳となすもの余も亦視て以て佳となす、則ち余未だ其勝を一見せずと雖も、而も山水の奇、景勝の佳吾既に往いて之を觀たりと云ふも可なり、師の記を余に屬する亦故あるなり、蓋し天下勝既に乏しからず、而して盡くは著れざるもの何ぞや、昔東坡、二賦を作り、赤壁の名千古に高く、遠公一たび虎溪を過ぎて三笑の圖天下に傳ふ、山水必ず其人あつて後勝概著る、今師有り越の山水亦將に海内に著稱せられんとす、猶虎溪の遠公に於けるが如けん想ふに師山房中に起臥し雨雪の朝、風月の夕仰いで白山の秀を觀、俯して羽川の流を瞰、或は橡栗を拾ひ或は澗水を汲み物外に逍遙して、夫の樂むべきものを樂む是れ其操は白山より峻く、其心羽川より清し、余の師の心を知るもの此の如し、若し夫れ其山水の幽邃煙嵐の變幻余をして其狀を記せしめば、則亦彼盲者と異なる無きのみ、未だ知らず世の師の心を知らざるもの如何となすかと。

橡栗山房成自題其壁

栗紫椽紅秋滿林 蕭然一味養禪心

眠醒茶熟山窓底 笑對白山高万尋

旭莊此時の詩がある

(缺前) 充下陳 熊蹯魚炙是常食

次者出入權貴門 巧訟善懇爭官位

甚至避穀矯淨行 竊蠱婦女括財利

饒令黃面老子聞 滾々應下懸河淚

雪師崎潔古之徒 雪山遺範賴未墜

鱗角獨挺牛毛中 燕雀或疑鴻鵠志

身雖現住大伽藍 心不半日此安慰

乃構一房倚翠微 狹隘而撲清而邃

居高唯覺白雲低 心下何知紫衣貴

皴生詩窮亞少陵 天寒日暮無所寄

疲足生繭越山尖 不圖遇師忝倒屣

不唯圓澤於李源 三生石上話往事

維時十月霜初降 芭蕉葉黃樹顏醉

老苔埋砌發幽香 新草依松含秀氣

樹枝缺處泄天光 渺々横曳遠山翠

其上晶瑩玉一團 日射白山雪光沸

對此爽然悟昨非 掃了塵土無限思

知師羞與今僧交 曠達如僕非所棄

伊蒲盛饌我敢當 好拾栗一作殮饑

山中所產恐有限 不能爲我留餘味

借問二物喫盡不 師揮塵晒日猶未

安政己未初冬訪

雪爪禪師椽栗山房賦呈 廣瀨謙再拜

二五、横井小楠

藩主春嶽は藩政改革の意があつて、熊本から横井小楠を賓師として迎へた、小楠の福井に着いたのは雪爪より一月遅れて三月であつた、執政老職の上に斑し藩政改革に付ては相當の權限が與へられて居たものと思はれる、雪爪の談話がある

安政五年の頃に至り私は越前の春嶽公より請待を受け公の菩提所孝顯寺に轉住を致すと同時に肥後の横井小楠平四郎が請せられて私と前後に福井に入りました既に春嶽公が政事總裁職の時随分時勢も知られ事情にも通じて居られましたれど何分また時が時なれば固陋の藩論があり藩士も頗る頑固の徒多くがありました故横井は表面より勉めて説き入り私は陰に裏面より薰陶致したと申すやうなことで云々

是で當時の事情は大體知ることが出来るのである、春嶽は小楠に次の詩を寄せた

曾辱金枝玉葉身 普瞳空過卅年春

從今磨勵勞君手 不_レ作_二醉生夢死人_一

小楠は之を雪爪に示したので次韻して春嶽に呈した、

麻衣草座寄_二斯身_一 惟貯胸間天地春

著々風塵棋一局 傍觀笑作_二爛柯人_一

小楠之を見て更に疊韻して翁に贈つた

白石清泉養_二道身_一 愛君灑々滿胸春

春風吹茁蒼生草 非_二爛柯人_一對局人

二六、城崎温泉に浴す

翁越前に移錫してより毎冬寒威骨に沁み體中和を失ふた醫師城崎温泉に浴する事を勸む、因つて其言に従うて、文久二年春京都を経て丹波より但馬出石に抵る此より水程凡そ六里。春の流は溶々として桃花は岸を挟み、遠近の山々は舟と俱に動き頗る佳景である、豊岡を過ぎて暮に城崎に着いた、旅舎に投じ先づ一浴を試みるに泉性和柔頓に行途の勞を忘れた、桃壺と雪湖の二子が同遊した、朝は入浴夕は散歩之を日課とした、此地は山水明媚だ翁は二子と泉石の間を逍遙するに村柳溪花は殊に舞雩の興を添へた、三週日を経て體が漸く軽く氣は稍爽となつた、此に於て遊意勃興し近傍景勝の探るべき者を問へば、天橋此處を距ること十里餘りと云ふ、因つて意を決し二子を伴うて城崎を發した、是の日天陰り小雨時に至る、宮津に到る頃雲霧開散す一行の爲に晴るゝが如し、遙に天橋を望めば一帯の青松齋の如し、天空開濶、白浪際なし眞に蓬萊の遠からざるを思はしめるものがある、既にして天橋に達すれば全地皆松、文珠堂は松林中にあり、奇巒斷崖水を隔てゝ對峙して居る



劍の磨き立ての様なのを利劍峯と云ひ、怒猊石を扶くる如きを獅子巖と云ふ、洵に壯觀である、翁は一語を評せずして去つた、歸路再び京都に入り日根對山に天橋の圖を寫させて小原鐵心に贈つた鐵心は圖後に題して曰ふ、余をして頻々口耳四寸の間に入出せしむるものは越の雪公なり、其の雲に行くや龜峽の奇を説いて天下第一と稱す、余之を聞いて長歌一篇を賦す、其勢に行くや亦月瀬の勝を説いて余をして之を耳にし之を口にせしむ、今又丹の天橋圖を寄せ以て海内無比と爲す、吁乎、今にして後更に第一と稱するもの何地となすや、抑も天下幾無雙かある、蓋し師道眼本一物なし、故に目の遇ふ所皆絶類となすものか、禪の至れるものにあらずんば安ぞ能く此の如きを得んやと、此行翁の別れを春嶽公に告げるや公は師若し天橋に遊ばゞ土産の松樹を以て我に遺れと、依つて文珠堂の僧に就き一株を穫て宿土を貼し携へ歸つて之を呈した詩に曰く

山程水路碧重々 跋渉勞吾千里筇

欲使蒼生庇涼蔭 爲公護送一株松

二七、丹巖洞の會

文久二年五月鐵心劇職を辭し加賀の山中温泉に浴するを名とし菱田海鷗小寺霞峯を連れ六日發足し

道中三日を費して越前に入り孝顯寺に翁を訪ふた、口號一首先づ喜びを示す

去官情似病全痊 從約褻運己七年

今日相逢先一笑 空拳打著徹公肩

十日には福井藩士等相謀り鐵心を丹巖洞に饜した洞は城北羽水の涯にある勝地である、翁は鐵心と笏溪に沿うて赴いた、至れば衆皆在り椅を連ね榻を列す或は林間に酒を煖め或は松下に茶を煮る、溪上の嵐翠は筆硯盃盤の間に往來した、鐵心は忽ち大杯を上げ連酌し衆亦能く飲む、長谷部南村は勇を好む、酒酣にして鐵心に向つて、君は臂力があると云ふことだが一番試みやうかと裸身となつて角力した、兩雄相降らざること半時、鐵心笑うて曰く止め止め、他日雌雄を兵馬の間に決すれば可なりと、乃で止めた、内藤利兵は鐵心と翁と對酌の圖を書いた、鐵心其上に題して

醉佛印病東坡 奇癖相許契無他

別燈論兵蕭寺雨 揭篷載妓夜堤花

君不見蓄髮僧圓頂士 人間無此好生涯

と是より興趣更に旺に各其言はんと欲する處を言ひ、滴すること甚し、暮色遠くより來り松聲は謾々として雲中に樂を奏するやうである、衆皆歡飲し醉步珊瑚として夜歸る、一人芋を見て運となし

好箇の蓮池花時想ふ可しと云つた、傍人其の芋畦たるを告げ覺えず絶倒したと云ふことである、論者曰く方今國家多事、朝武暮文之れ暇あらず、鐵心何の暇あつてか此地に漫遊するかと、翁曰く方今多事だから遊ぶべきである、晋文公は天下を周流して後に果して爲す所があつた、思ふに鐵心も見る所があるのであらふ、鐵心嘗て藩の衰弊を慨き挽回策を建て財政を理めたことがある、又夷艦が相海に入るや廢甲論を唱へ、兵制を更めて實蹟があつた、彼有爲の才を抱く其遊固より測るへからず、況んや此れ遊ぶ可きの時だ、何も怪しむに足らぬではないかと、此日會するもの藩老蘆田本田を初め長谷川甚平(南村と號す)堤正誼、三岡八郎(後の由利公正)松平正直大島怡齋等數十名の人々が會した。元和偃武以來藩に制限あり外藩士と相往來せざること殆と三百年、近日時勢翻瀾此制稍弛む、互に猜疑を去り心腹を明し、他藩士を弟兄視する此會より始まると附記して居る、此會合或は翁の計畫せし所か或は少くも仲介者となり豫定の行動たりしことは想像に難からざるものがある、否な鐵心辭職の眞意も亦此にありしならん、と思はれるのだ、

聞_二鐵心挂冠_一有_二此寄_一 雪 爪

達士與_二山水_一 千秋如_レ有_レ待 君今野鶴姿

逍遙游自在 三萬頃白波 七十二青鬼

扁舟從_レ所_レ之 清風吹下載 擊_レ楫一長歌

應_レ悔十年宰

二八、重て無何有莊を過ぐ

慶應元年翁大垣に行く、語る處何事かは知る能はざるも無何有莊に遊びし記事がある、

余越より濃に之く桃源山に留ること數日、日として遊はざるはなし、一日新に晴る廊に倚り松を看る偶無何有莊の佳致を想ふ、弼し畢りて桃壺青屏雪湖海鷗數輩を拉へ門を出づ、是日八幡祭なり、鐵心と某氏邸に神樂を観ることを約す、竹洲路に要して其意を傳へ且違約を責む、余咲うて答へず、竹洲怒り去る、既にして莊に抵り扉を排して入る、新樹葱鬱として鳥語瀏亮たり、欣然として大醒榭に上る、瓦に枕して臥す、桃壺童を勅めて村醪を除ふ、青屏雪湖筍を焼き梅を摘りて下物を作る、忽ち一价の來りて鐵心の詩筒を致すあり、余和韻成る書せんと欲して紙なし、因て木片に書して价に附す、諸子亦詩を賦し蕉葉若くは梧身に題す、余海鷗と徐に起つて園中を徜徉す、蓮池や茶圃や、花塲や翛然趣をなす、榭傍梅あり竹に倚る殊に佳なり、北窓を披いて之を望めば秋水杳茫なり、平田際りなく群山交勝を呈す、之を遠くしては惠那金華あり、之を近くしては赤坂岡山歴々として數

ふ可きなり、若し夫れ屋宇の結構は則臆懼は夏涼に取り、櫓牀は冬温に資す、壁の幅、楹の聯二三舊識の筆に係る、一室に晤語するの念をなすなり、余越に住すること十年今重て此莊に来る、樹竹菰蘆舊に比して繁茂し、燕子薔薇は皆嫵媚を逞うす、園趣既に此の如し人事亦知る可きなり、時に夕陽山に在り疎鐘林を度る、余海鷗に謂つて曰く、此遊是れ入濃第一となす、請ふ謝を主人に致せと、乃ち泉石を顧み遅々として去る、慶應紀元四月十七日なり、莊は鐵心の別墅に係る扁して無何有莊と云ふ余の命して書する所なりと

實に無何有莊の全勝を記し得て遺憾なしと云ふ可きである雪爪の詩に

有_レ似_ニ白雲戀_ニ舊壑_一、千里來對養老峯、陶然一醉故人酒、不_レ須咄々說_ニ色空_一、修竹清風疎桐月、飲中眞味老更濃、

雪爪歸越の後鐵心濃中社友の小傳を編み、東巖に其面貌を書かせて寄示した、皆雪爪意中の人で神采奕々臂を一堂の中に把るがやうである、因て往事を感念し月旦を加へた。

戸田睡翁一に嚴齋と號す、大垣侯の支族で鐵心の岳父だ、人となり端莊威あり余は方外を以て之と兄弟の誼を訂す、翁藩主に歷仕すること三世、閭藩倚重す是より藩人専ら武を尙ふ、翁政を執り兼て文學を興す、輓近大垣に讀書子輩出せしは實に翁の力なり。

余は鐵心と夙に死生の交を定む、中間聚散ありと雖も音問相通す、三十年一日の如し、鐵心一世人豪、其世用に應ずる神出鬼沒端倪すべからず、其才を擇び長を取る必すしも類を求めず、是れ門下多士を致す所以なり、餘暇吾徒に參し碧巖を讀む、機鋒銳脫當る可からず、殆と山谷東坡をして倒退せしむるものなり。

細香女子は文學を好み女儀を失はず、而も愛國に切に屢讜議を起し、鬚面男兒をして愧色あらしむ旁六法に精しく最も墨竹を善くす、揮灑を乞ふもの四方膺至す、往年某氏夜宴に女子の竹を作るを見る、落筆灑々紙に聲あり、而して潑墨濃淡自然に宜しきを得、余怪しみて故を問ふ、女子咲ふて曰く、老眼墨色を辨せず、唯聲に因つて作るのみと、蓋し心を得て手に應ずるものなり

菱田毅齋翁、學實踐を貴ふ、業を問ふもの閭里に絡繹す、頼山陽濃に遊ふ首として翁の門を叩く、時に後藤松陰塾長たり、翁乃ち松陰をして山陽に従學せしむ、其己を虚うして人の美をなす概ね此の如し、翁の繼母病んで兩眼を失ふ十數年。常に臥床にあり、翁晨昏歡を承け藥を進め肩を摩し、齡七十を超へ未だ嘗て少しも懈らず、偶出て、例期に違ふ、母輒ち曰く清次佛歸ること何ぞ晚きやと、其孝天性に出づ、清次は翁の通稱なり

人間物として夢ならさるはなく、古今人として夢ならさるはなし、人は皆夢に生き夢に死す、物皆

夢に成り夢に敗る、高岡西溝此に見るあり余に浮世夢一場の五字を書かんことを請ひ、其室に扁す、己にして時勢一變し。天地の大夢將に一覺せんとす、近ごろ聞く西溝出ては孫吳、入つては房杜と、余謂ふ此亦邯鄲の一夢と、西溝之を聞き必ず將に曰はんとす、豊干饒舌夢中復夢を説くかと、上田高癡豹變の二字を讀書處に匾す、文蔚日外に見る、從遊の士亦皆面目を革む、斯の若き人善く豹變すと云ふ可きなり。

河島養素嘗て藩主に傳たり、藩主弋漁度に過く、養素自ら謂ふ輔導至らずと居常嫌然たり、一日余に謂つて曰く、佛家に戒殺放生の教ありと、願はくは吾憂を寛うせよと、余其言に感し乃ち戒文一則を録し以て藩主に進む、其惻誠此の如し

江馬金粟は頗る奇士たり、才藝に富み筆翰流るゝが如し、譚に滑稽を雜ゆ、尤も能く百物の聲音形狀を擬す、座中の人を絶倒せしむ、小野湖山來遊す文筵に上る毎に必曰く此座此人なかるべからずと。桃壺雲遊は余と同炊すること年あり、其後進たるを以て屢誨勵を加ふ、余桃源山に住す、桃壺來從ふ朝參暮請し左右輔化す、余の孟を越前に移すや、擢んで、桃源山後董となす、斯道を主張し孜孜懈らず、近ごろ鐵心其徒と桃聲に請ひ碧巖を讀む余此舉を聞き差肩を聳ゆ。

余立堂を弱冠時より知る小野崎某之を養ふて子となさんと欲す、立堂慨然として曰く祿位軒冕吾志に非ず、吾惟讀書分に安んぜんのみと、余曰く子の言好し、然れとも讀書して國家に益なければ則ち一迂儒のみ、今の權職にあるもの素讀書安分の念なし、故に炙手の勢あり、亦一執梃子たるを免かれずと、立堂大に悟り遂に小野崎氏を冒す。

儒者動もすれば浮圖を排す、野村藤陰一言之に及ふなし、柳州曰く浮圖の言往々にして易論語と合す、藤陰新に碧巖社に入る、想ふに柳州と見る所を同しくするものか、余藤陰一日に非ざるを知り録して以て之を質す。

海鷗余より少きこと二十歳、意氣相投す、月瀬探梅、養老觀瀑皆偕にす、性風情多し、屢俗士の議する所となる、余鐵心と曾て之を惜む、今や素居す近狀を知らず、然れとも牛相にして在らは樊川の才を棄てざるなり。

宇野南村詩を善くす、星巖翁の高弟たり、余と談交多年なり、其起居寒暄を問ふ必ず詩を以てす。余常に其情に感し人の南村を問ふもの有れば詩人を以て之を稱せず。

頓禪家往々にして稱名者流を斥く、曰く我家實智を要せず何そ況んや假名をやと、然れとも鸞家の蘊奥たるや修證功勳の能くする所にあらず、然れば則ち我々異名にして同旨なり、盲俗輩以て風馬牛となす此れ眞に知るものにあらず、毛芥は鸞家の徒、曾て一言をなす毛芥今能く記し得るや否や

を知らざるなり、(毛芥は南條文雄の父)

市川東巖畫を善くす、尤も花卉に巧なり、余桃源山に住す、堂宇災に罹り其土木を興す、斯人與つて力あり、余因て其才幹あるを知る。

菅竹洲は賈人なり、頃ろ士大夫の間に周旋し風流技能衆と頡頏す、余戲に竹洲に語つて曰く、黃山谷言ふあり士大夫三日書を讀まされは面目惡むべしと余は則ち曰ふ賈人の子と雖も三日書を讀めは亦自ら愛すべしと

二九、春嶽公に従ひ草採る

慶應元年の秋雪爪天女山にあつた一日矢島立軒來つて公の意を傳へて曰ふ明日城南の山林に簞を採る、師も偕にせられよと、翁は時に病氣で醫師から藥湯を勧められて居たが、此報を聞き大に喜ぶ翌朝雨霽る装を整へて待つ、立軒來り與に寺を出づ、氣分頗る爽快だ、橋を過ぎ水に沿うて行くこと二里餘り、南山の麓に至つた、見れば騎從のものは己に山嶺にあるのだ、岡背遡進として段々と躡るのだ、公は榻を紅樹青松の間に移し、簞花と般若湯を侑め陶然として一醺した、眸を放つて四顧すれば山川田野争うて勝概を献した、意は暢び興は適し公と逍遙して風月を談じ、夕陽に至つた

ので立軒と山を下つた、是日騎從の外に一人の袈裟を着けたもの、あるのは、宛も西園集に圓通があるがやうであつた、公の轡連物を容るゝこと亦その一斑を見るべきである。

是は翁が大壇那春嶽公を見た眞の一斑である序に公との關係の一二を記すこととする。

孝顯寺は云ふ迄もなく藩主の菩提寺藩祖結城秀康の廟のある所だ安政四年に住持佛天隆和尚が遷化したので公は後童に越格の名僧を迎へたいと思つて居た偶近側のものから翁の道風を聞いて直に請狀を發したのである。

翁の移錫の時は公は江戸にあつたが有司の報告を得て大に喜び李翺が藥山禪師に參せる時の偈「我來問道無餘說、雲在天青水在瓶」を大書せる扁額を寄せた。

公が初めて椽栗山房に到りし時其前方に當る日蓮宗顯本寺境内の銀杏の大木がある爲めに白山が見ぬと云ふので伐取れとの嚴命を下したと云ふことである。

翁の談話の一節に

公は最初篤胤の書を読み佛法を嫌ふて居られましたか追々私の説を容れ國事をも談ずるに至りました或日公が寺へ參られ佩刀の鞘に佛語を書きたるものを見せられましたから私が「以文飾武眞成好、英斷如刀開國人」と云ふ詩を賦して答へたことなどもある。

是れでも當時の交情の如何が知れるのである公が寺に到るには何時も微行で二三の供を連れ前觸なしに突然來り役僧等を狼狽せしめたと云ふことだ。
又參禪の一間答も傳へられて居る。

春、如何なるか師の家風

雪、睨一睨して「看よ」と

春、前進して「仰げは彌高く鑽れば彌堅し」と

雪、言下に一掌を與へ俱に呵々大笑せりと云ふ

雪爪師來示三種松一絶乃次其韻春嶽

坐見白山與羽水 尋師曾上最高巔

光陰百代一過客 我亦人間行脚僧

四月三日率執政以下遊椽栗山房看綠陰

薰風吹度小窗櫺 凝紫山光暮靄中

天女散花春亦去 杜鵑聲裡綠如空

三〇、梅花書屋を訪ふ

慶應二年二月既望翁矢島立軒の梅花書屋を訪ふた、至れば柴門は鎖して居る、排して入れれば梅花屋を環りて數十百株あり、絶えて雜樹なく、香雪離披して居る、其間惟琅々讀書の聲があるのみだ、立軒は忻然として迎入れた、家は徒四壁のみで架上には書帙二三の外又一長物の見るべきものがない、偶二客の至るものがあつた、俱に風爐に就き茶を煎じ筆を暗香浮動の下に弄んだ、翁の眼に見る處の人士殆と天下に過ぎも富貴高名の爲に驅逐せられさるもの果して幾人であらふ、立軒の如きは梅を妻とし、鶴を子とし恬澹自ら居り、氣韻孤高梅花に愧ちさるものであると云つて、放言閑談月落ちて散じた。

三一、閑雲壑を出づ

慶應三年春翁越前に在つた、會彦根侯使を馳せ禮を備へ、其の植福場の清涼寺に移錫せんことを請ふた、翁は直に春嶽公に云つて越前を去らんとした、公は是時政事總裁として大將軍に従うて京都に在つた、翁の書を得て悦ばない、兩者の間には其情水魚も嘗ならざるものがあるからである、翁は一偈を呈した曰く

巾錫曾從_レ挂_二翠微_一 荷衣橡食亦恩威

恩威到底如_レ天濶 只許山雲自在飛

公も其意を領し手書を贈つた

寡人本、佛を喜ばず、一たび師に天女山に參禪してより、粗佛乘の深遠なるを知る、乃ち信感遇する時有り、師實に寡人の心を知るもの、寡人亦深く師の心を知るなり、是を以て親炙すること十年一日の如し、且師の吾州に於ける、士人を鼓舞し民庶を薰陶し、以て我治を資く、寡人久しく之を徳とす、曩に湖山に移錫すると聞き懐に慊らず、今師の偈を得我意釋然たり、閑雲野鶴江越何ぞ擇ばん、其心を推せは固より外膠を解く。彼此を分たす、唯要する所濟度如何に在るのみ、然れば寡人強いて之を留めんと欲するも得へからず、乃ち送るに詩を以てす曰く。

片帆朝挂太湖風 水自雲由_二西又東_一

唯願往來期不_レ誤 爪痕好比雪中鴻

公は天女清涼二山に兼住せしむるの意があつたから詩中之に及んだのである翁は此秋清涼寺に移住した。

三二、清涼寺の移住

翁は八月十四日福井を發し十六日祥壽山清涼寺に入り晋山式を擧げた、碩徳雲衲來りて隨喜するもの一千餘名、井伊家よりは七十名を手傳として差向けたと云ふことだ、開堂法語は。

道豈遠乎、觸_レ事皆眞、聖豈他乎、體_レ之必神、脫體現成、安墮_二言詮_一、雖_レ然如此、新清涼言、火不_レ燒_レ口、枉爲_二諸老_一指點、湖雲嶽雪、煙帆沙鳥、吾無_レ隱_二乎爾_一、嗔、放_レ眼且看_二瀟湘景_一、全身恍入_二畫圖間_一、

是の日四衆座を繞り頌章茶榜を捧げ供養するもの幾十百なるを知らず、今其二を擧ぐ彦根中將眞憲の疏に曰く

亘_二古今_一而獨存者道也、隨_レ時而降替者人也、故道非_二其人_一不_二虛行_一、迦葉悟_二罽曇迦華之心印_一、曹溪證_二西祖傳衣之禪機_一、授受連綿、燈燈相傳、茲審雪爪禪師、道德高_レ世、學識出_レ衆、妙_二悟禪機_一、蟬_二脫風塵_一、曩施_二化濃越_一、若_レ斯至人、去來不_レ碍、如_レ風行_レ空、似_レ月印_レ水、出處無_レ定也、今也移_二錫吾鄉清涼禪刹_一、副_二衆所_一望建_二法幢_一以興_二千古之祖風_一、致_レ道力以增_二國家之福祥_一、歡聲聞_二于遠邇_一、余小子并躍_二易聲_一、

大垣藩老臣小原忠寛茶榜に曰く

富岳湧^二一夜^一、琵琶湖漲^二萬古^一、喫^三苦々^二晚芽^一了、洗^三無々^二道骨^一來、吾家醉禪、狂市顛朝、東去西來人多少、明月蘆花秋一般、堂頭雪公、圓頂東坡、方面佛印、半湖明月、占斷七十二峰青、万壑松聲、喚醒幾千人夢、茶即是酒、醉即是醒、不斷長風生^三十指頭^一、御風直到五洲外洲、

晋山式を了へた翌月、在京の春嶽公より、急使が來たので直に起つて京都に入り、三本木畫師谷口露山の家に着し、一憩の後直に岡崎の越前邸を訪ふた、蓋し是時新政府將に成らんとし、最も難問たる西洋各國の交通と、耶蘇教嚴禁との取扱方に就いて、當路者の最も頭を悩ました處である、公は翁を叩いて明策を得んとしたものと見ゆる、十九日には秋月種樹來訪し以後岩倉、木戸、大久保、後藤、廣澤、福岡、福羽、名和等の諸士に面會し日々多忙であつたとの事である、月末彦根に歸つた、彦根の晋山は實に帝京への進出であつたのだ、

三三、永源寺の紅葉

丁卯の秋小原鐵心使を馳せて云ふ師は今江州にあり天は霜候となり越溪の楓は如何、僕は昨秋一遊して頗る奇觀を覺れた越溪は其山と僅に數峰を隔つるのみだ頃日僕は命を奉じて兵を督して京師に入るのだ師若し觀楓の遊をなさば順路半日程は同行出來ますが如何ですかと翁も兼て聞いて居る處だから時刻を定めて使を返した。翌九月廿八日二三雲客を從へて赴く、高宮に至れば鐵心は騎を飛して來た、菱田海鷗も尋いで來た、話ながら歩んで暮に愛知川に至り逆旅に投じた、鐵心盃酌を命じて溪楓の奇を説いたので神馳せ魂飛んだ、五更に立つて行くこと二里餘り天始めて曙となつた、乃で鐵心と別れた、海鷗等と路を村落に取り左折して行く、樹は皆霜に飽き柿の實は累々として丹を綴つて居て、秋色掬すべきである、更に行くこと數里高野村に入つた、近く溪口を望めば、一水山を繞つて人寰に非ざるを知る、錦欄橋を度つて溪に入る、徘徊すること數刻、楓は黄色のもの多し、樹は概ね數百年外のもの、歩いて溪南に至り、水を隔て、望めば、楓葉は水に映じ、碧流は紅霞を蘸し、仰いで山巔を見れば夕陽返射して居る、宛も金蛇の雲間に蜿蜒として居るやうだ、越溪の勝は此處に至りて極れりと云ふべしだ、乃ち地に席して坐し、紅葉を焼いて茶を煮、幽賞すると久しうした、遂に永源寺に至つた、寺は寂室禪師の創建で、師は元に入つて法を傳へ、朝廷から禮待され一時の高僧となつた、師は昔東福寺に在つた其時の偈がある。

通天橋上殊多^レ感 不^下爲^二紅楓^一立^中夕陽^上

今感吟愧づる處があると、翁は語りながら寺主を見ずして去つた、侍僧は咲うて所謂竹を問うて主人を問はさるものかと云つた、二更愛知川の旅舎に投し、燈を挑けて海鷗と觀楓の詩數枚を書き、

鐵心に郵寄し杯を呼んで一醉した、三十日早く發した、翁は寒を怕れて輿に坐し衾を擁して行く、輿夫忽ち呼んで星雨が降つて聲があると、同行のもの皆驚いて戦争の兆だと云つた、午近く寺に歸つた。

三四、月落ちて天を離れず

此の冬翁は大衆百餘人を集め恒例の結制を行ふて居た、十二月某日小雪の夜、鐵心は菱田海鷗を連れ大垣より清涼寺に詣り、翁に向つて時勢の急迫を告げた、元來戸田侯は徳川家と親密の間であり、一面文久年度より宮闕の守護を勤めたる因縁もあり、且つ鐵心は疾くより勤王の志はあり、全く朝暮の間に板挟みの苦境に立つて居た、愈御一新となりて其向背を決せねばならぬ羽目となつた、時に翁は鐵心の機を熟せるを看取したか、直に香を焚いて靜坐せしめた、坐すること須臾にして鐵心が大喝一聲した、翁聲に應じて棒を奮つて其肩を打つて曰く「月落ちて天を離れず」と、鐵心は言下に頓悟して夜半に寺を辭し去つた、後鷲津穀堂は「雪公の一棒老鐵をして中興の名臣たらしむ」と評したと云ふことである、鐵心は翌四年正月三日朝廷に召し出され參與職に擧げられた、是は正親町三條や春嶽の推擧に依るものであつた、丁度其夜伏見鳥羽の變が勃發したのだ。是時鐵心の嗣

忠迪は幕軍中にあり、鐵心の苦衷甚しきものがあつたが、遂に藩論を正しきに向はしめ他藩に先んじて勤王の大義を全うしたのである、海鷗が捕へられて殺されんとしたのも此時である。

三五、法教の建議

慶應二年十二月廿五日孝明天皇崩御あらせられ、翌三年正月九日明治天皇御踐祚、十月討幕の密勅下り、徳川慶喜大政奉還、十二月王政復古、四年正月明治と九月改元鳥羽伏見の變となつたが、慶喜が東歸した爲に大事とならず、愈維新の曙光を認めることゝなつた、三月に五箇條の御誓文が下つた、此時翁は京都にあつたが感ずる所があつて建白書を朝廷に差出した。

朝廷千古の英斷を以て國是を一變し、廣く智識を求め更に歐米と交りを訂す、竊に謂ふ此の宏範を敷き益隆治を求む、即ち耶教の禁、勢解かざるを得ず而るに彼法教を藉き人心を攪り他國を呑噬して至らざる所なし、我邦寛永の誓に徵り其書を挟み其教を奉するを許さず、犯す者は嚴刑に處す、特に僧侶に命じて死屍を管し、戸籍を司り、漸を杜き微を防かしむ、以て三百年の治を致せり、今や海外人文大に開け今日の耶教復先日之の耶教に非ず、然りと雖も我れ之が虞れを爲さず、急遽禁を解き統御方を失は、即ち人心動搖し禍乱是れ始る豈に忽にすべけんや、蓋し我が祖

宗國を建つる神道を以て體となし、儒佛用となす、此三教に頼つて風俗を維持す、國家以て寧し。其方を得たりと云ふべし、太平の久しき文恬武熙、三教の徒姑息偷安猶熟睡し、人枕を蹴るものあるも未だ覺醒せざるが如し、夫れ三教は其歸を異にし其致を一にす、而して佛教は慈善を主とし報應を説き以て億兆を濟ふ、佛徒の效を奏する亦大なりとなす、而して今の僧侶行ひ無く學なし、是時に方り先づ之をして内省し其本に歸せしめずんば、則ち何を以てか外教の徒と對壘して、排撃の功を奏せんや、抑も管屍司籍は末なり、學業道德は本なり、末を去り本を取り、而して後に佛法興す可し、外教開く可きなり、然るに名相に拘泥し時機を悟らず、行ふ可らざるの法を以て行ふ能はざるの人に強う、是れ徒法のみ、此に着眼せざるへからず、況んや方今干戈未だ戢らず、人心向ふ處を知らず、國家治乱の由る所、風教隆替の繋がる所之れより大なるはなし、當路の人深思遠慮せずして可ならんや、臣默止する能はず敢て愚瞽を陳べ、進んで進止を取る。

初め朝廷廢佛毀釋の論あり翁此議を建つ其論遂に熄む、令して曰く宗規を理整し以て國恩に報せよと、是に於て教導局を設げ翁首め局員に備る、尋て教部省を置く亦翁の議に基く、竟に大教院を開き各地に小教院を設く、神官僧侶の制を革む、爾來外教の徒百方宣教すれども未だ無人の地を行くが如きに至らざるもの、職として是に之れ由るなり、實に法教は苦を積み徳を累ねて後に其效を見る、固より種樹十年の計の如きものにあらず、此の建議未だ赫々の功を見ずと雖も然も安ぞ百年の後に結果有るなきを知らんや姑く記して以て後の國教を主張するものに告ぐと翁は云つて居るのだ猶曰く余の此議を建つる、同火の徒孝顯寺雪鴻、勝授寺伺睡等越前に在つて各宗徒を協合一教院を開き、僧學費と號し、皇梵洋諸學科を置く實に今教院の嚆矢たりと。

三六、教界の狀勢

當時佛教界の狀勢は如何と云ふに、三百年間の惰眠を續け來れる僧侶の大部分は、眞に無行無學墮落の極に達し、唯伽藍佛法を守れるのみにて、管屍司籍纔に其存在を認めらるゝのみであつた、時に高僧碩徳なきにあらざれども、時勢と隔離して教界の頹勢を挽回すべき力もなく、而も新政府は神武の古に復するを本旨とし、祭政一致を天下に宣し、新に神祇官を置きて從來の官主、禰宜、祝、神部等を之に屬せしめ、(元、三、一三布告)又社僧禁止神佛判然の御沙汰が下り、爲めに多年度外視されてゐた、神官國學者等は時來れりと佛教排撃を企て、遂に廢佛毀釋論となつたのだ、一方新政府は依然幕府の制規を襲踏して。

一、切支丹宗門の儀は是迄御制禁之通固く可相守候事

一、邪宗門之儀は固く禁止の事

と云ふ制札を樹て、居るのである。

此際に於ける翁の説話を左に掲ぐ

朝廷は維新の初めに先だち神祇官を置かれ祭政一致の御趣意で専ら廢佛の主義を執られました、故に佛者は東西本願寺を初め、各宗本山其他少しく事を知つて居りますものは、大に怖を懐き、一時私の寓所は各宗有志者の寄合場の如く、どうなることか一同方針に迷ふて居たことでありましたが、私が建白後は先つ廢佛論は止み、朝廷より宗規を釐革し、國恩に報いよとの御命令を蒙り、乃ち秋月種樹公が其掛りで大に盡力でありました、其節より春嶽公は勿論土州の容堂公、肥前の閑叟公等私の建白を大に賛成せられ、追々大久保、木戸、廣澤等非常に荷擔せられたことでありましたが、然るに建白の主意は開國して各國と交際する以上は、三百年來嚴禁の耶蘇教も勢ひ其禁を解かねばなるまいと申すか始まりであつた、故に木戸や大久保は耶蘇教は國禁であるから解く譯にはいかぬと云ふ論を起されました、乃で私の申すには解く解かぬの論は第二義で、譬へば狐憑きの嫁を貰へば、狐は必ず付いて来るやうなもので致方はないから、夫はそれで置き、先づ我國の固有なる神道佛道を奉ずる、神官や僧侶の久しく太平無事に安眠して居る、それを覺

まして確りと國民を教導させ、自ら外教の内國に蔓延することの出来ぬやうに致すより外に手段はないと、勉めて説明を費しました、まだ其唇の乾かぬ内に、長崎在の浦上村に、昔のポルトガルから渡來した時の、耶蘇教信者が再燃した、故に木戸が其鎮撫に出張することとなり、私に同道して呉れとのことであつたが、差支があつて参りませなんだ、此時浦上の耶蘇信者は御承知の通り盡く諸藩へ分けて御預になり、夫れから宗教の事もそろ／＼當局者の耳に入るやうになりました、けれども何分まだ軍の事が重でありました。

全八月妙心寺の天章も建白を提出し、三教相扶けて外教に當ることは同一であるが、外教は絶対に防遏すべく、其溺るゝものは嚴刑に處すといふ宛然鎖國主義であつた。

三七、嵐峽の曉花

長樂の鐘聲夢を破り、早起して窓を開けば、東山の櫻花は曉雲の間に眺められる、翁は遽に嵐峽の勝を想ひ、使を馳せて小原鐵心に同遊せんことを促した、先づ雪亭に至り盃を把つた、川向ふの花は水と相映し、清麗掬すべきである、鄰壁に客かある木戸松菊、廣澤兵助、寺内暢二等だ、松菊は二人の對酌するを見て、小女を遣して招いた、鐵心は往つたが翁は往かない、鐵心更に來り手を

引いて席に就かしめた、衆大に喜び且飲み且談す、談國事に及べは松菊は欣然として喉を含み、兵助は鐘の様な聲を出し、鐵心は腕を張りて杯を上げ、暢三は滑稽を交へて語り興愈盛んになる、歡半夜に至つて一同酔ふて倒れた、翁も亦水聲を聞きながら睡に就いた。

綺羅人散洗_二鉛華_一 夜聽_二溪聲_一 眠_二酒家_一

嗶々水禽呼_レ夢去 起看_二春月在_二櫻花_一

翌朝翁は曉起して溪に嗽いで殘月の下を徘徊した、衆も亦尋いで來だ、乃で胡床を沙際に置き、朝酒を飲めは頗る快い、暫くして旭日山を出て煙霧漸く散し、山花數百株は松杉の間から躍出る様だ、衆皆奇と呼んで杯を舉げた、其内少女來りて浴を報した、翁と松菊は雪亭に反つた、會一騎人が檐角に立つて居り、田舎もの、やうだ、銃士若干其側に侍す、松菊は驚いて拜禮した、翁はあれは誰かと問へば騎人は聲に應じて、我を誰かと問ふものは誰かと、松菊は双方の名を告げて紹介した、翁始めて肥前閑叟公たることを知つた、曰く公は天下の名侯だが、猶舊態を脱せず銃隊を率ゐて花を観る、天下の事は知る可きだ、且つ公は此の國歩艱難志士臂を攘うて起つのに方り、漁夫の蚌鷓の争を見るに倣うて恬然として手を袖にし、寸兵をも釐下に出されないと承りましたが、是は御考のあることですか、今は國是既に定まる、何ぞ早く圖を改め大政を贊けられないのですかと、

公は一言宜しと云つて、是より氣分が合うて談論湧くが様だ、因つて一同舟を前溪に泛べて、花影明滅の間を上下した、忽ちに人の笙を花間に吹くを聞く、其聲亮々山水動かんとする様だ、舟を捨て、沙上に就いて又飲む、山階王五條卿、大久保甲東、中根雪江の諸子も亦來會し、團坐して群飲した、閑叟公は己に微醺を帯び花應さに老人の頭に上るを羞づべしの句を吟して鞍に跨り鞭を鳴して去つた、松菊は翁の肩を打ち曰く吾先に閑叟公に面し言はんと欲して言ふことを得ざりしもの、師一見之を盡した、獨り我々の爲めのみではない、洵に國の幸であると兵助も亦肥侯の胸中餘多の權策があつた、師は舌鏢を以て一撃した、眞に愉快だと、此遊は實に戊辰三月の事だ、是日期せずして會する者十餘人でであつて翁の此一言實に維新の大政を翼賛する爲には非常の効を奏したものである。

廣澤眞臣日記

明治元年三月廿五日

一大政官へ出

一下り掛嵐山行一泊す

廿六日晴

一天氣尤快晴今朝閑叟老公、山階宮、其外堂上公卿藩士等大集會、實に大愉快薄暮歸宿、大久保利通日記

明治元年三月廿六日

晝時分より島津求馬、得能、和田同道、嵐山の差越、天氣快晴春色和麗、花十分を過といへとも實に一日の閑を得、鬱散いたし候、木戸子等集居及一會候、

雪爪日記

三月某日小原鐵心と嵐山に觀花、木戸松菊廣澤兵助、寺内暢三と邂逅して快談、一宿翌朝鍋島閑叟公の來れるに逢ひ、又山階宮、五條卿、大久保甲東、中根雪江等の來るに會して共に花下に快飲す、

三八、淨國寺徹定

戊辰の春淨國寺の徹定、増上寺主の代理として輩下に來り、徳川氏の爲に謝罪す、一日翁の三樹の寓居を訪ふた、曰く頃日聞く朝廷令して寺僧の民籍を司ることを廢すと、夫れ僧侶の民籍を司るは徳川氏の遠謀にて、藉りて以て民治を資け、寺院は亦相倚つて以て立つことを得るのである、今一

朝之を廢せんか、吾道の羽翼を殺くのみならず、事國家の治乱に關す、師何ぞ吾道の爲に朝廷に云はないのかと、翁曰く然り一張一弛は天地の常經だよと、曰く然らば之を如何せば可なるや、曰く僧家本、人天の師と稱す、宜しく本分を勤むべきである、之を察せずして俗吏に驅使せられ、反て自ら良法と謂ふ卑屈も亦甚しいことだ、各宗一代の祖師は決して權力者を持ちて法門を開いたものではないと、反覆辨論しても遂に服せずして去つた、後時勢の趨向は翁の論する如くなつて徹定始めて服した、朝議大教院を開く徹定第一に其學を賛し、尋いて華頂山に移り宗規を整理した。

三九、萬碧の水聲

戊辰四月十五日に小原鐵心は翁に書を贈つて曰ふ明日は休沐、師と菟道に遊び一たび塵面を洗つては如何と、時は方に清和天候人に可なるの時だ、乃ち相伴ふて京城を出た、藤森を過ぎて小倉堤に抵れば遙に騎馬一隊を夕陽將に舂んとする所に見た、近けば則ち大久保、廣澤、神山三徹士、鐵心の約を追ふて來たのだ、握手し一咲して遂に宇治萬碧樓に投じた、浴し罷んで宴を開いた、絲竹沸くが如く須叟にして月は前川に滿ち餘光は樓に入った、鐵心詩あり

仰對三月明一思三遠征一 風凜關左若爲情

誰圖今夜江樓上 與此人豪聽水聲

且つ吟し且つ酌み夜半眠に就いた、曉鴉一たひ叫んで翁は先づ起きて樓を下り前流に嗽き、見れば頻りに呼んで居る人がある、夫は畫師の中西耕石だ、曰く昨日客を伏見に送り迂路して此處に宿し、夜來樓を隔て、快談壁を撼かすの聲を聞いたが、師の一行であつたかと、翁は之を伴うて樓に上り、一同と朝酒を傾けた、耕石は志士會飲の圖を作つた、酒半ばにして舟を舳し流を溯る、朝嵐掬すべく氣宇極めて爽に、衆談論時事に及んだ、翁曰く國家安危の感此の一葉舟中に集ると、岸に上り興聖寺に至り山吹を見て還つた。

宇水興聖寺

石門向レ晩間ニ高蹤ニ 老樹寒雲江上峰

德貌慎仰山水地 峻温併見祖師風

大久保利通日記

戊辰四月十五日 太政官出席、廣澤、小原、神山等同道宇治に差越候、今夜月晴風景可愛、各把吟杯、催大醉一泊、

十六日山水之曉色可愛、僧一人畫人耕石も入來、採筆等相始り誠に雅興なり、晝時分より上流に舟を登せ、暫時山水を觀望じ、伏見迄下り候、歸懸、萬樓に立寄候、

四〇、鴨沂の水莊

加茂川の畔三本木の水莊は、舊中島棕隱の寓する所、頼山陽修史の亭と相鄰り、日夕唱和せし所なり、後梁川星巖住む、庭中怪松あり因て老龍庵と名く、星巖歿後一二主を易へ、今谷口露山に歸して居る、翁京都に入る露山延いて此莊に寓せしめた、一日薰風綠を吹き、晝の永きこと年の如しであつた、翁は微しく倦んで几に倚つて睡つて居る、人の喚び醒すものがある、目を開けば閑叟公であつた、翁は徐に起つて溪流に嗽き座に復して一禮した、公は寒暄を説かず、先づ國事を談じた、翁は壁間の一瓢を解いて公と酌を交はしたが一下物もない、主客形を忘れ其味云ふへからざるものがある、公は一斷句を得た、洗盡都城滿面塵と曰ふのだ、翁更に一詩を書して公に示した曰く

翠色如し流雨後山 水聲澆レ檻遠ニ人間ニ

客來饒舌知何意 忙了湖翁半日間

公曰く詩は佳なりと雖も饒舌の二字太た苛ならずやと偶小原鐵心、長松秋琴が來た、鐵心は上戸で豪飲することを喜ぶ、殘瓢の滴瀝たるを見て曰く、此主客あり座上一大樽を欠くべきであらふかと

、急に僕を走らせ酒を求め來り、秋琴と連りに巨盃を傾く、談論湧くが如し、公も亦歡然たりだ、夜已に昏墨、四顧寂寥たり、燈影は依微として汀柳は烟を罩めた、鐵心句あり風趣清眞情亦眞と、秋琴之に次いて高軒時伴葛衣人と云ふ、時に鳴禽啞々水風は諷と至り、俯して欄外を看れば、月は溪流にあり、翁曰く一欄流水半灣月と、公補ふに前句を以てし閑然大咲した、全く虎溪の趣がある、更に酌んで散した、是日の客と詩と皆偶然に得たものだ、其に就いて思ふに、山陽は文を以て聞か、棕隱星巖は詩を以て名があつた、共に流風餘韻は猶今日に傳つて居る、然も襟懷磊々位置の高下なき、今日の客の如きものが幾人あつたであらふか、姑く記して庭中の松に問ひたいと翁は附記して居る、時に戊辰閏四月十五日のことだ。

同十七日の會合は翁をして自ら語らしめることゝす。

余の此亭に寓するや、屢常に戶外に滿つ、蓬頭突鬢、縉紳衣冠に論なく、問ふ者あれば輒ち之を見る、中興の初、客争うて時事を談ず、一日風和にして氣濫なり、一二の賓客と閑話を期して居つた、然るに意外にも客を得ること七八人皆官府より歸りがけの人々だ、團樂室に盈ちて居る、座に斗酒を置くの外、豆腐ばかりだ、余客に謂ふ公等は堂々たる丈夫、身廟堂に立ち、既に中興の大業を畫策し、實に天下の中心である、願ふに余は江湖の一貧僧のみ、公等の荐りに臨まれる

のは何の故たるを知らない、然し退いて考ふるに、凡そ人の愛するものは富貴高名であつて、生命よりも甚しきものがある、而も此二者は吾には何等の關係もないのである、故に形を剝り皮を去ると云ふことは或は有るであらふ、語に曰く魚は江湖に相忘ると云ふが、今日の遊は全くこんなものであらふと、此日會者は大久保甲東、木戸松菊、廣澤兵助、福岡孝悌、三岡公正、小原鐵心、横井小楠、寺内暢三、名和緩等である、乙夜にして散じた。

即興

遙望是雨近憎晴 坐看雲煙幾變更

風罷須叟去無跡 一欄流水夕陽明

四一、仁和寺宮の令旨

明治元年六月廿六日、翁彦根にあり、世は一轉して北征軍事總裁仁和寺宮親王東下せらるゝこと、なり、軍を江州高宮に駐め、使者を遣はされて令旨を傳へた、其齎した状箱の上には何人のなせしか、「千載之一遇」の五文字を貼附してあつたと云ふことだ、此時の心事は翁自身に語らしめることゝする。

雲は湖山に満ち一燈青燐たり、香を焚き跣坐す、心天地と暎通し、夜己に深し、騎して門を叩く者あり曰く軍事總裁仁和寺親王の使者なりと、余徐に起つて令書を読む、則ち曰く王軍を統へ出征す余を北征參謀に補すと、余直に筆を授り。

湖月林風閑臥辰

羽書何物夜驚人

山翁別有濟民策

肯逐三兵間馬尾塵

の二十八字を書し之を付して以て辭す、使者馬を躍らして去る、實に明治紀元戊辰六月廿六日の夜なり。

猶此時の事情にいつ次の事が附記されである夫れは明治十四年五月の事である、曩に左院に同職たりしもの、數十名蟻州樓に飲んだ、論者あり曰く、年々の此會は酒食のみ交歡して散會するのは本旨ではないから、各胸襟を披いて舊を話し新を談じて以て親交を厚くせんと、衆皆善しと云ふ、時に議官の一人楠田英世が起つて雪爪翁に杯を呈して曰ふ、維新の初、仁和王北征せられ僕參謀に備はり、軍江州高宮に駐まつた、王は檄を馳せて翁を召した、翁は詩を以て之を辭した、然るに王は更に僕に會して往いて翁を起たしめんとし、馬に己に鞍を置いた、會ま營外に發砲するものがあつて果さず、直に越後に至つた、王將に再ひ翁を召さんとしたが、事變杳き至つたので此議亦止んだ、僕常に以て遺憾となす、後翁と同じく左院に在りと云へども、是迄何も云はなかつた、今辭に乗じて一言するのであると、翁は感慨轉た切なるものがあつたと云ふことだ。

四二、松菊を送つて逢坂を過ぐ

翁は元年八月再び京都に出た、其廿九日明治天皇御即位の大禮が行はれ、九月八日に明治と改元せられた、此の時會津城陥りて東北平定し、同二十日聖上東京行幸、御出輦のこととなつた、其の前日木戸松菊は三本木に翁を訪ひ明日車駕に扈して東發す、師同行して嶽雪を觀よと、翁は笑うて辭した、松菊喜はず乃で一詩を書して送別の意を表した。

半蓑一笠出林端

破曉吟眸眼界寒

知是芙蓉眞面目

今朝未歷俗人看

是は翁三十年前雲遊の時作る所だ、君が國事に勤勞し嘗々として身の爲にせざるは、實に國家の柱石と云ふべきだ、自分は心を方外に遊ばせ富貴を以て累となさず、即ち錦衣大帶は即ち半蓑一笠である、松菊は之を聞いて初めて首肯した、明日堺町御門に至れば錦旗は日に輝き、儀衛は車駕を擁して居り、松菊は先驅をなし、衆庶は仰いて拜み地に伏して感泣して、皆國家の治安を祈るのだ

翁は送つて逢坂を過ぎ、遂に大津に至り松菊の宿營に投じた、床を對して時事を談論し、覺れず曉に達し、擊柝は出發を報した、松菊は直に装を整へ途に上り、翁亦送つて勢多橋に至つて別れた、歸路には同送者周布金槌を提へ唐崎に遊び、舟を賃ひ湖に泛ひ、暮に石山に抵り一宿し、月を待つて寢られず金槌等と獅子飛の勝を語つた、明日弟子春倪は金槌を伴うて往つた。翁は僕欽一と舟にて大津に抵り逢坂より京に歸つたのだ。

四三、東京へ御用召

元年十二月廿九日夜、翁は彦根藩社寺方役所から、朝命御用召の旨傳達を受け、翌二年正月三日出立、五日著京、十日彦根公用方の案内で、非藏人口へ出頭左の御沙汰書を受領した。

清涼寺雪爪

御用之儀有之至急東京へ可罷出此段被仰付候事

但東京著の上は辨事へ可届出事

正月

行政官

同日午後には越前邸に春嶽公を訪ね、十六日には名和緩が岩倉の命を受けて來訪した、廿四日早朝名

和又來りて準備を急ぎ速に京地を去るへき命を傳へた、更に廿九日には身邊危殆なる故即刻出立せらるべく且つ出立を見届けて歸れとの嚴命であると告げたので、翁は直に結束して大津に出で彦根に夜航して自坊に落付いた、當時の京都は流言蜚語盛にして暗殺隊横行し、横井小楠が正月五日参朝の途上凶徒の手に斃れ、其前には三條橋側に横井小楠清涼寺雪爪共謀して耶蘇を引入る宜しく天誅を加ふべしとの貼紙があつて、岩倉は彈正臺の手で身邊を警戒し愈急なるを見て以上の處置に及び、春嶽公は途中の危険を思ひ孝顯寺雪鴻に隨行を命じたのである、翁は是等の人々の庇護により雪鴻を伴ふて東上し駿州を過ぎて次の一詩を賦した

孤驛重過海驛春 道衣又染馬蹄塵

千秋絶白天邊雪 纔入御簾還一新

二月十四日東京着芝青松寺内の清岸院に入り十六日辨事役所へ届出た、十九日指示により宇和島邸に至り、政府の内命を受くることゝなつた、即ち今回の召出しは前年の建白に基き、宗教問題解決の衝に當らしむる爲であつた。

五月三日翁は彦根公用方の案内にて辨事役所にて左の辭令を受けた

清涼寺雪爪

教導局御用掛申付候事

五月

辨官事

三月廿八日聖上御着聲になり大混雜のため辭令も延引になつたものと思はれる五月七日初めて参朝午前中に退出して居る。

九日朝初めて會議が間かれ翁と他の人々との間に大激論が行はれた、元來教導局は急造のもので、局員は主に神祇官の人達で僧侶は只一人のみだ、翁の主張は神佛二教聯合して外教に當ると云ふのであり、他の全部は祭政一致を主とし、佛教を廢し耶蘇を入れぬと云ふ暴論で、到底妥協の餘地はなく、議論は沸騰し滿座の包圍に堂々應酬し、特に小野石齋との對論は頗る激烈のもので、局外に響き渡り、退朝の吏僚は廊下に立ち止まりて聽いたと云ふ、山内容堂は春嶽を顧みて教導局ではない、騒動局だと云つて笑つたと云ふことだ、此日は遂に喧嘩分れとなつた。

十日は参朝せず左の伺書を提出した。

伺書

教道御一新に際し、數百年の習慣に染み、僧侶一般自分の方向を誤居候間、万一僧徒初め心得違を致、諸檀信共に於て紛亂を生し候ては恐入候、就ては拙僧幸に教導局中へ出勤被仰付候に付、

局中分課の赴にても、又は別に佛教の方を振除き候て、有志の僧分共申合御趣意の旨相諭し、皆其本分を爲相守心得違無之様漸次陋習を一新し、以て國恩を奉報候様爲致度候間、其邊の御用掛被仰付候得は難有奉存候、

右御伺申上候以上、

五月十日

清涼寺雪爪

是は前日の會議で到底神道者との提携の望なきを知り、専ら佛教側の振興を圖らんとしたものであつたが、其後色々考慮の結果斷然辭職の決心をした様である、十六日には大久保参議に招かれ留任を勸告せられたが之を謝絶し、六月十日病氣を名として辭表を提出した、是時雪鴻より清涼寺へ寄せた一書がある。

廟堂も萬機御變革追々被仰出候機先にて、未だ教法邊の内議も不決趣、加ふるに議事局に於ては、頻りに廢佛の論に墮し候、いつとても老師は内外に敵を受け孤立の姿になり、實に師の心事恐察致候事に御座候、拙も頻に歸山を懇懇申上候、何れ共御用相濟次第御歸山の思召に御座候、此地の事は御配慮被下間敷、何分湖山の方流言甚敷趣、老師曰進退は命也意とするに足らずと、併し留守は大事世間の覬窺を不受様、万端左袒專一に祈入候云々

十二日辨官事より依頼差免の辭令を受領した、十八日秋月古香の招宴に招かれた。

四四、秋月侯の別宴

翁徴に應じて京に入り職を教導局に奉じて居ること數月、辭して湖山に歸らんとす、古香秋月侯其邸に別宴を開いた、邸は兩國橋畔にある、歌吹海を去ること僅に數十歩、なれども全く仙凡趣を異にし、泉清く林邃く禽聲は上下し、竹柏の影は堂階の上に扶疎として居る、是日會するもの十餘人氣岸ち傲然、柱に依り白を浮べて罵詈嬉咲して傍若無人のものは士佐の容堂公だ、他は皆一時の名流で、酒半はにして主人は一白帖を出して曰ふ此は去春師を鴨沂に訪ね、歸途鳩居堂に寄り得たものだ、今離思を寫して師を送らんと欲するのだと、乃ち筆を執つて湖山の一角を畫いた、翁之に題して

歸雲一握何邊落 髣髴湖崖箇樣山

と客皆詩を題した、容堂公は山高水長の四字を冠した、主人亦其語を外籤に題した、公曰く聞く師、歸臥する處大伽藍ありと、翁曰く禪榻僅に二疊のみと、公念に大紙を索め、二疊敷の三字を書く、主人曰く湖山萬疊に作らば如何と、公改め書す、公尙ほ右に筆を授り左に杯を持ち目紙を離さず

、忽ち復た湖山二疊の四字を作る、筆勢怒貌の石を抉くるが如く觀るもの瞭若とした、徐ろに翁を顧みて萬疊と二疊と孰れか廣きやと云つた、時に既に夕べとなつた、衆皆酔うて倒れ主人も亦玉山頹れた、容堂公は翁の手を把つて門外に出づ、水の光は空に浮び月は皎然と輝く、公曰く此良夜を如何せん。何ぞ吾が三叉邸に行かざると、乃ち赴いた、適ま蜂須賀阿州侯が來た公は阿州侯と翁とを浮萍軒に延いた、金波は軒をうつし涼風は蘋末より起る、公は翁の爲に、別に蘆筍を具して金盞を出し、翁に與へて曰く、是吾が愛盃だ師快飲せよと、翁一酬して盤上に置いた、阿侯之を取り弄翫して佳盃だ呉れ給へと云ふ、公聞かず、阿侯呉れなければ持ち行くぞと、公微咲して侯も亦乃祖の手段を學ぶのかと云つて大笑となつた、公は豪放磊落名朝野に重んぜられ、阿侯と秋月侯は貴公子中の一流だ、翁は方外の人を以て屢其間に周旋し、文酒で徵逐し交誼倍加はる、亦奇ならずやだ、先きの執袴者流は、唯邊幅を飾り木偶のやうなものであつた、今は上下繁雜を去り、簡易を主として居る、是は氣運ではあるが、舊習を一洗すると云ふことは公の主唱する所である、世人動もすれば公の罵詈の癖あるを病ふ、是は公の公たる所以であると翁は云つて居る。

十九日は午前中に岩倉木戸大久保を歴訪別を告げ午後越前邸に赴き、夜に入りての歸途刺客に襲はれた、翁の輿が常盤門外より吳服橋側に差掛つた時、拔刀覆面の壯漢が躍り出で、輿に迫つた、折

から少し遅れて居た僕欽一が、スワ一大事と駆け來り、咄嗟に其背に斬り付けた、賊は驚いて横に逃げた、其れに間を得て昇夫は脚を飛ばして馳せ、纒に免かるゝことを得た、欽一は歸りて主人の無事を聞き安心して氣絶したと云ふことだ、猶翁の説話を掲ぐ

其頃はまだ耶蘇教と申せば餘程嫌疑を受けたもので、其以前に私の論を誤解したものがあつた、或る過激の徒は私が耶蘇を入れると申觸らして暗殺をするとして騒ぎ廻つたことか岩倉公の耳に入り公は同家の參謀をして居つた長州の名和綏を私方へ遣されまして、危険なことがあるから早く當地を出立して仕舞ふが宜しいとのことでありましたが、私は一向氣も附かぬ位の事なれど、同公はそれそれ探偵係を以て十分に實際を承知せられての勸告と申すことでありますから、己むを得ず其晩すぐ出立致しました、此時が即ち東京へ出張して意見を申立てよとの御沙汰の時でありました、暗殺云々のこともまんざら嘘ではなく、東京へ参りましても三度程刺客に追はれ、召連れて居た家來杯が刀を抜いて騒いだ事もありました、其後再び上京の節、谷鉄臣を訪問しましたれば、其席に私を暗殺するとして騒ぎ立てた巨魁の男が來合せて居て、自分から白狀して互に大笑をしたことがあります、後で承れば此人は秋田縣の人でありました。

同廿二日雪鴻以下隨從を引連れ歸山の途に就いた。

還湖山偶成二首

抖擻歸來笑_二昨非_一依々湖月照_二巖扉_一誰言磴下塵如_レ海不_レ染_二山翁一衲衣_二

留錫皇州過半年

袈裟香染御爐煙

林麓歸來秋更好

湖雲深處不_レ朝_レ天

四五、山水絶對

山内容堂公との間に如何に意氣投合せしものありしかを知るに足るの一文あり題して山水絶對と云ふ今之を書下し文として掲ぐ。

余山水を愛す、峙つもの、峻きもの、奔るもの、流るゝものを愛するに止まらず、其見る所固より絶對待なり、眼底一物を置かず、即ち逆來り順往き、觸るゝ所忽焉として無邊、雲煙に出づ、是を以て宇宙間、萬象森羅皆余の山水たり、若彼の塵機を雲月に遣り、世慮を溪山に忘るゝ者は與に論するに足らず、獨り容堂公活眼を具へ山水を評す、余一日公を石濱の水莊に訪ふ、話偶ま此に及ぶ、意頗る投合す、公乃ち欣然筆を授り、朱晦庵の浮雲一任_二閑舒卷_一、萬古青山只麼青の句を

書し余に贈る、此に於て共に杯を把り月を看る、夜深に至つて歸る、明治己巳四月某日なり。

四六、芳山の覽古

翁が清涼寺を辭したのは明治三年三月の事だ、時は方に花候だ、翁は二三子を拉へ舟にて湖を渡り、菟道を経て奈良に至り、神武の陵に拜し、兼ねて古祠名刹を探り。雲行霞宿して遂に芳野に到つた、南朝の故墟は山護り水擁し今に至つて風煙愛色を帯ひて居る、輿を捨て山に登り、先づ帝陵の所在を問ふた、山を回り溪を度り直に陵門に詣て、稽顙し、尋て如意輪堂に至り、堂扉の梓弓歌及び諸名臣の題名の墨跡を見た、山中に留ること三日、花間を跋涉し宮址を尋ね、遺事を探つて當年の天歩艱難の狀を追想して、感慨に堪へざるものがあつた詩六首を賦す

春風一路涉_二坡陀_一、宮趾蒼涼感倍加、某水某峰足_レ微_レ古、登臨不_レ獨爲_二櫻花_一、
幽懷一段落_二烟霞_一、古寺春深日欲_レ斜、王氣空隨_二流水_一去、千年遺恨在_二櫻花_一、
南朝遺事夢摧殘、回_二顧當年_一坐_二夜闌_一、唯有_二櫻花枝上月_一、春風曾歷_レ照_二金鑿_一、
名花幾載護_二山陵_一、正氣發爲_二家國祥_一、今日維新皆_レ叡算、無_レ人不_レ說及_二君王_一、
流水聲幽客夢殘、依々花影在_二闌干_一、千秋不_レ朽梓弓詠、如意寺邊春月寒、

何邊櫻樹古行宮、感慨南山王氣空、五百年間花有_レ恨、而今陵上度_二春風_一、
歸途は談山を過ぎ路を伊勢に取り江州の巖門に還つた、

四七、白雲租を課す

明治庚午の年、翁は地を湖頭天江の南に相して清涼寺より此所に退隱した、此地は往昔後鳥羽上皇が七月七日、此河を渡られて天河と名けられたと云ふ所で、能登瀬村の百如庵と云ふの庵は小邱の上であり、邱は巖石を以て成り、松樹參差として乱立し、麓を繞るは皆田、田を繞りて峯巒、西の一面は湖上に臨み、眼界豁然頗る形勝の地だ、之を呼んで巖門と云ふの、湖山滿目煙雲變幻し行帆飛鳥、座間に來往す、居然自ら雪竇の洞庭に擬すと翁は云つて居る、一日午夢醒めて筇を呼んで戸を出て、忽ち馬の山下に嘶くを聞いた、僮を遣りて覗はしむれば、小原鐵心が高岡西溝小野崎立堂、菅竹洲を伴うて來たのだ、翁は喜び迎へて僮に命して斗酒を買はした、鐵心は懷から一大盃を出して云ふ、巖門は小戸だ、迎も僕の飲には及はないだらうと、作洲は自ら起つて筇を燒き、梅を煮て、酒を侑めた、鐵心詩あり

借_二將師四大_一 坐來一咲俱 天光過_二几席_一

湖色入庭除ニ 俯仰唯有酒 身世寄水壺ニ

和尚大悟訣 不復問如何一 蓮々坐窓底一

湖嶽氣色多 詩成時弄筆 映研雲影過

己にして夕陽は山に在り、諸客と舟を烟波の上に放ち、醒るもの眠るもの、飲み且つ談るもの、各意のまゝである、須臾にして湖月は舟に落ち、夜景は寥闊、殆ど人境と思はれぬ程だ、一同巖門に歸り眠に就いた、翌日は早起朝酒を飲む、會ま一村吏來つて曰く、新令により此山に課租すと、翁問ふ雲にも租を課するかと、吏は瞭若とした、翁詩あり

長松繞屋翠千株 自咲身形與鶴羶

天賜湖雲三萬頃 曾無官吏促年租一

鐵心は妙と稱して連りに大盃を酌む、西溝も立堂も皆醉ふた、送つて溪橋を過ぎて、一笑して別れた、それは五月十四日の事だ。

或日容堂公は侍臣長岡懷山に翁の安否を問はせた、丁度留守であつたので詩を留めた。

脱却京塵二十丈間 追尋此日入青山一

高僧却向人寰去 空使松風守古關一

四八、反俗を命ぜらる

四年、翁が再び出慮すべき時が來た、夏には鐵心來つて東上を促し、春嶽公よりも同意味の書簡があつて、翁は七月に京都に赴き、種々の打合をなし、八月弟子春倪を連れて東上した。東京では兼てより待受けて居た、眞宗の大洲鐵然、島地默雷、赤松連城、石川舜台、淨土宗の淨國寺徹定等の人々が數寄屋河岸外の翁の寓所に集り、當面の宗教問題に關して談論が交された、遂に再び建白書を政府に提出した、内容は元年の建白の趣旨を高調し實行に移すべきことを切言し、餘論として僧侶の噉肉蓄妻を公許すべきこと、學校を起すべきこと等があつた。

當時の宗教界は廢佛棄釋の論愈盛にして、諸國の寺院は皆其禍害を受けざるものは稀であつた、政府は二年九月詔勅を以て新に宣教師なるものを置き、「神ながら」の大道を布教し、四年正月には従來の寺領全部を沒收の布達出で、五月には宮中に有る佛像佛具を泉涌寺に移し、六月には御所門跡院家の稱號を禁止し、九月には宮中及諸寺に行はれた勅會の佛事廢止、五年二月には僧位僧官を廢し、宗門改の特權を廢した、爲に破佛家は得たり賢しで大氣焔であつたのだ、又翁建白中の肉食妻帶公許は當時宗教界に於ての大問題であつたのだ、然るに五年四月廿五日僧侶之者自今肉食妻帶蓄髮勝手たるべく法用の外俗服相用候共不苦との布告が出された。

翁は建白書提出の後風邪にて引籠中に、彦根の公用人來りて太政官より明朝出頭すへき旨の達を傳へたので、翌日出頭して左の辭令を受領した。

雪爪

任少議生

九月 左院

雪爪

在官中反俗申付候事

九月 左院

此の辭令は相當翁を驚かした、在官中反俗に至つては翁としては重大事であり、又意量外であつたのだ、翁は歸途春嶽公を訪ひ後松菊を其寓に訪ふた、松菊は不安の態度で辭令交付に至つた経緯を語つた、實は岩倉公と議して今度は是非師の建白の趣意を實現せしめんと計り、其方法として間接な手温き手段では駄目だから、師を還俗せしめ、左院議官の位地に立ちて立論せしめ、廟議を決するに如かずと云ふことに一致した、只師が承諾するや否やを氣遣ふたが、例の公の果斷で相談なしに緊急辭令を交付したのであると語つた、翁は兼ねて覺悟して居つたと見、直に快諾した、此話を

山縣有朋も聞いて居つた、と云ふことだ。

四九、左院議官

當時の政府は正院左院右院の三に區分せられ、左院にて議了せるを右院に廻し、次に正院の大臣參議の議に掛け、後上奏御裁可を経て施行するのである、時の太政大臣は三條公、右大臣は岩倉公、松菊甲東は參議、左院議長は後藤象二郎、副議長江藤新平、議官秋月大給の二侯、谷鉄臣、福羽美靜等共に知人で、且翁の持論に諒解を持つ人々であつた。

翁は翌日より左院に出仕し間もなく建白は議案となつて提出された、固より問題も大きく反對論者もあるので、議は容易に決せず、數ヶ月を要したと云ふことだ、同じく正院に於ても慎重の討議を経て、五年三月に入り漸く議了確定した、之に基きて四月十二日神祇省を廢して教部省を置き、嵯峨實愛を教部卿に福羽美靜を教部大輔に任せられ、翁は御用掛を命せられた、此度は神佛二教を國教と定め神官僧侶を教導職となし教正講義訓導を十四級に分ち、其待遇は正權大教正は勅任、正權中教正を奏任に準じて、之を六級以上と稱し、以下正權、大中小講義及訓導を判任に準したのである。

教導職の心得として教憲二條を制定せられた、

一 敬神愛國の旨を體すべき事

一天理人道を明にすべき事

一 皇上を奉戴し朝旨を遵守せしむべき事

翁の努力は漸く現はれて廢棄せられんとした佛教は國教たるの地位に置かれることゝなつたのだ、翁の心事を知るに足る書簡を載せることゝする。

本月十四日神祇省御廢し、教部省被置候、然れ共皇教は固より神祇宣教儒教佛教民の適從する處に被任候、勿論佛教の課も被立候間、用濟次第速に歸東の事各寺過來の事は追々事の取極候上にて申可遣、入學の者は隨意也、天真も同道可來候也、心事如湧待面晤候也

三月十八日

江洲翁

長興春倪長老

清涼桃源榮春靈水亦可然傳説の事

先年來老拙朝廷へ取、嚮の新政を萬民に貫徹爲致度素願先緩其邊へ運候、各所に在ても可盡力候也。

九月には東京に神佛合併の大教院を設けられ、全國に中教院を置き、神佛二教の協和を計り、徒に外教の排斥を事とせず、各自本分の教義の宣布を主とすることに定められた。

十一月翁は教部省の出仕を罷め、専ら院長として大教院の事務を總裁することになり中教正に補せられた、翁は教部省を罷めると同時に虎の門琴平神社の祠官となつた、是は芝神明、神田明神、深川八幡と共に府社として其収入を納めしめる周到なる措置であつたのだ、翌六年九月には權大教正に補せられた。

五〇、鎖鑰謾言

近頃歐人科學を研究し原理を知るを務となし専ら實用を主とす、コロンブス開龍氏米利堅を發見して以來、遠邦近國皆殖民して地を拓く、若し己の力足らざれば則ち他國人の之を墾闢するを拒くこと能はず、之を拒げば萬國兵を合せて其罪を問ふ、曰く罪を上帝に得るものと、此れを宇内の公法と云ふ、吾北海道の如きは北門の鎖鑰にして原野曠漠たるも、之を棄て、顧みず、彼等の染墮すること久し今や大政維新、廟謨遠大非常の時に處して非常の政を擧ぐ、國政を更張し中興の鴻業を全うすべきである、翁は左院にあつて將に建議する所あらんとした、時恰も中條政恒の北海道開墾の事を建言す

るあり、一讀して窃に我心を獲たるを悦ひ乃ち發議して之を贊襄した、かくして居る内に千島樺太交換の議が起つた、愈言の行はれざるを慨した、政恒建言の大意は

聖朝千古の陋弊を一變し中興の大業を建つ、日の再び中するが如し、宜しく規模を宏にして以て天下の耳目を一新すべし、何をか規模を宏にすと云ふ、曰く北海道を開拓する是なり、文治建久の際、假令源判官をして大に其驥足を伸はしむれば、則ち西伯利亞滿洲の野決して魯國の有とならざらん、天和貞享の際幕府をして蘭人の言に従はしむれば、則ち澳大利の地決して英國の富と爲らざらん、西伯利亞澳大利は我と海を隔て、相隣る、魯英をして萬里の外より其利を收めしむ、豈千古の遺憾ならずや、今や我邦土壤の併有すべきなく唯其力を北海道に盡すべきあるのみ、維新以來開拓府を置くこと茲に四年、未だ寸功を見ず、而して魯國已に樺太の大半を食む、今日に當り非常の政を施すにあらずんば、則ち臍を噛むも復た及ふ無けん、何をか非常の政と云ふ、曰く全國の華士族を擧げて之を北海道に移す是なり、今や廢藩置縣華士族をして祿に準じ金を給せしむ、而して彼輩因循坐食百弊隨て生ず、故に臣切に謂ふ之を北海曠漠の野に放ち、之をして且つ耕し且つ漁し以て子孫永遠の計を營む而して此大業を成さしめ亦唯行在所を北海道に設け陛下至誠を以て之を率ゐ給ふに在るのみ、古來明主の大業を創する、必ず冒險決死櫛風沐雨以て至

誠を天下に表する有り、神祖の樞原に奠鼎する景行の征夷、神巧の服韓皆然らざるはなし、魯の伯得身は工夫となり造船術を學ぶ、米の華聖東身を卒伍に起し以て獨立の基を建つ、此れ陛下宜しく師として之に倣ひ給ふべきものあり、陛下親しく文武諸臣を率ゐ、海山を跋涉し嘗瞻臥薪弊衣惡食、北海道を開拓するを以て自ら任し給ふべし、此の至誠を積み大下を聳動す、則ち華士族亦皆感發興起して曰はん、至尊既に海山を跋涉し給ふ、皆我輩子孫の衣食の道を開く所以なれば、吾屬萬死も惜むに足らざるなりと、議者或は曰はん朝廷新に成り其の財用足らざるを如何せん、曰く今封建を廢し郡縣の治を建つ、華士族をして各其産に就かしむ、經費億萬固より政府一朝能く辨する所にあらず、勢大に國債を起して以て其用に充てざるを得ず、國債を起し楮幣を製し、悉く擧げて之を華士族に給し、専ら北海道開拓の事業に用ゐしむ、則ち特り華士族其所を得るのみならず、實に國家新に万古不拔の一版圖を開き、億萬財政を殖するなり、亦盛んならずや、起す所の國債、製する所の楮幣は、他日開拓して得る所の收穫と華士族邸地生する所、及び其の食む所十分一とを以つて之に充つれば、則ち十數年後必ず償ふべからざるなからん、臣唯陛下之を決行し給ふこと能はざるを恐るゝのみ、何ぞ其財用の給せざるを患へんや、二百萬華士族の全力を擧げて、北海不毛の境を拓き無職遊手の大患を除くは、實に今日の絶大急務なり、唯陛下幸に

察し給へ、若夫れ經略の術、經費の法は別卷具に載す、臣政恒誠惶頓首昧死奏上す。

五一、神佛分離

翁が多年の主張は用ゐられて教部省の設置となり、大教院の創設とまで進み、廢佛の危機は防ぎ得たるも、神佛合同は名は美なれども、實之に伴はず、到底融合の可能性なきものにて、結局分離の日あるは自然の歸結たりしもので、翁は其時機を窺ひ居りしが、恰も兼ねて翁の建議により西本願寺より、海外視察に赴いた島地默雷が明治七年歸朝したので、彼より詳密に泰西の宗教事情を聞取り、共に謀る所あり、遂に大教院分離の建議書を教部省に提出させた、其趣意は宗教は決して國家から窮屈なる束縛を受くべきものではない、宜しく歐州の制度に倣ひて信教は自由にすべきものである、三條の教則で僧侶を律するは、全く理由のなきことであると云ふのであつた、是に於て翁は大に斡旋して廟議を動かし、翌八年四月神佛合併布教差止めらるべき事との達が出で、合併の大教院を廢し、更に神道及佛教各宗に大教院を置き、各自其下に中小教院を置くこと、なつた、神道に於ては新に管長を撰はねばならぬこと、なつたが、各教正の意見は一致して翁を管長に戴くこと、なり、政府も之を認めて允許した、翁は専ら神道の内容を整頓し、國民に敬神思想を普及せしめることに力を注いだ、有栖川一品親王を神道總裁に戴き、元老院議員岩本方平を副としたのも皆翁在任中の事であつた、斯くて數年を経過し明治十七年神道管長を辭任し、大教正稻葉道邦を後任に推し、初めて閑地に就くことを得たのである、時に齡七十一であつた。

五二、快雪堂法帖

翁嘗て快雪堂の法帖を藏して居つた之を鐵心に贈つた山高記中楯鼻餘墨と題し次の様に記して居る東坡曰く書を辨するの難きは正に聽響切脉の如し、其美惡を知れば則可なり、余や固より不立文字懐に五千の經卷なし、豈に一丁畫の眼在ることあらんや、況んや古人墨痕に於てをや、亡友鐵心は書に於て亦楯鼻餘墨のみ、平昔坡帖を喜び、春蚓秋蛇の趣を弄す、余嘗て快雪堂法帖を藏す、擧げて鐵心に贈る、鐵心愛翫して置かず、聽響切脉の本旨及び用兵の術を發揮す、詩を賦して以て寄す、鐵心の如き美惡を知るものと謂ふ可し、今墓木已に拱す、嗚乎此友再び得難し、此詩亦得易からず、當時を追感し此を存録す、詩に曰く。

曠古多_二人傑_一 何由窺_二其致_一 只及_レ見_二墨痕_一 胸宇較_レ可_レ味_一 會同_二此見_一世有_レ人 雪公道眼
磨鏡新 近割_二大愛_一寄_二古帖_一 一見忽使_二我心寒_一 怒貌踞 驚蛇走 變化縱橫勢欲_レ闢 或如_二

烈士正襟坐一 或如老藤帶霜瘦二 義之獻之出三無爲一 顏公柳公見三風規一 若他蘇米一亦迢
 逸 各各競成正又奇一 奇正妙用吾甚取 譬之軍形無一定矩一 無形之形雖三變幻一 所歸同起
 自三伍二 因憶寒夜沈々與公遊 雪灑禪燈一梅影幽 研墨餘興論三兵事一 論及茫々五大洲一
 嗚乎如今公不見 輒展三此帖一呼三綠醞一 千古英雄森在坐 儘舉三大白一遣三孤悶二

五三、漢學廢すべからず

翁芝山内に寓す、獨逸人某我國新古器物を聚收して、博物場を天光院に開く、一日岩倉相公諸貴顯を伴ふて臨場す、因つて翁の寓を訪ふ、翁の寓狹隘之を眞乘院に延く、やがて厨を開き酌を勧めた、翁公に謂ふ、公等は皆貴顯大官なり、今泰西人に就き我國固有の物件を見る、如何の感があるかと、公曰く然り、但火器瀝品の如きは彼に就いて見ざるを得ざるも、今我が物件に於て亦此の如し、時世とは云へ、實に慨歎に堪へないと、翁曰く吾の感する所更に大なるものあり、頃日道路説く所を聞くに、官將に漢學を廢せんとすと、我國の漢學に於けるは、二千年の久しき、倫理を正し、國體を持す、眞に我國有形の機軸たり、公等の位に在る萬之を廢するの理なし、道路の説固より信するに足らざるものである、然れども方今天下の勢百般の事物唯泰西のみ是れ模倣して居る、短の甚

しきを捨て長を併せて之を失ふ、比々として例のあることで、是余の深く憂ふる所である、若し勢を制するの略が無く、風潮に任すのみなれば、二十年の後には、必ず我國人にして東條を外人に納れて、詩書六經を學ふに至らん、丁度今日公等が彼に就いて、我か物を見ると同じであらふ、公以て如何となすと、公は首を低れ默思すること久しかつた、時に明治八年四月のことだ。

五四、巢鴨の夜話

城北の巢鴨村に一莊かある、竹樹屋を環らし、頗る風烟に富んで居る、是れ松菊木戸公の、政務の餘暇燕息する處である、翁は屢往つて游んだ、一日衆客と園内を逍遙すれば、鳥語欣々として相樂む昏暮に至り客は皆散した、主人は獨り翁を留む、暫くにして一客が來り爐邊に就いて主人と品座した、夜は岑々と闌けた、客が翁に謂ふ吾一奇話あり、曩に歐州に遊び某地停車場に宿した、其夜夢に地獄の變相を見て覺めて不思議に思ひ土人に聞けば、彼曰く此地舊民庶の墓地であつた、鐵道を開くに及び、停車場となつたのだと、自分は之を聞いて愴然たるものかあつに、其から年を経て、猶氣に掛るものがあるは如何と、主人亦曰ふ吾年十二三、郷學に在つて課餘に金谷天神に至つた、池に金毛の一大龜を見た、形は普通のものではなく、游泳すること頗る活潑に、吾に向つて突き掛つ

て來る様であつた、吾れ覺えず絶叫して去つた、今に至つて考へても何の爲であるかが解らない、然し吾藩の氣運は是れから開けた、是も一奇話である、翁は行脚の人である深山幽谷到らざる處なし、色々異事があつたであらう試に話せよと、翁曰く余は造次顛沛にも著々實を貴ぶ、故に怪力の言は喜ばない、唯一つ嘗て天狗を叱つた事がある、安政甲寅の夏行化して雲州寶琳寺にあつて碧巖を講した、講終つて樓上に坐した、時に梅雨は空濛として、樓は溪壑に面して居る、眼下に一叢祠があつた、老杉は天を摩し、蒼翠滴るが如し、忽ちに一人を見、怒りたる目、隆ぎ鼻兩翅は甦然として樹上に立つて居る、見れば脚は杉梢を離るゝこと數寸、余大聲叱つて曰く、危いぞと、忽ちにして霹靂天地を震はした、侍者聽水春堂の二人を遣し檢すれば、合抱樹身の折れたのを見た、余は雲衆に問うて此聲を聞いたかと、聽くものなしと云ふ、余笑ふて曰く、彼輩吾が幾を闕はんと欲するものかと、是亦一奇話だ、嗚乎龜といひ夢といひ羽流といひ、天地間時あつて顯れ、時あつて隠る、是れ氣化の變に由ると雖も、亦其人を待つて隱顯するものかと、話し罷み、三人相與に一啖して睡に就いた、明治八年九月某日の事だ。

鹿門曰く恠字は心に從ひ在に從ふ、凡そ恠は心に在つて物に在らざるなり、碧巖の第一義恐くは此に外ならざらん。

五五、墨梅一幀

翁一日海鷗と舊を話した曰く余れ子と鐵心に於ける交り莫逆となす鐵心は平生戯れに余を目して佛印となし自ら東坡を以て居る君を小杜となして自ら牛公を任ずるのだ文詩の唱和は我か几案に堆かつた然るに當時の翰墨は皆人に持去られて斷簡零墨を留めない人情近きに軽く遠きに重く感なき能はずだ、海鷗曰く然りと時に客の傍に聞くものがあつたが翌日墨梅一幀を贈り曰く是れ鐵心翁昔時師の所にて作つたものだ見れば鐵心自題して云ふ

余墨梅を胸中に横へること十年今始めて筆を下す拙甚し然れども自負する所のものは拙にあるのみ天下此拙を愛するもの或はあらん乃ち之を雪爪海鷗二友に質せと

後海鷗來り觀て曰く鐵公交遊の多き天下を傾く然れとも其神契師尙するもの僅に三四人のみ師は其一に居る雪の夜鐵公に從ふて師を江の清涼寺に訪ねた時は幕府の末運に屬し物議は沸くやうだ鐵公師に治安策を詢ふて師か月落ちて天を離れずと云はれて鐵公言下に頓悟したことかある嗚乎鐵公平昔梅を以て命となす今墨梅に對すれば音容に接するが如く思ふて此事に至る師は猶記せらるゝや否やと

五六、秋潭月影

是れ何人も容易に解し得ざるもの漢文のまゝ之を載するを可とす

威音一着、譬如二眼翳盡一、眼自有二明、醫只有二除翳技一、無二求明術一、明若可二求、還是醫、雖二然若將二類然無爲二認作二極地一、則猫兒狗子得二飽熟睡無二思念一、豈謂二猫狗已入二極地一、觀二妄除二想、自二粗入二細、念々不二生、物々活潑、不二闕二這箇圓明一、看二山僧有二舌耶、咄秋潭月影、霜夜鐘聲、隨二敲擊二無二欠、觸二波瀾二不二散、場來又是一場眼花。

鐵心曰く秋潭の月影云々は雪公毎々余をして此語を尋思せしむ今指して眼花と云ふ是れ悟後の警策なり。

五七、天光の雲影

翁曰く余に従うて薪水の勞を取るもの幾十百なるを知らず而るに道心の最も堅きものは雪鴻が第一である往時余は屢錫を轉じて道貧洗ふが如し、雪鴻常に隨ふて居た、謙遜で衆を容れ温和で物に接したが、事繩規に關するものは一毫も許さない、以て吾化を輔けて、人をして自然に愧ぢしめるものがあつた、余が越の天女山を去つた時に、春嶽公は雪鴻を擲て、後住とした、それから間もな

く、大政維新となり、余は東京に入り、雪鴻も微に應じて鞏下に来て、朝夕相見た、此時政府令を下し僧侶の弊を矯めた、諸利欲然として學識を貴び、道德を重んじた、雪鴻の聲譽は隆々として日々起る、後余は建議して神佛二教を合して大教院を開いた、雪鴻は余が意を體して宗風を整理した、會ま永平寺の主席が缺けた、雪鴻を寺職に撰任し、勅して圓應道鑑禪師を賜ふた、實に明治十六年十一月である春嶽公は大に吾鑑識の違はざるを喜ばれ、余は衰老して此舉に遇ひ稍人意を強うするものがあつた、雪鴻の本山に赴く時に、余は贖するに竹簾一張を以てした、告げて曰ふ此れ明代のものである、蘆葉達磨と天光雲影、瑞草奇花、蒼松古柏の十二字を繡してある、是は心越禪師の所藏と傳へて居る、轉して吾手に歸したのも偶然ではない、今子の此行に贖とする、子勉めて老夫の意に副へよ、雪鴻は感泣して之を受けて去つた、後三年も満たない内に圓寂した、海内の僧徒は痛惜しないものはない、雪鴻初の名は童壽、青蔭氏、越前武生の人、童時美濃の桃源山で薙髮して驅鳥となつたのだ、余は慟哭して世は亡くなつた感があつた。

五八、松島の春帆

明治廿一年四月翁は松島に遊はんとして仙臺を過ぎた、知事松平正直は翁の知人であつた、因て其

家に投じて逗留すること数日であつた、知事は能く東道の誼を盡した、一日家族一同で翁を松島に案内した、早起して家を出て、汽車で埴谷に至る、是日は雲烟空濛として遊覽に最も佳なる日であつた、舟は既に埠頭に準備してあり、徐に棹を放ち、ゆれく行く、青は迎へ翠は揖し、帆影禽語皆な見た事のあるやうだ、某の巖某の松と知事は指して奇を話す、翁は知事に杯を與へて曰ふ、君此地に赴任して以來、化行はれ民和し、治は東北第一である、政暇に山水の遊をなす是れ官吏の仙人で、人間の一大幸福と云はねばならぬと、知事は咲ふて頷いた、且つ酌み且つ談り遂に松島に抵つた、舟を觀瀾亭の下に繋ぐ、正面を竹浦島となす、左右に五大雄島の勝を控ゆ、丹き嶂、碧き崖は星と羅ひ碁と布き一盆池中にある様だ、遠き山近き嶺、嵐翠滴るは皆松である、時正に艷陽、溪山は處々に櫻花爛漫として開き、風景絶佳である、世に稱して小蓬萊と曰ふもの眞に詐らざるものである、歩いて瑞巖寺に至つた、路を夾むの松杉は皆合抱數百年を経たものである、堂宇は宏麗多くの什寶を藏す、獨眼人を射る膽氣想ふ可きもの伊達黃門政宗の肖像だ一巖窟がある法身窟と云ふ、僧法身嘗て北條時頼に接する處だ、寺は元天台宗、時頼法身に命じて禪宗とした、所謂曾て徑山に入つて風月を分ち還て圓福大道場を開くと云ふものである、寺を出て、舟に反れば、雨忽ち至り、雲煙は吞吐し、山水の觀又一變した、細雨春帆畫裡に在つて行く、黄昏に埴谷に到り神社に詣で、

勝書樓に登る、暮色遠くより至り四方に見る所なし、帳然として樓を下り、十時頃仙台に歸つた。

五九、晃山の幽跋

翁松島に遊び歸路二本松を過ぎ、舊門生田倉岱洲を訪ふた、留まること三日、岱洲曰く翁若し日光山に遊び、案内せんと、翁は欣び諾した、乃で五月三日に汽車二本松を發した、車窓より四方を眺めて心は日光に行つて居る、矢板で下車して山路を右に折れて行く、十里許りにて晩に日光の逆旅に投じた、夜色は暝濛として雨氣燈火を曇らす、岱洲曰く遊覽は中禪寺を先とし廟宇を後にせんと、四日拂曉に輿に乗り山に入つた、迂路して方等般若裏見の瀧を見、直に中禪寺に向つた、時己に夏に入り、處々の櫻花満開である、又石楠花の巖腹を點綴して居るのを見た、沿路石多く輿底石に當り、昇夫歩に艱む、輿を捨て、歩む、忽ちにして谿開け路廣く、溪流一道鏘然として水唱る、右に涉り左に行き脚力頗る疲る山店に就き憩はんとして仰けは、木末の邊に羊腸九折のものあり、少し南して華嚴瀧を見る、萬仞直下して雪濺き雷怒り、奇觀聞く處よりも過ぎて居る、稍登りて一大湖がある、男牀の山は人面より起る湖上に大國主の祠がある、階を上つて禮拜す旗亭多く湖に沿ふて居る風煙絶佳だ亭に就いて茶を飲む欄下の小鳥や仙舟は人境のものではない、此日溫暖乍ち陰り

乍ち晴れ、山風は時々雪片を送る、昇夫曰く山中の氣候は何時も此通りだと、日夕逆旅に返る、祝部海尾速雄が來た翁の舊識だ、明日神寶を縦觀せんことを約した、五日早く起きて廟に拜した、喬木は天に參り、臺宇全碧鬱々蒼々の内に輝いて居る是れ徳川氏の家廟であつて當時封建の世諸侯は其威徳に服し争うて土木を助けて此壯麗を致した、其懐遠の徳は亦海外諸邦に及ぶ盛なりと云ふ可きだ、鬼彫り神刻み歐米人の謂ふ美術は一として備はらざるものなし、彼輩の激賞して措かざる處である、然れとも廟中又東照公の刀劍や甲冑を藏す、其製素朴にして裝飾を施さず、觀覽の際覺えず肅然として敬を起すのである、關原の役に佩ふる所のものと云ふ、嗚呼三百年の治を致すもの豈に偶然ではないのだ。

六〇 寒香圖に上る

翁墨梅を畫く、曰く余固より畫を解せず、而るに會心の友を獲て遇ま口を開いて咲ひ梅花を寫して自ら娛む、半生作る所僅に數幅のみ、皆人の持ち去る所となる、曩に谷百鍊と湖山に相識つた後同しく左院に在つた、一日百鍊が來た酒を呼び筆を弄した、偶然墨梅を作つた、詩に曰く

貌與梅花一樣臘 老蒼傲骨艶姿無

儘他俗眼論毛色 爛漫天眞寫上圖

百鍊其上に題して曰く

只留老骨傲清臘 艶態妖姿一點無

知是高人新創意 寫梅兼寫自家圖

時に雪鴻座にあり、傍觀微笑す酒後余の坐睡を覗ひ竊に其幅を持ち去る、事二十年前に在り今や雪鴻世を下る、兒雪年此の幅を他所に獲て大に喜んで曰く、家翁の畫梅希に有るもの、願はくは一言を記せ門外不出とせんと、余展覽大笑して曰く、疎影橫斜、自觀難辨、淡月微雲、不藏吾拙、雖然焉知百年後、無九方臯相馬視之者哉、因つて此言を外簽に題して兒に附す、時に明治廿二年南至前二日であつた、座隅の瓶梅も亦咲はんとして居る、頃者百鍊余が此篇を山高記中に置くことを聞いて原韻を押し寄せた

窓外孤梅老更臘 歲寒枝上一花無

願君千里遙相寄 一幅影疎香暗圖

余も亦疊和した

一林寒月照形臘 老幹紛披影欲無

多謝新題故人贈 春風吹上舊時圖

諸友傳吟して一時和する者十餘人もあつた其四を載す岡本黄石

丰骨清高鶴様臘 風霜歷幾十年無

不須摹倣他皮相 一片精神寫此圖

秋月古香

青帝宮妃雪貌臘 飢香遠散近將無

寫神唯許先生手 非爲艶因求畫圖

巖谷古梅

其心超脫貌清臘 如_レ此高人儔匹無

別具神通遊戲手 寫成天地一花圖

大島怡齋

冰肌雪骨秀而臘 借問幾生修到無

世上於_レ今誰具眼 臙脂只賞牡丹圖

其詩は概ね即時興到りての口號ではあるが、眞情交態は自ら此中に見えて居る姑く録して他日の憶

念に備へる時に明治廿五年孟春だ、

六一、五顛の觀月

海鷗往年月を以て濃の十二友に擬した曰く鐵心は碧海の大月なり、藤蔭は梧桐の霽月なりと、其他擬する所一々妥當なり、而して自らを芦花淺水の月に比す、一時傳へて佳話となした、今庚寅九月念七（明治廿三年）即ち陰曆中秋前一夕、翁藤蔭海鷗二子と同じく五顛山翁の招きに赴いた、五顛山は舊稱御殿山と云ふて徳川將軍諸侯の參觀交代に來るものを迎へる處なのだ、今は井上逸叟が自ら取つて號として居る、莊は山に倚り海に面し、水天一色煙波は縹渺として居る、客は盃を把つて月の出づるを待つ、間もなく夕陽は山に暮き、大月は碧海に湧いた、翁は躍然として海鷗の肩を打ち、曰く鐵心出づと、二子は相顧みて絶叫した、主人は其故を知らず之を怪しむやうだ、翁は因つて其典故を説いた、且つ曰く當時余は越山にあり、月喩に預らざるも、十二の月は皆故人で、其盈虧は盡く吾が一圓相を出てざるなり、歳月は流るゝが如く今を距ること殆ど三十年なり、夫れ十二の月影其七八は既に闕ぐ、況んや月の出沒常ならず、猶ほ世の滄桑の定まり無きが如きなり、此夕幸に鐵心の丰神を盃酒の間に迎へ、彼の芦月と梧月とを併せて、誠に喜ぶべきだ、烏乎余や衰老其

れ殘夜遙岑の落月たるを如何せんや、然るに此座に主翁のあるあり、齡己に八秩を越え強健少年を壓す、老松の春月の如きものあり、聊か以て人意を強うするに足ると、是に於て月に對して更に酌み歡を盡して歸つた、此夜餘情恍惚とし寐られずと翁は記して居る。

六二、風塵の爛柯

翁が山高記中最後に記するものは是れである、

余頽齡八秩に及ぶ形骸枯槁す自謂ふ石室山中の人と春晝は年の如く睡は足りて事少し因て憶ふに余、越の天女山にあり時に幕政陵夷す愛國の志士勤王を東西に唱へ、天下の勢將に一變せんとなす、吾が春岳公躬ら親藩の重きに居り、夙夜焦慮し殆と寢食を忘れ、衰運を挽回するの道を講じ遠く横井小楠を鎮西より徵し、厚く禮遇を賜ふて其議論を上下す、余山中に在つて之を聽く一日公詩を賦して小楠に示し余次韻して公に呈し小楠の疊韻したことは前に述べた。

嗚呼今昔を俯仰すれば事己に三十年の外に在り恍として世を隔づるが如し、爾後國家事多く其棋たるや大にしては王政復古、之に次いて廢藩置縣、遂に國會開設に及ぶ、而して其小なるもの隨つて圍めは隨つて覆る、幾百局を了するを知らず、試に指を當局諸公に屈せんか、皆余が心識なり、枰

子著々として優に神品に入る、己に歐米國手饒先を論するに至る、然りと雖も今や我が國手皆子を奩中に斂め、相尋いで世を下る、而して余が腰間の柯亦將に爛し盡さんとす、是に於て竊に憂ふる所あり、後の對局者果して前の國手に優るや、若し劣手をして其局に當らしめは則ち己に勝ちたる者も亦敗れん、是を畏るべしとなす況んや今後十九路に於て危難前日の局面に幾倍するものをや、姑く書して以て憂を同しくするものに問ふ。

嗚乎危難前日の局面に幾倍するものをやの言吾人讀んで感慨無量のものがある。

六三、御嶽教と金刀比羅宮

翁が管長辭任の後間もなく、御嶽教が神道の一派として獨立することを許されたが、當事者間に内訌起り、教徒の暴動までに進んだ、政府は平山成齋を遣はして解決させたが駄目であつた、内務卿山縣有朋は社寺局長丸岡某を以て殷勤に懇請せしめたので、遂に名義丈けの同教管長となつた。

又讃岐金刀比羅宮では神佛分離となつたが御本體は神であるか佛であるかの問題となり、神社と舊別當箸藏寺との間に奪合ひとなり紛争を重ねたが、是亦翁を双方の管長と云ふことにし解決したのである。

六四、飯倉の老人

翁が飯倉に住居を定めたのは明治十年頃かとの事である、以前は芝山内某寺に居つた、飯倉の寓居の樓上は芝山の蒼翠を左にして遙に品川灣に臨み眺望太佳、岡本黄石が其境聚三清遠二南面三海之濱一、前山抽三古塔一、遠嶽聳三高曼一と云つたのは能く其實景を叙したもので、高人の閑居には好適境である、翁は讀書揮毫の外は交游が日課であつた、元來翁は客を好み其交游は朝野に亘り多數であつたから相互の往來も相當頻繁であつたと思はれる、そして「飯倉の老人」といふ名がいつとはなしに誰にも通ずる翁の代名詞となつた。

六五、山高水長圖記

翁の著書は幾程あつたか知らぬが淡々たる翁の性格として書いても遺されなかつたのであらふ、空谷氏も何とも云つて居られずあの傳記が孝顯寺で計畫せられたに拘はらず語録等の事も云つてない、何れにもせよ我々の翁を知り得るは此圖記のみである今空谷氏に依つて記して見よう

翁の著山高水長圖記三卷は明治時代に於ける漢文の著書中に於て斷然傑出せる快著といふべく其内容は翁の生涯中に經歷せる踪迹風流勝事を主として叙せるもので、一文一圖を附し全部四十八篇より成る、聞く所に依ると明治十六年の頃高弟雪鴻が浪華に游錫せし時偶ま清人長白麟見亭著の鴻雪因縁圖記を防間に得て持ち歸りて翁に示し、之に倣ふて一書を編せんことを勧めた、乃で翁は老後の慰みにぼつ／＼之に従事するに至つた、此書の結構と文章には翁も可なり骨を折り主に岡鹿門菱田海鷗の二人に相談して幾回か稿を改めた、書字は日下部鳴鶴の弟子佐成某が引受け、製版完成して知人に頒つたのは二十七年の夏であつた、翁は佐田の白茅が記中「一不爽一不快の字句なし」と云つたの見て我意を得たりと爲し「足下早く之を見破す知己と謂ふべし」と答へて居る惜むべきは此書の版木が往年火災に罹りて烏有に歸したることである

山高記は三冊より成り上卷の最初に山内容堂の山高水長の四字を題し己巳晩夏春村桑者としてある、次に秋月古香、矢土錦山、岡本黄石三人の序文があり、中の卷には我來問道無餘説、雲在青天水在瓶、安政五年二月慶永とした、春嶽公の題辭がある、下卷には蘆間千變化萬古獨依然といふ木戸松菊があり、巖谷古梅、岡鹿門、船越衛、の跋文が載つて居る内容は雲遊三絶、混沌畫眉と云ふ様に四字つゝの題目で四十八文あり一文一畫で畫も亦當時の名家である、之が齧頭文末に評を加へたる人ては依田學海の百數十回を初めとし岡鹿門、秋月古香、矢土錦山、長松秋琴、谷如意、小原鐵心、小野湖山、大島怡齋、江馬天江、藤澤南岳等で大沼枕山小崎公平も稀れに評して居るので、全く

學界總出と云つても良い程である、卷末總評は秋月古香、岡鹿門、依田學海、長松秋琴、大島怡齋、野村藤蔭、廣瀬雪堂の七人實に一部の著書數十人の手を要したるもの、其價值如何は想像し得るものがあるのである。

六六、京都の別墅

明治十年頃神原精二が一少年を翁に托した是が山内萬壽治だ翁は其凡器でない事を見て色々と勉學立身の途を啓いて遣つたが海軍兵學校を卒業し英國に留學し歸るや近藤眞琴の長女婉子を娶つた、遂に吳鎮守府司令長官海軍中將男爵にまで昇進した、其の羽振は盛んなもので其邸宅は三津田御殿とまで云はれて居つたが、山内は終生其恩儀を忘れず、京都の東山の麓に瀟洒なる小別墅を築いて翁に贈つた、明治廿七年秋落成したので翁は山内夫妻と共に西下して、大に喜び靜古山莊と名づけた、小野湖山や谷鉄臣が京都に居つたので文雅の來往をなして雅興乏しからず一年在住して東京に歸つた。

新居雜詠 十五首之内

數椽茆屋占風煙 此福老來初有緣

至竟身邊無一物 故人頼贖買山錢

來遂平安風月儘 鴨東半畝買荒邱

便爲折簡急催促 同賞溪山紅葉秋

北接若王東永觀 秋深一徑老楓丹

斜陽出戶携僮去 泉石林中涉晚寒

六七、故山に展墓す

明治二十八年出生地因島に歸り、金蓮寺に祖先の墓を展し、弟與三兵衛と面晤し、廣島吳に至り故舊と會し、嚴島に參拜して數日を費し歸京した、翁は幼にして家を出て以來何回歸省したかは不明なれども此時が最後で思出多く、感慨無量のものがあつたであらう。

歸郷口號 二

一艇秋風還故郷 田園松老菊猶香

形容改盡無人識 唯有南山對我鳩

雲煙沙鳥畫圖間 遠近高抵幾島灣

老大歸來無面識 風煙獨閱故鄉山

嚴島

楓紫松青無點塵 好呼佳友岸鳥巾

巍然嚴島千年致 古閣秋高月一輪

六八、金澤と月瀬

嬰鑠壯者を凌ぐとは高年者に捧ぐるの常套語だが、翁の如きは眞に文字通りの壯健で、明治三十年には八十四歳で本師無底禪師の塔を拜すべく金澤に行つた、弟子の孝顯寺春堂が隨行して其歸途には福井に滞留すること十餘日、生存の舊知に會し無量の感慨に耽り、岡鹿門の來遊に邂逅しては一段の興趣を添へた。

辜負斯翁五十年 平生夢繞翠微巔

一片心香今古斷 塔前立盡夕陽天

又三十二年には山内夫妻と五十年振りに月瀬の看梅を試みた、數日間滯留雪月の併奇の賞を恣にして更に京都に出て親故と相會して舊情を温めたのである、此行頗る翁の意に適したものと見て、重

游月瀬詩五首、又五絶三首、喜我九首を作つて居る今一二首を載す。

月瀬春游今二回 千枝綴玉滿山開

梅花五十年前舊 應笑衰翁得々來

眞福寺何處 雪晴山月高

回巖香脉々 寒影動銀濤

喜我八十六 獨歩在天涯

瘦筇到月瀬 風雪看梅花

喜我游京洛 先尋舊友家

不口塵事 先問風峽花

六九、蘇功碑を建つ

翁の父長光號を蘇功と云ふ、祖父正興失敗の後を承け拮据經營遂に中庄の新開を竣工す、之を蘇功新開と名づく翁之が記念の爲め一大石碑を郷里八幡神社の境内に建つ村長宇都宮常松幹旋する處多し、次に碑文と翁の書簡を載す、實に明治三十一年二月の事だ。

厚生利用 從一位勳一等侯爵淺野長勳家類

宮地家系、遠出於西宮左大臣高明親王、々々醍醐帝第四皇子也、子孫降爲武臣、賜源姓、爾後九百有餘年、或隱或顯、保安中家祖家次領備中國宮地莊、因氏焉、家次幾孫次政爲備後探題、居磐瀨城、次政十餘孫大炊助明光遭兵亂戰屢不利、乃與村上氏和、據因島青景城、圖興復、建成願金蓮兩蓮若、一爲植福、一爲祈願場、資弘、資輝、資正、賢正、世々相承、天正中賢正有所見、擲弓箭把鋤、歸農土生邑、尋移三莊、將開墾益鄉里、計畫周密貽厥孫謀、經正宗、正武、正國、正賢、正則、正賀數世、瓜瓞聯綿至祖考正興、最富經濟家產殷富、先考長光天資謹嚴自奉儉薄、專用心於厚生利用、中年讓家弟政武、出居中莊繼祖先遺志、致力開拓、蓋我鄉浦淑灣環、岡壘逶迤、諸川朝海沙土堆積、長光相地勢易爲力者、廣斥闢田沮洳化爲膏腴、得扇西兩區於田熊邑、後勸工本邑投數千金、敷砂石於海底、形如暗礁、然波浪衝激難卒竣工、而勤勉弗懈祈誓和靈神祠、十八年、夏日不張蚊帳、其堅志勵行概類此、已老、嗣子秀明拮据幹蠱、天保辛丑遂能成其一半、長光大悅會隣里落之、是年八月八日病歿、享年七十九、葬金蓮先塋、秀明有才幹嘗參本藩財政有功、舉爲度支家政復振、今所墾開疆場稱曰蘇功新開、蘇功長光號也、嗚呼

乎祖先儕載於百數十年前、歷世細武弗墜其業、爲之後者豈可不深思哉、今茲明治庚寅當先考五十年祭、秀明建石本邑八幡祠俾余記其概、余也幼出家不能耕耘以助父志、放浪四方在再至今日、聞秀明是舉安得不忸怩乎、幸因此記得係不肖名、亦所自榮、乃徵家譜爲此碑記、

明治廿九年二月建

神道管長大教正鴻雪爪謹撰

宇都宮常松宛の書簡

拜啓春寒料峭之處、玉家御揃愈御清祥被爲渡奉大賀候、當方無事幸に御省意可被下候、然而兼々御配意相願候、八幡神社及金蓮寺へ寄附田畑之義、夫々手續相調、今度登記も相濟書類一切捺印、幸に金蓮當住在京、是も調印爲致候間、今般玉家へ向け送附致候間、宜御取圖可被下候也、

記念碑玉垣等之義も、種々御手数相懸け恐悚之至に候、据付等も相濟候趣安心致候、就は年月も相かゝり候事故、自然諸雜費之殘額も可有之かも難圖候、外にも當方より可取扱廉々も御心附に相成候得者、無御遠慮御申越可被下候、兎角村民之迷惑に相成候ては不相濟候間右爲念申上置候、他は附後便候

頓首

戊戌二月十六日

宇都宮常松様

鴻雪爪

七〇、翁の賀壽

明治三十四年は翁の齡八十八になつたので、故舊相謀りて六月廿九日芝の紅葉館で米壽の賀筵を開いた、政治家を始め學者僧侶等全く朝野の名士を網羅したもので、非常の盛會であり、且賀壽の書畫は山をなし、實に立派のものであつたとはいふ當時列席の詩人の話であつた、翁席上の詩は

老來自寛風月邊 山堂鎮日伴雲眠

短長皆夢何須説 從俗還登米壽筵

猶自壽二首を作つて居る

三十六年は九十歳となつたので元旦自壽の詩二首を作つた

乖迓平生混俗塵 一林纔得寄斯身

天公何意寬吾壽 惠雨恩風九十春

生逢清世帝城春 竹影梅香又一新

洛北詩仙丈山老 吾躋九十一憶其人

誰人か此詩を清國を大儒愈曲園に傳へた、曲園は兼て山高記を讀みて翁の人物を知つて居つたか中々未見の人に壽詞を送るやうの人ではないのに次の祝壽を寄せた

日本雪爪先生九十大慶次原韻壽之即請吟正

蕭然心跡兩無塵 留得清閑百歲身

往々雪泥休更問 再看明治十年春

至貴國明治四十六年先生百歲矣

翁は之に次韻して却酬し猶疊韻二首をも送つて居る

愧我虛名落世塵 誤煩海外碩儒身

幸然共享長生福 唱和東西兩國春

七一、翁の終焉

三十七年春來日露の間に穩ならざるものあり人心洶々の年である翁は歳首十二首の詩を作つた

我齡九十一 東面開小室

天恩無_二物酬_一 起拜_二新日出_一

我齡九十一 天性固疎逸

文武出_二聖人_一 維新逢_二大吉_一

「聞説春來邊警加、定有_二廟堂籌策在_一」といふ偶成を作り孫山藏が海軍士官となり出征するを送るの詩も出来て居る、元朝には祝餅十片を食して去年より二片多い丈けだと云つて家人を笑はしたと云ふこともあるが、六月十二三日の頃より多少の不快氣を感じ、十六日には舊友小野湖山に寄する絶句が出来た。

人生九十喜_二同庚_一 久矣江湖風月盟

矧是殘齡逢_二盛典_一 一尊安得_二話_一斯情_一

十八日朝に至り豫感があつたか、端書に「老人大患」と認め麻布法音寺の樸大仙に送り、暫くして粥を求め、喫すること一啜で、其儘溘焉として睡るが如くに大往生を遂げた、嗚呼大星遂に地に墜ちたのである。

朝廷よりは兼ねて廿九年特旨を以て従四位に叙せられてあつたが逝去するや亦三百圓の祭料を賜はつた、越えて廿二日青山齋場にて葬儀を執行し、會葬者二千人と云はれた、青山墓地に葬り墓面

の「従四位鴻雪爪墓」は弟子春倪が題した。

七二、翁の概評

秋月古香山高水長圖記の序

金銀珠王は朋友同人皆之を拾ふ、舍て、去るものは寡し、顧みずして行くもの天下幾人かある、我雪爪翁蓋し其人か、維新の初、朝廷門閥を廢し、苟も一技一能あるものは皆擧げて之を用ふ、所謂金銀珠玉を地に委するの秋なり、翁は則ち方外無礙の心を以て、毎に新政の大策を冥々の中に賛成し、其友とする所、諸侯に在ては閑叟容春岳の三傑あり、士林には横井小楠木戸松菊小原鐵心等あり、其他三條岩倉諸公より西郷大久保廣澤諸氏に至るまで、皆心識ならざるはなし、若し翁にして金銀珠玉に意あらは何を求めて獲ざらん、而して翁は荷衣橡食軒冕を泥塗にし、廩祿の糜く所とならず、節高く識明なるものに非ずんば、孰か能く此翁の如けん。

矢土錦山

先生の閱歴頗る藤惺窩先生に似たり。

長松秋琴

翁亦方外の名臣と謂ふべし。

依田學海

昔釋秘奇男子を以て喜んで歌詩を作る、其石曼卿稱して雅健詩人の意ありとなす、今此卷を讀む識見超卓、文詞雄絶師は殆ど今の秘演なり。

大島怡齋

翁吾郷天女山に住す、巍然たる巨刹、布金の道場と稱す、而して巾鉢蕭然一貧流ふが如し、余戯れに人に謂ふて曰く、翁に呈するの牘は宜しく道體清貧と書くべし、清福を稱すへからすと、翁聞いて之を喜ぶ、交情愈親し（中略）往來舊盟を尋ぬ翁の清貧故の如く、一鼎の茶、半架の書のみ、蓋し翁の氣宇天空海闊天下の物を以て己の物となす、而して己の物皆人の爲めに舍去らるゝを知らざるなり。

廣瀬雪堂

翁屢京師に遊ひ時事を畫策す、世目して白衣宰相を以てす、未だ幾ばくならずして朝廷翁を徴して教導局を創す、余も亦史館に入る。

服部空谷氏

翁の特種の人格は天稟の善に加ふるに、多年の禪道修養の功を積んで玉成せられたもので、其長所は事に臨み機に應じて自在に發揮せられた、故に其行動は常に淨裸々赤漚々て、彼の明の道行や、本朝の天海崇傳の如き、策士風ともいふべき陰影は微塵だも無かつたやうである。

雜誌大乘禪に翁の功を録して曰く

- 一 小原鐵心を打出した事
- 一 松平春岳を指導した事
- 一 廢佛毀釋を救ひ日本の國教を立てた事
- 一 僧侶の迷夢を醒し噉肉妻帯を許させた事
- 一 鍋島閑叟をして勤王の同志たらしめた事
- 一 木戸孝允を促して東北鎮定を策せしめた事
- 一 日本美術の海外流出を戒めた事
- 一 漢字廢止を打破した事

七三、翁の後繼

淺野家の先代長勳侯は、維新後翁を知り、且出生地の舊領内たるを以て特に敬重して居られた關係から、令弟雪年を以て翁の嗣子とせられた、明治十六年正親町定正卿の妹菊子を配遇として迎へた菊子は中山一位の局の姪に當り賢名あり幼少から局に教育せられた今は共に世を去られ當主は武久と云ふのだ次に略系を載せて置く。



○印現存者

七四、翁の交遊

政界學界法界に於て翁の交遊は殆ど無限と云ふべきである、今は九牛の一毛たる僅に残る處の彼我の書簡に依て其一斑を髣髴することゝしよう。

秋月種樹（古香）（日向高鍋藩主）

賀新禧

拙老執海へ入浴開會日々□□午後日々登場夫故に大に御無音に打過候御風邪御快方大賀々々頼氏珍物持參之由何卒近日拜趨候間一閱仕度候御詩文不相變出放題と認存候別一箋は御定代故私方へ頂戴仕候餘期拜眉候不一

一月廿二日

種樹拜

江湖翁恩師 玉台下

大久保利通より

強暑に相成候處彌御安祥被成御座奉拜賀候此内之間一寸參樓可仕相含候へとも多端に取紛御無沙汰打過背本意候小生も今般東下被仰付明後廿八日發足仕候隨而些少之至に候へ共烟草一箱扇子此内御懇篤被示賜候御禮旁表寸志候ニ付御叱留被成下度奉願候時下御保養專要祈入候早々頓首

卯月廿六日

雪爪老師

大久保生

一一八

山岡鉄舟より

其後御無音御海恕可被下候陳は小生懇意にいたし候長沼潭月と申もの拜光奉願吳候様申出候御用多之處恐入候得共御逢可被下候再拜

十二月五日

大鳥様

山岡

後藤象二郎より

唯今は御枉駕被下候處如例紛雜中欠敬之至に奉存候是非貴寓にも參上段々之御詫もいたし度奉存候處先刻も申上候通にて其義も不任心底己に當□御上淀最早御無音失敬仕候此品は甚乍輕微進呈仕度御笑納被下候はば本望之至奉存候先は合御詫方此書捧呈仕候草々頓首拜

仲冬初四

雪爪大徳 貌座下

象二郎拜

谷鉄臣(如意)より

十四日附尊翰拜誦候處殘炎之候先以御清穆春賀候牽牛花前之高作奉感吟候卒時次韻一首又倒音韻一首入御覽候御一笑可被下候外に時事偶出之作一首是亦御一笑可被下候當時征清之一舉は愉快無限と存候得共衰老人には何となく全國人民之貧乏に及ふへき乎とのみ杞憂いたし何分にも兵は窮むへからすと存申候然し是は内秘々々

吉田氏丁憂之趣御氣之毒之至候御序も御座候は、厚御傳弔可被下候

大給君御逢之節御噂被下候旨拜承此人華族中之雅客舊交之情難止候前日も一硯石を被贈日々愛玩致居候御逢候は、宜く傳聲可被下候先は拜答而耳草々頓首

八月十九日

鴻雪爪様 侍史

谷鉄臣

由利公通宛(公正之子)

實は議場も閉會近日御歸り樂居候折柄御様子承り一驚を喫候也

過十日御認之郵信拜誦先以大兄御清適奉賀候然而御尊父様御容體御報知被下奉謝候其後春堂よりも申越加藤治幹氏之來話にも至極御輕症之趣承居り猶大兄之御一報詳細分明致候第一言語御食事等御異常も無之義は此に症於て何寄も結構と奉存候右之御様子なれば不日に御快復奉賀候加るに

時節追々暖和に向ひ御攝養之順序も宜敷と奉存候老生近來頻々右手振出し岩佐之□方に而攝養致居候間別而御案申上候

尊父公へも大兄より厚御見舞之御傳語可被下候頓首

三月十二日即答

鴻雪爪

由利公通君

追啓御北堂へも御看護之御疲無之様御傳言可被下候此間地震東京は至て微弱の趣京坂は近來之激震と申觸し候得共爲差義も無之候也

小野湖山宛

梅雨に連續之溽暑愈御佳適奉賀候一度得拜晤候得共何分遠隔例之望洋之歎に相過候此頃新聞紙上先生高作拜讀不圖ケ様のもの出來候御わらひ迄に拜呈御直し可被下候頓首

七月廿三日

雪爪拜啓

湖山先生

七月八日諸賢歡迎湖山翁於小西湖畔長醜樓余微恙不果約乃次翁詩韻以博粲

名士一堂皆熟知、相迎款語各呈奇、林顔湖面歡今日、鶴意猿情戀昔時、洛下風煙養有錦、

閑中日月髮無絲、聖明盡頌吾翁筆、不做當年杜拾遺、

庸正

未定

小原鉄心より

上元後一日之御裁書、念五日鴨涯之小寓居ニ至雪手拜披嶽公親書之高文章在封内驚喜拜舞向者尊待と賜とを異敷之榮と感戴能在候處更又有此賜外藩之微臣寵恩至此實不知所謝候師幸執達萬可盡一請伏是冀已前一事件之外は歸家之上心事可盡候今日は君山君を一訪謝意□□申述候 勿々不一

開春念七

小原寛

雪上人座下

松平春嶽公より

春堂罷出十八日其地に赴き候由故一筆附幸便候、冷涼の候大和尚起居萬福欣賀の事に候、先日は態々京地へ上り其節は不相變接聲咳何よりの品送られ欣悦不斜候、長濱にての離別今に忘れ難く昨夜師を夢に見申候、問ふて曰く眼中有人や、師曰く無し、又問ふ眼中無人や、曰く有り、今朝目覺彼此思慕の處に春堂參り候故附一筆候、粗茶二種供清玩候笑味候はば幸甚の至りに御座候、序に下官小照進入申し候書餘の心緒春堂の舌頭に附し候也不備

雪爪大和尚 几下

其地風光頗る佳なり、何ぞ山上に地を被卜候て、草庵造築可然存候、金龜城を岳陽に比し、雲夢を湖水に比し候て清賞遙羨の至りに候、彦根重役へも宜敷致意給はる可く、乍末筆君公へも自愛せられ候様申上られ候様致し度候也。

木戸孝尤を送るの聯句

送木千令之浪華聯句

晴旭輝時下_二渙江_一春嶽

青山十里入_二蓬窓_一雪爪

舟厨別有_二樽酒_一閑叟

醉到_二華城_一愁魅降吉香

菱田海鷗に至つては又格別のものあり、先づ彼の書齋の五癖處は詩酒貧眠病の五つを以て翁の命する處、海鷗五首の詩を賦す、海鷗一日養苔山房を訪ひ詩あり、翁次韻し、疊韻唱和各五十首に至つて遂に休職を乞ひしと云ふ、又翁詩を袖にして過られ、喜び賦し且疊韻六首を詠して居る、翁の濃に遊ぶを送つて疊韻七回四十首を詠じ、翁の題言を附して居る、其他數ふるに勝へざるの有様である、次の詩は面白きものだから載せておく

觀江湖翁寫真壽八十

洋人某慕翁風事
呼曰神仙

一從_二洋客喚_三神仙

畫裏清丰世上傳

紅頰何知齡八十

白髮唯見丈三千

溪英順、毛芥と號し大垣の人南條文雄の父だ、中々の交通があつたやうで毛芥遺稿中に數首の詩が載つて居る、文雄も時々逢つて居るのだ

送雪爪禪師移錫越前

毛 芥

堂宇巍々經始全

忽然飛錫老懷璉

摩尼不_レ語分_三諸相_一

滄海無_レ心容_三萬川_一

白石清泉眞面目

濃雲越樹舊因緣

他年誰修叢林史

師是檀興兼_三淨禪_一

七五、親戚故舊に篤し

天保八年の長崎より歸りがけか左なくとも其後程遠からぬ時に歸省せられた際と見ゆ、十四五歳の弟、宅三郎が無理に大垣まで同行した手紙が保存せられてあるのだ。

其後は御全家倍御多祥之況萬福不淺奉欣然候、誠今般は長滞留萬々御世話に相成忝存入候、併久振面愕寛々安心仕候事に存候當所迄之船配意にあつかり都合能十六日着岸金毘羅へも參詣至極順風に御座候當地一兩日逗留土産もの等相調早速歸寺之所存候前件御安意可被下候
宅三郎義種々申聞候得共是非乗船金毘羅迄と申事候間其積に候處亦復無理に上坂いたし候其故先一應濃州迄連歸候上九月下向之節當地迄同伴爲致歸國候と存候間左様御承知御母公へも安心被成候様御致聲頼入候

御母公に厚傳話吳々も頼入候倉橋瀬戸田等の御序之節鶴聲島徳天寧兩所懇篤に預り候間渡海之節別而禮舞頼入候

長福金蓮成願亦同然英山雲山無事申候當船頭の都合九人前拾貳匁宛宛結算申候其外壹步貳朱程茶料祝義遣候間左様御承知可被遣候足下より餞別に預り候金子貳兩道中用意之爲先持參申候

伴僧の者共よりも調法之木綿貫候謝禮厚申出候此所御母公にも同然御傳可被遣心事多端亦復九月下向之節此處より可得貴意候 頓首々々

八月十六日

浪速木壽川船中 鴻

爪

寄

養鶴亭

秀明雅丈 梧下

倉橋阿梅阿貞約束之品は九月に可相下候足下の土産之燭臺も同時に贈寄可申候時氣追々秋涼折角

御自愛奉祈候再頓

福井在住中吉井宅三郎宛の書信

時氣自寵祈入候

御兩親始家内の宜敷傳話頼入候

今度大崎島長福寺和尚本山の來錫拙寺にも訪被吳候間快便と存裁書近來は疎濶に打過候得共中莊よりは折々消息も有之玉家無事に御暮之趣致承知可賀之至に存候中莊北堂始皆々無異殊養鶴主人近頃追々榮轉盛勤之由御互に相賀候玉家の御兩親方御壯健の事と存候子供も追々成長致候と相喜候老拙も追々入老境候而雪國はいやに有之候得共因縁と見、當國守より毎度の懇請故此方に先つ無事に住山申候省念可被遣候今春は桃源山に授戒あり參れと申事故三十日餘も留錫致候彼方堆喜始寺内皆々無事御安意可被遣候近年の内一度歸省申度と存候間其節緩々面話可申と存候心事如湧又々可申進候不備

五月十四日

雪 爪 道 人

森四郎三郎の女某の結婚するや次の祝詞を贈つて居る。

嫁入の祝詞

女子家にあるとき父母につかへて孝を盡すべきはいふまでもなし父母のもとをはなれて他に嫁してはわが身のことを思ひたまふ父母の心を心とし舅姑につかへ夫にしたがひ行をつゝしみ子をそだてめでたく一生をおふるはこれ孝なれば舅姑には父母と同じくうやまひつかへ實の父母とかはることなかるべし

壬寅夏日

八十九翁雪爪

船越光之丞安清種兩氏頼俊直甥の藤井壽六宮地康雄桑原孝作其他の人々は翁の許にて世話をなし通學させられたのである。

七六、小泉甚右衛門

廣島市内草津の里に小泉來兵衛氏がある、其祖は甚右衛門と云ひて陰徳高く地方稀なる名家である、明治天皇初めて御巡幸の際御駐驛あらせらるゝ事となり新に高厦を築きて行在所に供し奉り事終

りて之を焼毀し其釘を集めて海底に沈めて以つて聖躰を漬すことなきを圖つたのである是は明治十八年の事では是に對する翁の詩及び書簡は

天賜榮褒已幾回 防奢欲手火高臺

壑田開道多年力 渾厚民生利用來

贈小泉翁、々平生盡力於厚生利用之道、壑田開道凡有益於鄉邑者、捐已資財無不爲焉、鄉邑隣里之人皆徳之、朝廷屢賜褒詞、余聞諸土人曰、曩龍駕西巡之日、翁感恩泣喜、新築高厦以恭供行在所、後翁以爲、若此高厦置之吾園則遺子孫奢種、若讓之他人則恐瀆聖躰、不如此一炬以付烏有也、聞此一話其人可想矣詩中故及

鴻雪爪

呈啓時春寒料峭玉家御安靜慶賀之至に御座候當方一同無事御省意可被下候舊冬は例年之通不相變名産之西條柿顆多數御惠贈被下御厚意鳴謝之至不相置賞味親懇なる好事家之面々に分配何も賞感致候却說十八年度御駐轡之玉座淨燒云々加之主上御踏石ヲ以テ紀念碑御建築之趣寫眞御贈被下拜見致候實ニ萬代不朽之御趣向感服之至ニ候先ハ御惠贈之御挨拶旁々延引一書進呈致候爲國家御加愛是祈候不宣

三月九日（十九年）

鴻雪年

一二八

小泉甚右衛門様 玉下

春寒料峭御滿堂逾御佳適奉賀候此許皆々無事御省意可被下候先達は不相渝開年之御祝信殊に其節は遠路之處御國産之柿澤山御贈惠被下毎々御厚情之程奉感謝候今年之分は別而風味宜長相樂候御滯蹕之祝詞一章御咄之儘相認候今度淺家の便宜に依頼致候間御落收可被下候老生舊臘より風邪致居遅延之段御海涵可被下候時下御加愛奉祈候頓首

廿年二月廿四日

江湖翁

小泉甚右衛門君

御序之節泰翁和尚へも御傳可被下候

又明治廿八年には昭憲皇太后嚴島神社へ行啓あらせられ其途次再び御駐輦遊はさるゝの光榮に接し且青松一株を下賜せられた此時も亦翁詩を贈りて頌賀したのである。

稚枝嫩葉春松樹 自帶瑞雲楨幹姿

雨露恩情初種日 己期千歳鶴來時

皇后宮以明治乙未春四月十二日、行啓于嚴島神社、小泉翁家有駐輦之光榮、拜許多之御物、加賜青松一株、使之種其庭中、令旨以爲紀念焉、寵恩優渥、世間未曾聞有此例、翁之感戴可知矣、余與翁善、聞之不堪欣喜、緬寄小詩以大賀、是年五月初五日也、

山高水長翁雪爪時年八十二

翁は此年東京出發天機奉伺の爲め廣島に下られ先づ因島に展墓、吳にては山内萬壽治邸に宿泊し親戚故舊に會し十一月一日嚴島に參拜し小泉家に立寄り優待を受け同月十八日歸京したのである。

小啓追日深冷御滿堂逾御清適奉賀候却説先般は不圖も參敲萬々御優待被下且つ種々御家珍も拜覽殊に嚴島へ御渡海社前御案内吳迄も御送り被下御懇篤之段難忘致深謝候老生本月十八日を以歸京淺家へも御懇意之段風を聴いたし相喜候家人共よりも不淺禮謝申出候海岳不取敢謝書差出候頓首

十一月廿一日

東京 鴻雪 爪

小泉 大翁 玉下

小泉氏よりは年々西條柿を贈つて居つた或年の年始の客に供した丁度其時大垣の小原家よりも送り來り居り味の良否の争になり詩人が遂に各々之を詠した其二葉が送られてあるのだ。

(前略)扱而今般も御名産の柿澤山に御清惠被下遠方の處年々御厚情奉感荷候年賀之客に福分致候處中には殊なる柿嗜之人有之別而藝州柿賞美之者打寄詩作抔致相樂候此儘轉覽に入候(後略)

喜年翁

廿三年一月七日

鴻 江 湖 翁
同 雪 年

小泉甚右衛門殿

二翁評柿似評詩 藝淡濃腹皆入レ奇

儂亦濃中一紅顆 何如此味少人知

黃石老人嗜柿以三藝州所産爲三海内絶品、庚寅春初、養苔山房席上、江湖翁乃出三柿數箇曰、

此藝人小泉氏所餉、彼濃人小原氏所餉、其優劣如何、因互論其味、予在レ側戲作三此詩、

以博三老一笑、

海鷗生菱田禮

幾箇甘味頼虬卵 彼出三濃州三此藝州

不レ闕三詩篇三唯闕レ柿 一場佳話亦風流(養苔山房席上三首之一)

黃石翁嗜柿、雪公曰、我不能レ闕詩能闕柿耳、乃出三數箇、皆遠人所餉 怡齋 (大島)

小泉家と翁との關係は何時始まつたかは知るよしもないが今同家の日誌に據れば其親密の度の如何も知ることが出来るのである。

道智殿同道にて鴻殿へ罷出候處互に老人の事なれば昔咄し始まり鴻殿の御舍兄當時御調郡尾道沖の島に割庄屋を奉職相續有之次第に付自分も割庄屋なれば昔をなつかしみ御互に胸を開きて親み合ひ皇國の事からを語り合ひ其後も度々罷出御懇意を重ねしに或時の御咄の趣は倅雪年儀は 淺野家より養子に参り候得ども未だ嫁の宜敷こと無之中山大納言殿より御内談も有之幸ひと存娘を見に行けと申付候へとも倅は親の思召に叶ひ候人物なれば好き嫌ひは無之と申候へとも夫にては親の慈悲薄しと思ひ母親と同道して可參様申付中山家へ親子連にて参り見請候處容儀不惡趣にて貰受けの事に治定致候處御先方にも至極御悅ひに候へとも公家衆には御法則もありて自分の娘を元大名の内へでも下げ遣はすとのみにて祝言と申事無之、之に依て嫁は貰ひ候へとも于今祝儀の式も不致候幸に割庄屋の御身分媒酌の心得にて親子の盃して呉候様御頼みに付委細長り甚右衛門の百姓身分御承知の上の御頼みとは冥加至極御日取り御治定仰せ越され候へば出頭可致旨申上候處さすれば明日に可致との義につき翌日甚右衛門酒肴末廣箱を進上致罷出候處老御夫婦若御夫婦并に道智和尚等立會にて鄭重なる御祝盃相濟み夫より何れも十二分の歡を盡して相披く其翌日甚

右衛門の旅宿へ雪年殿下社家を被連昨日の御挨拶の爲御越下され恐縮に不堪也(下略)

七七、結語

惟ふに我が因島の地は後白河院の御代長講堂御領となり爾來連綿として應永十四年の文献を存し足利末期に及んで居る實に四百年の長き皇室の御領地として特別の關係を持つて居り、住民は「院の民」たることを誇りとして「院の島」と呼んで今日に至つて居るのである建武中興に際して法橋幸賀を出し明治維新には恬淡無我純忠無比の鴻雪爪を出したる實に偶然ならざるものあるを覺ゆるのである又惟ふに我々の祖先は所謂海賊としては瀬戸内海を統べて航海の安全を圖り倭寇としては明韓の民を震駭せしめ一代の智將小早川隆景の部下としては征韓の役に従ひ奮闘勇戦遂に舟山、長山の諸島乃至朝鮮の近海に骨を埋め鬼哭々々多年憂憤の中にありし英靈今は興亞の聖戦を見て微笑を洩しつゝあるであらふ、彼を思ひ此を思ふ時地方に生れたる我々は一大發憤をなし奮闘努力聖謨を翼賛し奉らねばならぬ世界無比の皇紀二千六百年に際し記念として本書を郷土の人々に贈る所以のもの亦實に此の意義に外ならぬのである、

昭和十五年六月十八日第三十七回忌辰、著者謹んで識す。

七七、(追加)餘裕綽々

木戸公日記(九月八日改元)

明治元年九月九日晴、家居終日御國への書狀を認め梅屋七兵衛の歸便に托す、山田市之亟今夜明朝の間に北越へ發す、來て平生の志を語り余に残し古詩一篇去彼の憂志甚切、余大に感歎す、余に亦世上元是の古詩を乞ふ、書して贈之、また同人近頃竹田耕雲齋の墨竹、梁河星巖の古詩と雙幅を得、其匣上板に余の一書を乞ふ、余不願鉄面皮にまた認て贈之、余過日不_レ得_レ止の情實より北越行を歎願し、また屢御許容のあらん事を願ふ終に不_レ至_二御許容_一、歎願書昨日御付紙を以て下示せらる、雖_レ然兵士の苦情被_二聞召_一三千金を賜ふ、依て振武隊の兵士神崎小右衛門、内山半藏へ此旨趣を告げ差返す、兩士明日出立と決す。

今夜與_二伊勢氏_一有_レ約至_二于菊中_一雪爪、藹山、支峰、春翠、紅蘭、天江、青浦、小蘋等來て田中顯助等在_二同樓_一余の來るを聞て又席に至る、互に書畫合作を催す、十一字頃に至り相散す、九月十日 晴、朝例刻參 朝、薄暮退 朝、今宵雪爪と有_レ約直に訪_二彼の寓居_一小松、横井、春翠等在_レ坐青浦小蘋等も亦至、支峰繼て來、今宵亦書畫合作を催す十一字頃相散す。

九月十六日 宮中ニテ 至尊御前ニ於テ御酒ヲ賜ハリ

大醉與ニ土州容堂公ニ大に議論を起し不覺數十杯を傾く、終に退出に及び、御廊下に倒れ二字に至るを不_レ知、また於ニ休所ニ岩公及田中神山兩五位と相論す、三字歸寓、實に十四五年の大醉也。九月十七日 曇、宿醉不_レ能ニ出勤ニ朝大村益次郎書面到來、仙臺へ和を謀るの策大村の懸念至當實に不安心萬々……………。

(鼈頭) 仙臺等和を請はしめ速に干戈を收むるの論不_レ少、今日の際一大變革には決して容易に和を請はしめ、表面の無事を急くは必ず太平の基にあらず、余も頻に和を請はしむる等の策略を屢々論破せり、雖然此說頻々起れり。

同十八日 御東幸ニツキ官代繁忙……………

同十九日 晴、例刻參 朝、今日尤多端務て辨ニ決凝滯の事件ニ五字退 朝、……………

夜上山、耕石、小藪、雪爪等來る相集て傾ニ別杯、……………

(同二十日車駕御東行)

右、「四二、松菊を送つて逢坂を過ぐ」の末尾に挿入すべきもの服部氏の注意を受け追加し置く維新の豪雄には此多繁の際猶餘裕綽々たるものあるを知られるのである、(九。一一)

雪 爪 遺 稿

雪爪遺稿

駿州途上

燒殘炬火出林端、破曉蒼茫眼界寒、知是芙蓉真面目、今朝未歷俗人看。

歲晚過沼津

家々歲晚拂煤辰、孤影自憐行脚身、白水青山春幾度、憑誰洗却舊羈塵、

夜下澱江

百里秋江不起濤、蘆花淺水緩移篙、薩音越語人都睡、獨占篷間山月高。

春驛曉裝圖

殘星落々照人明、破曉春風千里情、記我江村行旅日、慌忙理屐上前程。

發京抵丹波苗秀寺途上

十餘年際來三度、山笑水容皆舊知、老阪依然人已老、風霜又是送秋時。

初祖贊

揚江夜月急呼船、嵩岳殘雲閑打眠、落魄始終無所住、又提隻屨返西天。

達磨忌

剩竊殘霞是小春、霜餘雲錦屬誰人、色空誤現楓千樹、不道祖翁那半身。

逸題

白波青嶂佳山水、清暑微風如夏日、眠足閑下碧層樓、十界都來忘等匹。
亂立海巖重繫維、春帆細雨夕陽遲、到門休怪頻回首、面々青山皆舊知。

大旱賦示郡宰高岡西溝

旱田龜拆稻麻枯、大地生靈何日蘇、巫覡無知猶禱雨、坐薪縣令一人無。

安政甲寅西成書懷

去年海內遭旱魃、餓莩誰能安生活、今年畿甸又大震、屋崩人斃地軸折、君不見夷艦泛海簇妖氛、輦下失火災亦頻、莫乃陰陽失調理、街說巷語何紛紛、爲報魯女且休憂、廊廟肉食自有人、吾曹住在山林間、天事人事非所論、九年儲積亦爭識、但喜今秋幸有年、不獨生民有喜色、餘澤自見及空門、遺穗一飽真知足、瓦鉢生計亦國恩。

正覺寺小集有客袖來齋藤拙堂信州地震行作、席上限其中之字各賦、納得史、時甲寅晚夏大震之後也

地震又天雷、觀之千載史、今古有時有、茲歲六月始、此變三五州、屋倒人亦死、噫嘻夫天哉、生靈值此否、震動猶不收、餘震及吾美、物情雖囂然、幸不至魂褫、曾聞信州震、今厄非可比、如何世儒輩、議論甚激視、健筆誣天孽、歸罪浮圖子、浮圖亦天民、天豈殊此彼、何爲異其命、佛甘受毀訾、奈無辜生靈、所見固無故、近聞東北陬、賊艦來不止、此罪又嫁誰、時勢自可揣、天運何以逆、吾論果不是、天命何足惶、此意遂難理、大笑拋筆去、一斗般若水、不如劇飲盡、爛醉忘清滓。

雪日敝廬小集

窓蟲沙翊夜來寒、曉看山河爲白團、老去風流無箇興、疲驢蹴雪上吟鞍。

訪隱士

溪流幾曲路三叉、澹々秋光入野花、欲問幽人何處是、一林紅葉夕陽家。
野橋流水隔鉛華、鳥語呼人入晚霞、一種春風何所見、梅花殘雪處士家。
知是貴官旣放衙、沿流疾到綠陰家、曠懷東道量如海、笑舉航船酒當茶。

二見觀旭日偶有此作

海食侵明過海端、松青沙白海風寒、多時決背雙巖際、雲破旭光已萬竿。

丁巳之秋同藤森弘庵游養老山遂宿千載樓

溪聲遠導人、一路入亂碧、全山皆青松、滿洞盡白石、老樹勢如攫、峰逼溪忽極、中有白龍跳、號怒下雲壁、維昔元正宇、至孝天感激、一掬水化酒、薦親飽靈液、美名千歲流、紀元照青冊、此山欲一跋十年橫胸臆、丁巳八月秋、果遂著游屐、賴有文豪朋、俯仰質遙昔、下山樓可倚、脫屣恰良夕、秋風吹暮雲、寒碧天如濯、夜來清不寐、起視山月白、

瓦鷄際霞山人詩次其韻以寄山人

山人畫山水甚有風致因及

幽栖想見度春秋、竹逸書房樹逸樓、數朶芙蓉開照水、一叢蘭蕙種分疇、雲烟寫出山々淡、風月甞來筆々優、起望上方途已遠、錫瓶何日叩門遊。

郝隆曝腹圖

仰臥乾坤氣自豪、何甘萬卷古人糟、腹中漫貯閑文字、孰若吾家不立高。

游雲州神龜峽

六環遊雲州、々多佳山水、松江扼要津、百雉壯城壘、錦江與碧湖、煙景真可喜、更有神龜峽、境靈鍾秀美、吾來秋盡候、巖屏紅葉倚、雲壑與煙壘、盡々相對峙、亂石紛縱橫、飛流疾如矢、孤舟出其間、險絕令人駭、身世維兩忘、心魂寒不已、拖尾一回顧、万山帶餘晷、

又得三絕句

青嶂丹崖兩岸山、蒼茫煙靄界人寰、扁舟一棹隨流下、恍入倪黃圖畫間、
雲煙縹緲擁峯巒、危巖崩嶺膽欲寒、秀色逼人難擲得、中流自在放篙看、
松翠撲人神骨清、亂山疊々只麼青、千秋似待吾來倚、上有雲巖萬尺屏、

播州途上

飛錫浮杯半月程、鵑聲鶯語漫多情、休怪箇裡缺消息、一路青山笑送迎、

讀胡澹庵封事有感次韻神山鳳陽

千古議論意氣高、讀來字々起風濤、何唯賣國非檜等、近日埋藏日本刀、

月瀨觀梅偶聞洞津侯有近日遊覽之舉乃賦

萬玉林中流水長、扁舟杳入小仙鄉、此行若落大官後、未必梅花爾許香、
小原鐵心自東都寄詩責納之疎濶意辭悲壯忽發索居之歎次乃韻却答

白山高、墨水悠、誰識這中有消息、不寄一字春及秋、區々何道暄與寒、豪來天地亦一瀉、此際死生置毫末、思追煙景五湖游、山花發、澗水流、早晚把臂論心趣、葛巾烏帽共倚樓、

題橫井小楠四時庵

虛心觀萬化、一庵宜四時、先生唯自得、出處兩相忘、

次春岳公見示小楠詩韻却奉呈

麻衣草座寄斯身、常蓄胸間天地春、著々風塵棋一局、傍觀笑作爛柯人、

橡栗山房成自題其壁

栗紫橡紅秋滿林、蕭然一味卷禪心、眠醒茶熟山窗底、笑對白山高萬尋、

同旭莊訪井上松濤賦所見

城尾村頭路接、蘆花淺水人涉、溯徊何處絕奇、夕陽半林紅葉、

春雨無聊偶鷗波至依東坡岐亭韻各賦

袖得麗詞來叩門、君言穿過百花邨、品紅評白話無次、煖酒煎茶烟有痕、雨倦風停春欲暗、情深意到座將溫、鬢絲禪榻夢難覺、唉比三生小杜魂、

游天橋携松樹一株而歸遺春嶽公係以一詩

山程水路碧重々、跋涉勞吾千里筇、欲使蒼生庇涼蔭、爲公護送一株松、

聞鐵心挂冠有此寄

達士與山水、千秋如有待、君今野鶴姿、逍遙游自在、三萬頃白波、七十二青鬼、扁舟從所之、清風吹下載、擊楫一長歌、應悔十年宰、

游濃飲于鐵心居士無何有莊酒間分韻

有似白雲戀舊壑、千里來對養老峰、陶然一醉故人酒、不須咄々說色空、修竹清風疎桐月、飲中真味老更濃、

重過鐵心居士無何有莊

一林寒色客重過、水落石腥涼趣多、時事君家非不及、笑將平地踏風波、

游大垣歸後寄懷鐵心小原氏

野寺秋花村莊疏、澹遊三日夢蘧々、獨記佳夕拉名士、扁舟載酒下水溪、論破心事人忘言、一輪白月落在水、歸錫今日望天涯、雁背依微青山多、

乙丑元日 前年有武田耕雲齋乱故及

舊巖房下亦陽和、野竹溪梅春意多、禪榻笑迎新日月、不知人世動干戈、

贈南邸隱士

家在楓林夕照間、依稀風趣小仙寰、知他高隱釣魚艇、流儘蘆花淺水灣、

寄鐵心小原翁

天地勾々毳影旋、時情日夜逐風塵、何如一片青山底、抵死安眠高臥人、

題畫

一片衰衣冷、柳灣晚繫舟、待人々不到、又欲下楊川、

解嘲

一自貴人甘講和、日看東海起狂波、近來白髮關公道、偏向山僧頭上多、

病後偶成二首

吟骨龍鍾鶴樣臞、餘生湖海一微躬、三冬抱病成何事、贏得風流雪上鬚、
病度秋冬已半年、衣衫薰盡藥爐烟、東風雪後醫治日、春入梅花鶯語天、

送即庵和尚歸鎮西

紫山大海子規天、躑躅花開紅欲燃、今日送君無限感、曾游屈指十餘年、
錢把袈裟師叔歸、青山不礙白雲飛、莫嫌無相風裁惡、也勝他家錦繡衣、

蒔田雲處至有作乃次韻賦似 詩用東坡韻

吟情寄在半開梅、細雨春寒小草臺、觀世竊憂新政濶、尋詩且喜故人來、枉將心事託風月、好把酒錢澆崑鬼、明日岐亭同趁約、喚醒坡老也傳杯、

壬戌正月廿日敲矢鳥怨軒梅莊依東坡女王城韻賦怨軒、未曾蓄妻奴故及

鐵錫來敲林下門、依稀風致似湖村、水無疎影橫斜態、月有暗香浮動痕、殘雪侵入唵骨冷、微醺上臉
喚聲溫、愛君澹泊饒神韻、鶴子梅妻處士魂、

雲處至

不厭佳朋日々來、柴門常鎖爲君開、山厨依例無餘味、芋栗一盤斟冷杯、

寄懷本多竹香在三國港

想君唵棹意思長、汀葦岸蘆風顫香、炎氣官情都一洗、中流自在趁新涼、

冬至示衆

群陰剝盡一陽回、橫牖梅花數點開、依約滿堂閑衲子、楷磨不力奈靈臺、
將移住彥根清涼寺賦呈春嶽公

巾錫曾從挂翠微、荷衣橡食亦恩威、々々到底如天濶、只許山雲自在飛、

戊辰初春

亂餘無客訪袈裟、盡日繩牀只結跏、茶熟香殘初定起、半輪淡月在梅花、

井伊直政公例祭

國初佐命執中權、赫々神光三百年、大地風塵曾不到、一杯長鎖好山川、

游嵐峽宿雪亭

綺羅人散洗鉛華、夜聽水聲眠酒家、夏々溪禽呼夢去、起看春月在櫻花、
京寓暇日偶作

豔紫嬌紅破結跏、煙光日々上袈裟、雖僧唯道耽春色、何識瞿曇亦坐花、
宇水興聖寺

石門向晚問高蹤、老樹寒雲江上峰、德貌鎮仰山水地、峻溫併見祖師風、
閑叟公見訪戲賦呈

翠色如流雨後山、水聲繞檻遠人間、客來饒舌知何意、忙了湖翁半日閑、
偶占次鐵心韻 戊辰三月

亂離入感舊山河、起滅雲煙掠眼過、連岸王侯新第宅、水聲獨向我家多、
湖山偶成

家在湖崖第一峰、煙雲疎處寄孤蹤、茶殘香爐人歸去、立聽夕陽山外鐘、
仁和寺宮北征使者徵余賦此以辭

湖月林風閑臥辱、羽書何物夜驚人、山翁有策蒼生活、肯逐兵間馬尾塵、

朝命赴東京途上作

孤影重過海驛春、道衣又染馬蹄塵、千秋絕白天邊雪、纔入御簾還一新、

還湖山偶成二首

抖擻歸來笑昨非、依々湖月照巖扉、誰言輦下塵如海、不染山翁一衲衣、
留錫皇州過半年、袈裟香染御爐煙、林麓歸來秋更好、湖雲深處不朝天、

新歸自京師

雲笠歸來已一旬、袈裟猶帶帝京塵、紫朱接款非無趣、何若湖光山綠真、

鴨泝寓樓即興

遙憎是雨近憎晴、坐看雲煙幾變更、風罷須叟去無跡、一欄流水夕陽明、

芳山觀花

春風一路涉坡坳、宮址蒼涼感倍加、某水某山足徵古、登臨不獨爲櫻花、
南朝遺事夢摧幾、回顧當年坐夜闌、唯有櫻花枝上月、春風曾歷照金鑾、
幽懷一段落煙霞、古寺春深日欲斜、王氣空隨流水去、千年遺恨在櫻花、
名花幾載護陵岡、正氣發爲家國祥、今日維新皆觀算、無人不說及君王、

何邊櫻樹古行宮、感慨南山王氣空、五百年間花有恨、今看陵上度春風、
櫻樹鳥啼客夢殘、起看春月在欄干、哀吟楠子梓弓詠、如意堂前夜色寒、
踏盡和州泉石間、春風百里度仙寰、某峰其水皆多感、不爲櫻花上此山、
庚午春晚過伊勢弔齋藤拙堂

細雨春寒游月瀨、看梅歸路叩山房、音容在目如疇昔、客思今來落杳茫、
百如庵閑居春倪至喜賦

巖門長夏熱塵無、竹骨梧身人與臞、且喜笈鞋來慰我、一林秋雨話江湖、
偶得示人

長松繞屋翠千株、自笑身形與鶴臞、天賜湖雲三萬頃、曾無官吏促年租、
自畫墨梅

貌與梅花一樣臞、老蒼傲骨豔姿無、任他俗眼論毛色、爛漫天眞寫上圖、
辛未十一月重游越前贈本多釣月翁

風月多情水石間、茶煙吟榻每開韻、十年心事重將話、携手同過舊碧山、
墨水所見

綺樓傍水起、門柳鎖風煙、一養老漁子、立盡夕照船、

秋日出遊

野人莫訝我何求、老去閑遊最可秋、紅葉疎林殘照外、歸鴉數點度寒流、

和韻

蛻脫區々天地樊、笑爲戲具打輕翻、一輪水面宵々月、不管痴人留影看、

次秋月古香寄示詩韻却似

江亭近與二州通、花靜泉聲禽語中、記得名流文字飲、曠懷太守老廬風、
公子英才時務通、榮斑黃閣老臣中、飲君收拾功名去、高臥家山賢達風、
曠懷太守
謂容堂公

東台觀花時乙亥春

春林雨後趁新晴、香霧芳霞總白櫻、昏黑出山頻四顧、依々花影送人明、

秋夕偶成

浴罷呼杯坐夕關、月懸林角照吾顏、唵蟲細々知何恨、不似斯心一片閑、

墨陀再游

鶯花昨日岸烏紗、買醉高吟上酒家、翻却春風前度案、綠陰深處喚清茶、

丁丑春游東台有感

春風不似去年游、眼看王師在海陬、重就名山尋舊約、落花啼鳥惹新愁、此歲有西南亂

丁丑春觀花墨水

漠々輕陰最可人、吟鞋怕踏落花塵、斜陽滿背無行盡、暖雪香雲一帶春、

墨水重遊

輕風吹柳百條斜、近水門々賣酒家、有脚徂春如待我、緩開重瓣幾陀花、

次田中雲岫韻

春秋不記々青黃、得意忘言何有鄉、一笑葫蘆天亦樂、萬緣瓦礫物皆狂、當車安步衣巾暖、充肉晚餐
芋栗香、霜磬何來山吐月、數行過雁亂成行、

行路悠々皆面朋、偶逢心識感何勝、秋從風葉聲邊到、月在烟林缺處升、十載徒追新世俗、三生猶記
舊時僧、分明昨夜前塵夢、坐斷湖山碧一層、

倚樓無個事、思句搜枯腸、林淺延新月、居荒着早涼、低飛知鳥樂、疾走笑雲忙、何處芙蓉發、微風
度水香、

余近日將著會游記、海居士詩以見際、次韻却寄、余之會游同居士者頗多、因謀此舉、故及、居

士原作曰匆々烏兔水東流、黃葉秋寒山雨樓、想見湖翁急公事、夜深燃獨記會游、

三生相遇記風流、遙夜剪燭人在樓、聚散死生都似夢、老來豈莫憶前游、

舊稿檢來刪字頻、峽花店月亦怡神、圖中歷々同游客、多是塵沙劫外人、

山房即事

幽居無箇事、塵俗跡如刪、秋入階前樹、雲沈檻外山、蟲聲生竹砌、鳥影度林關、入座黃昏月、娟々
照我顏、

失題

禪心鎮養佳山水、身後將留青幾層、他日有人貌師筆、林外先着種松僧、

游海晏寺同海鷗

老去宜郊步、吟行出市氛、寒山紅葉寺、落日故人墳、心淨聞清磬、境幽生白雲、且拋杖頭物、茅店
買微醺、

訪逸叟居士于五顯山莊此日偶當陰曆十月望前一日月色太佳因用去年唱和韻賦似主人

同日相逢今與前、果然石上舊因緣、君家好在松間月、每叩柴門迎我圓、

庚辰除夜

寒梅養得一盆新、數點花迴天地春、世味真成如嚼蠟、明年七十古稀人、

瀧川觀楓逢陶村翁

霜落秋林楓色新、翻將雲錦映松筠、相逢一笑烏巾客、同是溪山點景人、
庚辰十一月初一日喜海鷗居士至即次其所詠韻三首此夕適甚

吾廬如洗坐無菌、愛個蕭然一味貧、寒夜客來何所給、林風山月自家珍、
一林霜葉繞山家、斜日風爐獨煮茶、時有隣翁滿籠贈、斬新芋顆爛餘茄、
乖張時好不趨熱、來破寂寥唯是君、赤手白貧同臭味、一杯笑話驅窮文、

秋興次韻

眼看好景及橙黃、愧我餘生老異鄉、湖海前緣已付夢、風塵一世亦追狂、家僮沾得新醪美、隣叟送來
殘菊香、漫興詩成無寄處、塗鴉滿壁任斜行、

送琢寄師還越

風塵抽脚出皇城、白水青山取次迎、老去送人無一字、飛花鵲語漫多情、

海晏寺相墓地同雪鴻春倪

烏巾藤杖出柴關、一路秋風鳥語閑、埋骨百年何處好、紅楓林外買青山、

辛巳除夕與船越小林賴三子小酌時壁間挂杏坪翁詩幅因用其韻

天寒無客到林間、偶爾近君喜有餘、瓶裡殘香憐晚菊、盤中時味点新蔬、蘇家例酌三蕉酒、郝氏高談
滿腹書、老去轉增蛇壑感、厭聞明日是春初、

次船越子韵

雖然秋色屬荒涼、擺穎清癯猶傲霜、吾與此花同臭味、半生瓷瓦寄寒香、

辛巳海鷗君歸自廣島有詩依其韻記喜

老來事々解顏稀、接款猶常厭俗姿、今日迎君先一笑、半枰了得去年棋、

瀧川觀楓歸路訪平山翁

野水秋山夕照空、烏藤半日踏寒叢、風霜一路皆楓樹、看到君家越樣紅、

次韻平山翁

秋風曾記到君家、一路楓林橫又斜、相見不言人事事、野花插得白頭釵、

壬午晚秋一夕對月與二三子淺酌因海居士見際韵此夕即陰曆九月十三夜也

紫翠橫欄夕影流、蟲聲吟出半庭秋、論心韻致雲生座、洗眼清光月當樓、偶爾有朋尋往夢、嗒焉與我
對虛舟、爛架殘芋三杯酒、曾向人間不說愁、

海居士觀繪畫共進會有作見和韵却寄 時壬午十月

疎淡秋山半着紅、勝他粉本墮人工、倚欄偶憶同心友、幾點歸鴉夕照中、

同福岡文部卿飲辻氏觀月樓座間次岩崎某韻 壬午秋夕

銀河影淡入欄流、涼意詩思兩適秋、拔地百尋人在座、行空万丈月當樓、年華忽々難追馬、身世悠々不繫舟、更酌知心今夜酒、同消平素滿胸愁、

不老閣主巡教播州歸路來訪有詩次韻却和 乙酉三月三日

沙鳥烟帆舊夢蹤、恍然在目望重々、師來起我無餘說、々及高砂尾上松、

送墨水先生歸鄉聞此行將遊月瀨故及

拔脚紅塵堆裡去、梅花春色返家山、知不昨夜山翁夢、同入仙溪月瀨間、

乙酉春首

落々乾坤不役神、餘生七十又迎春、門無賀客真無事、笑對嶽蓮高臥人、

和小野湖山雙龍園詩韻二首

翰墨存餘計、買山蟬水東、夙拋塵生累、高臥古人風、同老清明世、還憐甲子同、何當訪泉石、話舊一杯中、

老占鴨東勝、青山晚節高、笑容新世俗、醉伴舊仙曹、鳥去花翻露、風來松起濤、斯人居此境、林壑亦榮褒、

養苔山房與海鷗聽水二兄飲鷗兄有詩步其韻 丁亥六月九日

世事滄桑附大觀、人間聚散一年々、芝山今日還三笑、重話芝山定何邊、

游墨水

尋詩十里度寒流、滿月荒涼百頃秋、日落蒼茫何所見、枯蘆深處一漁舟、

戊子元旦

湖海寄生人老殘、七十添五世緣闌、衣冠猶且朝宸闕、也被梅花冷眼看、

春日偶成

老去安閑世味疎、青山偃蹇入幽居、落花啼鳥天機動、靜讀韋編三絕書、

晚春遊松華山房海鷗追至有詩乃和

閑行城市外、步々遠人家、扶疎修竹逕、偏覺野趣賒、鳥語如相喚、一林入翠霞、賓主澹相對、清談情無遮、追至同心友、一笑興更加、清風生塵尾、葛巾對袈裟、喚酒又喚筆、山童辨咄嗟、詩成各一揮、春蚓又秋蛇、園中春既老、屋角纔殘葩、深樹轉幽鳥、青苔點落花、元無肉食相、豈羨馱金驢、道

誼貫真率、知足常去奢、坐久吟興盡、歸路傲草車、暮村一回顧、新月送人遐、

中元海鷗見訪有詩次韻 四首

忘言賓主對林泉、意涼宛如方外仙、高致此間何所見、青山偃蹇入樓眠、
高梧低竹影參差、一架凌霄花滿枝、相對山堂無箇事、消磨長日半枰棋、
吾家風趣似山村、竹樹扶疎半掩門、留客窗間杯忽到、暮涼燈影是中元、
林坳入夜足音稀、自有新涼上葛衣、一路清風吹不斷、柴門月色送君歸、

己丑新年

用拙由來存老愚、餘生七十六春驅、心知獨有梅花在、冷淡孤高笑對吾、

野村藤陰自美濃至喜賦

相迎一笑引松扃、交臂先呼酒半瓶、無限情懷言不盡、山添欄外幾層清、

松平正直爲余東道游松島 正直時爲宮城縣知事

入疆先見稻桑豐、民物熙和到處同、難犬相聞五十郡、青天白日頌聲隆、
幾歲江湖交契親、遠來重醉玉堂春、松洲煙景君家物、東道偏欣有故人、
八百松洲次第開、扁舟棹入小蓬來、天公巧弄倪黃筆、描出煙嵐變幻來、

風流刺史要追蹤、水色山光爲我容、欲繫畫舸何處好、巖頭橫翠一株松、
寺前寒翠萬株松、屋後巉巖百疊峯、風景留人歸不得、鐘僧已打夕陽鐘、

庚寅五月岡本黃石八十壽筵用其自壽詩韻以賀

海鶴高姿不染塵、先憂後樂總忘身、鏗鏘鳴世三千首、嬰鑠驚人八十春、芸閣堪銷閑日月、冰壺尙見
舊精神、欽君早在功名外、自得悠然道乃真、

秋晚海鷗見訪

落葉埋林徑、秋寒誰叩門、聞聲知汝至、喚酒使童溫、話熟雙情澹、詩成一字論、興闌山月上、對坐
到黃昏、

余嘗住天女山種松十數株、今已三十年矣近聞陰森成林因賦似現山主春堂

稚松曾植已爲林、雲葉煙枝數畝陰、人只貪看深疊碧、不知山客歲寒心、

畫手谷口竊山作橡栗山房圖見贈乃題其上

栗紫橡黃供素餐、半間茅屋尙心安、當初寄跡雲山碧、却在故人圖上看、

送秋月古香還日向 時國會初開世論鼎沸聞君以明春再東上故及

西南天一角、理策向鄉關、衆鳥喧爭樹、孤雲靜入山、物情多與利、時論動生姦、好去梅花節、重逢

共解頰、

辛卯人日與海鷗對酌適甚坐間戲畫梅花一枝海鷗有詩次韻

梅花心賞豈多枝、一點寒香冰雪姿、好在空山流水處、孤高不許俗人知、

聞谷如意游天橋有此寄

松影波光別一天、仙山真個富風煙、因君濟勝理吟棹、憶看曾游三十年、

如意山人次余曾題自畫墨梅詩見寄乃疊韻却似

一林寒月照形臚、老幹紛披影欲無、多謝新題故人贈、春風吹上舊時圖、
野服蕭然骨相臚、精神一點有如無、何勝更倩丹青手、寫出蓬婆醜老圖、

癸巳歲首如意山人見寄對梅花懷余詩依韻和荅

花發庭梅橫戶枝、適逢郵寄故人詩、無端茁勃香生座、正是園林雪霽時、

携山內天籟夫妻觀梅于杉田傳云此地舊係青砥藤網采邑、墳墓尙存、梅樹亦其爲所植、

一村爲產百餘家、香雪埋溪細徑斜、砥氏經綸皆著實、風流一種植梅花、

寄石黑盟臺

功名收拾與鶴閑、蟲也樂深煙水間、自是不歸吾有愧、依々七十二青山、

乙未秋游西都

世事蒼茫如夢過、重來此地感如何、城中識面人非少、却覺青山情更多、

長樂寺展賴山陽墓

寺門秋寂夕陽天、三尺古墳苔色鮮、至竟名聲埋不得、併將山紫水明傳、

展木戶松菊墓

三十六峯晴色橫、塔尖入眼自分明、那邊知是故人墓、却將風煙怕老情、

新居雜詠 十五首

三間茆屋坐風煙、此福老來初有緣、至竟身邊無所在、故人幸祝買山錢、
來逐平安水石倚、鴨東半畝買荒邱、幽人緊急閑公事、先占溪山紅葉秋、
過水村々路繚回、紅塵踈處草門開、新居幽獨無人到、只有青山入坐來、
潦倒踈慵隱几眠、期頤儘世喚頑仙、清泉白石樂生夢、一壑雲烟頤暮年、
新居日々趣加添、雲去前巒塔露尖、兀坐思詩々未就、林間畫靜鳥窺簾、
北續若王東永觀、秋深雨迳各楓丹、斜陽出戶携童去、泉石林中涉晚寒、
車塵馬路總如刪、林壑惟看雲往還、繞屋屏額皆適意、先呼若水作家山、

松杉近接南禪寺、魚版鯨鐘響草堂、午夢纔醒無個事、清風習々度長簷、
青山竊々繞柴門、寄語林間紅葉村、未到斜陽先鎖戶、人屐豈印蒼苔痕、
紅楓秋老夕陽寒、寂寞籬邊菊已殘、眠足幽窓何所思、歸雲一握度溪端、
喜我良朋有此翁、清恬高遠古人風、擬來坡老新居例、分割琅玕碧一叢、
林園新開小仙區、風竹雨蕉多老臘、有意村翁稱吾欵、蒼松移種兩三株、
新居幽寂客來稀、棲息一枝皆適宜、入座青山如熟友、顧吾偃蹇猷容姿、
山堂客散夕陽低、紫翠橫窓惹品題、坐久嗒焉無一字、却看新月印前溪、
野橋流水路三叉、淡々秋光入卉花、是我幽居誰指点、一林紅葉夕陽家、
木上座者余所携杖名也如意山人愛撫不措遂題數字而還余乃有此作
千里雲程倚爾開、曉星夕月每追陪、品題無愧烏藤子、歷遍名山勝水來、
嵐山看花有感

前度豪途三十春、尋思當日屬維新、今來老耄殊多感、重對名花說故人、

歸鄉口號

一艇秋風還故鄉、田園松老菊猶香、形容改盡無人識、唯有南山對我觴、

雲帆沙鳥畫圖間、遠近高低幾島灣、老大歸來無面識、風烟獨闕故鄉山、

靜古山莊成如意山人寄梧竹數株

高梧瘦竹贈新居、酷喜山翁移住初、好是成陰兩叢碧、延君分榻讀仙書、

伊藤春畝滄浪閣招飲席上用主人原韻

中興聖業日雄恢、加錫相公新起臺、獨岳呈晴萬古雪、群賓獻賦一時才、善隣通好國威震、尙武兼文
時運開、輔翼功成真可樂、華筵我亦醉霞杯、

嫩綠清和首夏天、追隨耆老上華筵、松間酌酒人皆醉、物外思詩意欲仙、海濶煙帆看似坐、林高雲鶴
穩如眠、風流遠引江湖客、遙夜何知漏箭遷、

丁酉歲首駿東客舍邂逅本居三島二翁

也喜開春熙日天、追隨客舍話新年、人兼風致皆清絕、岳雪海濤延二賢、

夏日戲賦余近頻感職聾故及

三竿修竹午風清、眠定幽窗忘俗情、有客來談時世事、聽爲雷沸碗鳴聲、

丁酉秋禮本師塔於大乘寺

平生夢繞翠微巔、辜負斯翁五十年、一片心香今古斷、塔前立盡夕陽天、

至福井題橡栗山房壁

橡栗山房未了因、禽聲樹影自相親、來々去々雲陳迹、四十年前舊主人、
隻影龍鍾雪滿巾、來尋陳迹八旬人、驚看紅葉青苔上、手植稚松幹作鱗、

丁酉菊秋

仙館白雲對、青山第幾重、道人時化鶴、巢向最高松、

游丹巖洞舟中讀春嶽巽嶽二公及雪江南村南陽君山四友詩卷書感

二公四友舊知心、展卷無端感慨深、風景依然人已逝、篷窗拄笏一沈吟、

丹巖洞壁間有余舊題詩乃次韻

過橋數重趁霜晴、熟路眼明溪水清、徐上小丘思句處、松風稷々舊時聲、

中秋黃石翁晚晴閣招飲席上作

山堂風趣自清幽、樹竹階前涼影浮、明月與人無寸翳、眞成作此好中秋、

次黃石翁中秋原韻

碧落無雲顯氣浮、佳招有約喜來游、好懷孰若忘年友、明月還同今夜秋、
滿地草花蟲語冷、半階梧竹露華流、吟杯各適量深淺、不似俗筵煩獻酬、

黃石翁疊韻見示乃和

也知俯仰此生浮、且與仙翁喜逸遊、舊雨無多人皓首、新晴恰值月中秋、
碧天似洗星收影、銀漢如聞水欲流、示客清詩猶白雪、調高誰肯漫賡酬、

題山內靜山肖像

百八念珠一柄槍、功勳修證兩相忘、忠誠以外無他物、串徹平生鉄石腸、

戊戌中秋與二三子小酌追懷黃石翁用去年今夜晚晴閣唱和韻

由來身世若雲浮、觸物無端感舊游、月色懷人今夜酒、蟲聲遺恨去年秋、
風騷布世三千首、齒德冠時第一流、彷彿笑譚猶在耳、可堪把盞少相酬、

懷舊次大島怡齋見示詩韻

橡栗山房倚越溪、嘗招公等樂相携、出山今日各塵土、附與風煙猿鶴棲、

長谷部氏山明水新處佳招席上次富田鷗波韻此日柄後而至故及

春光澹澹水西東、客坐桃花爛漫中、莫道吾來落人後、斜陽猶見半林紅、

秋夕

浴後呼杯坐石關、月升林杪照吾顏、千蟲唧々知何恨、不似斯心一向閑、

重游月瀨留連數日併雪月之奇得此詩

月瀨春游今二回、千枝綴玉滿山開、梅花五十年前舊、應笑衰翁得々來、
同雲埋谷路三叉、月瀨村邊就酒家、喜我衰年輕遠道、一天風雪看梅花、
默數前游五十春、溪橋山店物皆新、依然唯有梅花月、清影迎吾若故人、
溪流一道四山幽、清景賺人幾日留、前遊此興何曾見、雪月梅花畫裡舟、
梅花雪月興何如、三日留連不覺多、滿袖清香滿衣影、遲々依戀下山阿、

又三首

百里訪梅到、春寒侵幅巾、花神如有意、山館雪留人、
眞福寺何處、雪晴山月高、回巖香脉々、寒影動銀濤、
溪山雪忽霽、流水繞梅花、呼喚前灣艇、先訪賣酒家、

已亥開春

風爐斜日碧泉甜、數椀初喫舌本沾、不覺况情無關俗、一痕新月入疎簾、
馬齡八十六、頑固老風塵、心愧梅花潔、耐寒歲々新、

喜我

喜我八十六、獨步在天涯、瘦筇到月瀨、風雪看梅花、
喜我游京洛、先尋舊友家、不口一塵事、先問嵐峽花、
喜我老師友、三生栗里翁、高閑蕭澹語、自是一家風、
喜我鴨沂寓、青山隔水奇、雲煙來又去、日々入新詩、
喜我有佳友、羈窓破寂寥、前灣新月落、對話坐中宵、
喜我看花福、月瀨又嵐山、家園晚櫻發、似待主人還、
喜我處澹泊、嗜欲減年々、石瘦孤松老、伴吾曝背眠、
喜我老頑健、青苔黃葉居、灑掃當運甕、夜燈獨讀書、
喜我天分壽、閑居安一枝、清臞與梅伍、枯淡作生涯、

田中夢山見寄題山高水長圖記詩乃和酬

山水徜徉養浩然、任人呼做小頑仙、與君相識如前日、一電抹過三十年、
夢山會同丹羽仁太郎訪余於越之孝顯寺詩中故及

題瓢

好伴能忘萬古憂、煙花雪月每從游、行藏用捨皆人意、半與顏回半許由、
已亥中秋杉聽雨招飲席上

老來事事愛閑幽、此夕共凭觀月樓、縱令清光雲蔽去、喜逢八十六中秋、

寄三島中洲侍讀扈從皇太子於駿東用前年唱和韻

岳雪巍然東海天、吾皇叔聖自豐年、何論羽翼當年事、太子青宮早引賢、

寄如意山人

一院花殘春已老、流鶯聲裡坐蒼苔、斜陽猶未關門去、恐有幽人訪我來、

庚子五月臨尚齒會有此詠

優游無素業、飲啄只隨天、所愧文明日、徒過耄耋年、

同席上次怡齋見示詩韻

喘餘人喚小神仙、也上明時尚齒筵、九老耆英總多事、清風却戀北窓眠、

失題

江靜月在水、山空秋滿亭、自彈還自罷、初不要人聽、

浪華赴西村醉處招飲邂逅湖山翁喜賦

閑却湖南舊住峯、風塵老我獨龍鍾、三人同一江州客、話到平生聚散蹤、

秋夕

碧天如洗暮山晴、涼動疎簾迎月明、有約鄰翁猶未到、一庭風露坐蟲聲、

近製

回避炎薰趁曉鴉、行吟偶到故人家、滿盆風露新涼意、秋動牽牛數點花、

由利公正頃日登議院論國家經綸遂爲一冊子公於世中外傳誦谷鈇臣有詩次韻

頭顱六百各名賢、唯惜空論天下傳、獨有宣公識時務、經綸縷說上新編、

八十八自壽

老來俯仰謝塵緣、心海無波春藹然、八十八年新日月、一邱一壑舊雲煙、願逢聖世長頤壽、喜以餘生

獨樂天、圓嶠方壺何用問、三間茅屋小神山、

世味疎邊道味親、悠悠八十八年春、青泉白石前塵夢、柳綠花紅現在身、徒老願逢隆治日、安閑尚翊

太平人、山園喜見蒼苔上、手種寸松皆作鱗、

辛丑開春

笑領米年天地春、老愚只愧滿顏塵、舊朋昆季來言壽、多是貂蟬朱紫人、

喜我八十八、春風在一家、加年先何物、黃鶯話梅花、

訪春畝山人於滄浪閣不在留一詩而去

松關深鎖夕陽天、野客來敲驚鶴眠、天意未容閑處老、滄浪濯足向何邊、

七月八日諸賢歡迎湖山翁於小西湖畔長蛇亭余微恙不果約乃次翁詩韻以博粲

名士一堂皆熟知、相迎款語各呈奇、林顏湖面歡今日、鶴意猿情戀昔時、洛下風煙囊有錦、閑中日月髮無絲、聖明盡頌吾翁筆、不做當年杜拾遺、

近製

一味新涼步曉鴉、半彎殘月挂松斜、籬邊風落山家意、秋在牽牛數點花、

如意山人製紙帳使畫師描牡丹自題詩乃次韻賦贈

溪藤幾幅白瓊瑰、朵朵名葩繞夢紅、一掬溫香分半否、羨君帳裡貯春風、

諸舊故為余設壽筵於芝山紅葉館偶有此作

老去自寬風月邊、山堂鎮日伴雲眠、死生皆夢何堪說、從俗時逢米字年、

月夜次田中夢山詩韻

山高月小倚林樓、緬想東坡赤壁游、一賦乾坤傳不朽、蜉蝣陳迹亦千秋、

題山本木齋遺稿

往年住越山、文字交情熟、不為名利談、襟韻淡如菊、今日讀遺詩、音容猶在目、人琴感曷勝、夜雨

響秋竹、

壬寅元旦

苦竹倚醜石、一味作生涯、春風八十九、古梅著新花、

承陽大師六百五十遠忌勅賜額字於永平寺貫主悟由師感戴有偈乃和

山色溪聲歲月深、道風高動九重心、御毫長耀莊嚴界、功德何論長者金、

癸卯開春自壽

乖迂平生混俗塵、一林纔得寄斯身、天公何意寬吾壽、惠雨恩風九十春、

生逢清世帝城春、竹影梅香又一新、洛北詩仙丈山老、吾躋九十億其人、

梅花香動舊精神、落々乾坤不役身、九十春風無負我、安閑自信太平人、

余九十自壽詩有人傳之清國碩儒愈曲園遙寄一詩致賀乃次韻却酬

愧我虛名落世塵、誤煩海外碩儒身、幸然共享長生福、唱和東西兩國春、

疊韻寄曲園先生

林疎竹樹隔紅塵、一握雲烟養斯身、海外賴存知己客、新詩喜問我家春、

竹屋松扉不著塵、安閑唯有影隨身、一彈指頭今來去、風月依然心上春、

次細川十洲見寄詩

老去浮世得失輕、靜觀萬物覺心平、林深鳥語呼人近、水淺溪流洗月明、半架古書看未倦、一爐新茗味偏清、同逢神聖中興日、恩雨仁風保此生、

示悅巖

分陰可惜男兒事、九十頽齡愧自寬、縱令優游銷白日、猶將風月役吟魂、

癸卯中秋

中秋月色有餘清、入座嫦娥慰老情、聾耳今宵初得意、就人不要問陰晴、

孫海藏修醫學有人受治酬以金不受余聞而喜之作詩以與

修醫何爲一身榮、斯道由來尙至誠、喜爾青年心志大、不將阿堵枉其情、

甲辰歲首作 十二首之內

我齡九十一、東面開小室、天恩無物酬、起拜新日出、

我齡九十一、天性固疎逸、文武出聖人、維新逢大吉、

我齡九十一、家無千樹橘、陋巷樂清貧、安居止容膝、

我齡九十一、攝養無他術、飯後與茶前、逍遙好風日、

我齡九十一、睡味甘如蜜、真是小華胥、惟悞何日畢、
我齡九十一、日々繙書帙、双耳近來聾、客至談是筆、
我齡九十一、無事可稱述、一片去來兮、心律如法律、

偶成

東風依約野人家、聞說春來邊警加、定有廟堂籌策在、令吾閑夢到梅花、

孫山藏爲海軍士官近聞其出征賦此寄

春風萬里駕騰龍、叱咤鯨鯢意氣雄、期爾錦衣歸省日、猶留餘喘聽軍功、

甲辰春觀花于東台有感

春風不復去年遊、眼見三軍在海陬、獨步名山尋舊約、落花啼鳥惹邊愁、

寄湖山翁（死前二日）

人生九十喜同庚、久矣江湖風月盟、矧是殘齡逢盛典、一尊安得話斯情、

聞小泉翁將淨火 聖蹟

天賜榮褒已幾回、防奢欲手火高臺、墾田開道多年力、渾厚民生利用來、

皇后宮駐輦恩賜青松一株

稚松嫩葉春松樹、自帶瑞雲植幹姿、雨露恩情初種日、已期千歲鶴來時、

癸巳春日壽小泉翁古稀

家對瀛洲一小天、人間清福勝神僊、厚生利用無他願、滿腹經綸七十年、

三樹坡小寓

風趣清真情亦真、鉄心
高軒時伴褐衣人、秋琴
一欄流水半灣月、雪爪
洗盡都城滿面塵、閑叟

題達磨畫像

達磨大師坐像一幀、係心越和尚畫讚、道貌踴々、眼光射人、頗覺有異、余多年隨身供養、今舉以附春堂力生、々其香華勿怠、

題鐵心畫游鷺圖

古人云、使筆不可反爲筆使、使墨不可反爲墨使、是蓋謂無滯也、右軍喜鷺、亦意在取其轉項如人之執筆、轉腕以結字歟、頃海陽寄鉄大夫所畫游鷺圖一幀、以素題辭於衲、鷺凡五隻、有交項啄者、有延項顧者、有縮項欲刷者、以其自在轉腕之筆、寫彼轉項之態、真能使筆又能使墨者也、大夫文章氣節世之所知、傍能書畫、蓋此圖有所得以自試何如耶、

題衆盲模象圖庚辰秋日爲船越君時將有事于魯清文中故及

衆盲模象、其觸耳者、言象如箕、其觸腹者、言象如甕、見者無不笑、然目達者觀之、天地即一象也、夫爲亞爲歐鷹揚龍變、互抱觀觀、而以爲絕大事業、亦模象耳、予對此圖有感遂書、船越君眼光如炬以爲何如、

題蝦蟆研蓋

余昔遊洛北詩仙堂、觀丈山翁所藏殘月硯、所謂十愛之一者、而織工近奩具、今觀柴崎氏所藏此硯、

背有六六山人字、蓋亦翁遺物、其形似蝦蟆、摩挲有古色、頗雅、使余鑒、則寧舍彼取此、不知翁何以最愛彼、乃一笑而題、

題天橋立圖贊

衲性愛山水、凡萬衆森羅、皆以爲山水看矣、詎嘗峯巒蒼々與波濤洶々而已哉、然其看也、固絕對待、眼底不置一物、則逆來順往、所觸忽然出無邊雲煙、是衲山水觀物之訣也、至若夫遺塵氣於雲月、忘世慮於溪山者、不足與論也、鉄公近開大活眼、喜品評山水、今觀天橋立圖贊、命意酷與衲合、因不得不贊一語於其後也、

佛氏所謂一草一木皆有佛性者、儒家所謂道在瓦石、在溺屎者、雪公今借山水、拈出來妙、

題梅心舍圖

梅心舍圖一幀、倩聞泉畫史、寫梅花兩三株、竹樹一二叢、以贈舍主梅心翁、不知、果稱其舍之趣與主人之意否、

題半井晚香詩後

半井晚香、以丁憂中所得數十篇、索衲批評、受而讀之、則慕君憶親、語々皆哀、使人感懷不已、然而衲也素非解詩者、何以當此素哉、此足下欲寄衲歟、然歎則氣作、急則計生、一氣業畢以返之、不

知足下首肯否焉、甲子抄冬念八日雪爪復贊、

題赤穗義士巔末之圖繪

赤穗義士巔末之圖繪二卷、寬延年間高井清淳所作、其家世傳之、余以明治十六年七月四日來觀、畫時距今百三十餘年、筆法雖酷不雅、展觀之際頻發悲壯之感、亦足以徵當時之士氣也、

題會稱松香合外函

會稱松香合、方三四寸、背款河野米翁彫、古色可愛也、吉祥禪師以甲申年巡教于播州、偶獲此物、乃贈余、謂曰翁弄翫終年、則回互宛轉、亦以還寸衲、余笑記其言、以爲百年後之左券、明治十八年乙酉春日、

堀嘉助携乃父嘉七翁肖像來請贊於衲、々知翁久矣、因不辭而題、丁巳歲晚

此翁奇傑、經濟撐腹、赤手白貧、無儲石蓄、斤買朱販、暴致錢穀、翁父固賤、爲人從僕、糊口客土、初闢鞠育、僅贖敗劍、其室解剝、贈之千里、翁喜感伏、吉禮必用、因傳其屋、奉已儉節、愛人恩篤、專信佛乘、切惡薄俗、心豁身健、外和內睦、獻官千金、特賜獎擢、養山富窓、久水逸壑、嗚呼偉哉、天壽天祿、子孫百世、宜分斯福、

刻亦奇錄序

茫茫宇宙，誰爲知己，鉄心大夫其人也，頃寄亦奇錄三卷蓋其東役記也，首置天地落眉間一語，忽而讀之，如大言無味者，細嚼則五味皆具焉，能使兀々山漫々海一々放大光明，何等落想，吾徒平生跋涉山河，而問其跡，則雲行水流，一味蕭然耳，安得若此大滋味耶，顧此書非徒可蠶之於篋底者，因竊授劑剛氏，公之於世，欲以使方今蓬頭突鬢者味此大滋味也，而竊刻之罪，老僧甘喫一百五十烏藤而已。

跋竹田墨梅

竹田墨梅并詩、紙本豎幅、上有山陽題詞、竹田畫爲逸品、詩亦枯澹有味、山賜題詞、善識能悉竹田風采、余也昔一貧如洗、身邊無復長物、唯此幅以余所愛常自隨焉、往年在越、時麻疹流行、遂典之以濟窮民醫藥、會維新兵興、世局滄桑、不復知其落誰手、今且三十年矣、頃者越人牧野洋至、談偶及是事、洋曰幅今爲我有、以爲公舊藏逾貴、余笑曰歸子家猶藏吾家、乃跋一言以自釋焉、

與秋月古香書

啓年華匆匆、維新京洛之游、至此便成隔世、况居離千里、夢跡茫茫、然思高誼、未嘗一日忘於懷、曩者託海鷗郵致蕪稿二回、閣下賜高評、語語絕妙、偶與春岳公話次出此稿相際、公喜氣動眉間、而閣下音容躍出紙上、頓使余有三人與剪燭鴨沂之想、冷灰爲之再燃、欣慕益切、爾後欲作一字布謝、

遲延至今日、老懶真可愧、閣下寄海鷗書中曰、三四年前入京訪余草廬不面、婢無狀、懈通貴刺、誤致此大不敬、追悔不及、遺憾亦大、余追年衰老、無所用心、常放浪山水間、聊自遣耳、拙著山高水長圖記一本、取名於閣下席上容堂公所贈之語、於閣下亦墨緣有在焉、因茲抄數篇請刪正、幸勿吝雌黃、嗟乎人世聚散有時、此圖記一本欲存與故人聚首情話之□□□□之態於百年也、時維落花啼鳥臨裁此紙、引領西南、悵然久之、已丑四月廿三日、

又與秋月古香書

曩接教音、因審閣下平生筆研清娛、說書講史、薰陶一鄉子弟、所謂出處皆不忘國家者耶、可欽可賀、特賜拙著圖記之評批、感佩何勝、輦下人物之淵藪、問字質文不乏其人、而今頻仰之西南數百里外者、蓋有以、至如記中法教建議數章、則維新之初、於其實實閣下所與而能知也、故又煩刪正、幸勿斥望蜀、聞閣下頃者投時機首倡地方政黨之團結、眞爲有爲人也、老生雖潦倒日加、遭閣下重入京、追隨墨坨風月佳處、話舊雨之情、自揣余生必當復有此日、渴思之至、非筆墨所能盡也、十萬與時加愛、頓首、

復佐田白茅書

復白茅文宗足下、余暮年自寬、無所用心、近偶有山高水長圖記之著、舉贈之同人、凡幾十百、而以